

落合町埋蔵文化財発掘調査報告 4

郡 遺 跡  
須 の 内 遺 跡  
古 市 場 遺 跡

県営ほ場整備事業（坦い手育成型）  
鹿田地区に伴う発掘調査

2004

落合町教育委員会

# 序

落合町は岡山県の中北部に位置し、かつては第1次産業従事者の割合が最も多い、農林業の盛んな地域でした。落合町の農林業は水田耕作を中心とするものですが、農家の耕作面積は50a以上99a未満の農家が最も多く兼業の小規模農業が中心です。また、落合町は中山間地域であるため農業後継者の不足は深刻で、国の減反政策とも相俟って年々休耕田が増えています。そういう状況の中で最後の補助事業として大字鹿田、大字栗原地内に県営鹿田地区は場整備事業（担い手育成型）が計画されました。これは地域単位で耕地を維持管理運営していく組織つくりもかねての取り組みでした。

ほ場整備事業は1～3工区に分けて実施する計画で、周知の遺跡として1工区は郡遺跡、須の内遺跡が、3工区は古市場遺跡が所在することがわかつっていました。そこで落合町教育委員会は事業主体者である岡山県真庭地方振興局農林水産事業部耕地課、落合町地域整備対策室に設計変更を申し出ましたが全面的な設計変更是不可能で発掘調査は避けられない状況になりました。周知の遺跡は上記3箇所ですが、2工区についても遺跡の有無を確認するためと周知の遺跡部分については本調査のための積算資料とするために平成9年度と12年度に試掘及び確認調査を実施しました。その結果、郡遺跡は弥生時代～平安時代にかけての遺跡、須の内遺跡は中世を中心とする遺跡であることがわかり、古市場遺跡は弥生時代～中世に至る時期の集落跡が存在することがわかりました。

発掘調査は確認調査も含めて平成9年度から実施され、平成11年度以降は国庫補助事業として平成15年度まで7カ年に渡って実施してきました。本発掘調査報告書はその発掘調査の成果を収めたもので、今後の文化財保護と歴史研究の一助になれば幸いに思います。

また、発掘調査の結果、郡遺跡は奈良～平安時代に至る官衙遺跡であることがわかり、重要遺構に関しては切土による削平とされていた部分も設計変更により、埋め土保存されることが出来ました。一部の重要遺構部分だけとはいえ、埋め土による保存が出来たことは埋蔵文化財保護の立場からも大きな成果であったと大変喜ばしく思います。

最後になりましたが発掘調査の実施並びに本報告書を刊行するに当り、岡山県真庭地方振興局、岡山県教育委員会をはじめ地元の関係各位から賜りました御指導と御尽力に対し、深く感謝の意を表します。

平成16年3月1日

落合町教育委員会

教育長 大倉 貢

## 例　　言

1. 本書は、落合町大字鹿田に所在する郡遺跡、須の内遺跡及び落合町大字栗原に所在する古市場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 3遺跡は県営農業基盤整備事業（担い手育成型）鹿田地区に伴い、岡山県真庭地方振興局の委託により落合町教育委員会が発掘調査を実施した。
3. 発掘調査は落合町教育委員会職員切明友子が担当して、郡遺跡・須の内遺跡の確認調査は平成9年10月22日から12月19日まで実施した。郡遺跡の発掘調査は平成10年11月9日から平成11年1月22日までと、平成11年5月12日から平成12年3月21日まで実施した。須の内遺跡は平成13年6月11日から平成14年3月29日まで実施した。古市場遺跡の確認調査は平成12年10月19日から平成13年2月28日まで実施し、発掘調査は平成14年6月24日から平成15年3月31日まで実施した。なお調査面積は郡遺跡9,600m<sup>2</sup>、須之内遺跡14,000m<sup>2</sup>、古市場遺跡12,000m<sup>2</sup>である。
4. 発掘調査、報告書作成に際しては岡山県教育庁文化財課松本和男、尾上元規の各氏から有益なご教示・ご指導を得た。記して感謝の意を表す。
5. 本書の執筆・編集は、切明が担当し、石器については岡山理科大学の白石純が担当した。遺物の写真撮影は小松幸の協力を得た。
6. 出土遺物の洗浄・復元は大月悟子、安田佳代、藤田久美子が行い、遺構・遺物の実測・トレースは切明、安田、酒井将史が行った。拓本は切明が行った。
7. 出土遺物ならびに図面・写真類は、落合町教育委員会に保管している。
8. 本報告書に記載された高度値は海拔高であり、遺構図の方位は磁北である。
9. 本報告書で使用した地形図は落合町発行のものを一部改変している。

# 本文目次

## 卷頭図版

### 序

### 例　言

### 目　次

第1章　調査及び報告書作成の経緯と体制	1
第1節　調査に至る経緯	1
第2節　調査の概要	2
第3節　調査の組織	6
第2章　地理的・歴史的環境	9
第3章　確認調査	12
第1節　確認調査の概要	12
第4章　郡遺跡（二次調査・三次調査）	23
第1節　発掘調査の概要（平成10年度）	23
第2節　発掘調査の概要（平成11年度）	26
第3節　遺構・遺物	27
第4節　まとめ	63
第5章　須の内遺跡（二次調査）	66
第1節　発掘調査の概要	66
第2節　遺構・遺物	68
第3節　まとめ	92
第6章　古市場遺跡（二次調査）	94
第1節　発掘調査の概要	94
第2節　遺構・遺物	96
第3節　まとめ	131

## 写真図版

### 報告書抄録

## 卷頭図版目次

卷頭図版1	1. 郡遺跡 全景（南西から） 2. 郡遺跡 建物1～5（南から）
卷頭図版2	1. 郡6区P-1出土 墨書き土器 2. 郡6区出土 軒丸瓦 3. 郡6区出土 軒平瓦
卷頭図版3	1. 古市場遺跡 全景（北から） 2. 古市場4区 竪穴住居1
卷頭図版4	1. 古市場5区出土 繩文土器（1） 2. 古市場5区出土 繩文土器（2） 3. 郡遺跡出土石器

## 挿図目次

第1図 調査位置図.....	1	第24図 栗原No. 18トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	22
第2図 工事範囲と調査区(S=1/20,000) .....	8	第25図 郡遺跡調査区域図(S=1/2,500) .....	23
第3図 周辺遺跡分布図(S=1/20,000) .....	11	第26図 郡遺跡構造配置図(S=1/500) .....	24
第4図 1・2工区トレーナー位置図 (郡・須の内遺跡) .....	15	第27図 建物8平・断面図(S=1/80) .....	25
第5図 3工区トレーナー位置図(古市場) (S=1/5,000) .....	16	第28図 建物9平・断面図(S=1/80) .....	25
第6図 鹿田No. 1トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	17	第29図 郡遺跡調査区域図(S=1/2,000) .....	26
第7図 鹿田No. 2トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	17	第30図 郡1区構造配置図(S=1/400) .....	27
第8図 鹿田No. 5トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	17	第31図 郡3区構造配置図(S=1/400) .....	28
第9図 鹿田No. 6トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	17	第32図 建物1, 2平面図(S=1/80) .....	28
第10図 鹿田No. 8トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	18	第33図 建物1柱穴断面図(S=1/40) .....	29
第11図 鹿田No. 10トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	18	第34図 建物2柱穴断面図(S=1/40) .....	29
第12図 T-2ビット内土器出土状況図 (S=1/10) .....	18	第35図 建物3柱穴断面図(S=1/40) .....	29
第13図 栗原No. 2トレーナー断面図 (S=1/100) .....	19	第36図 建物3平面図(S=1/80) .....	30
第14図 栗原No. 7トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	19	第37図 建物4平面図(S=1/80) .....	30
第15図 栗原No. 10トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	19	第38図 建物5平面図(S=1/80) .....	30
第16図 栗原No. 11トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	20	第39図 建物4柱穴断面図(S=1/40) .....	31
第17図 栗原No. 12トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	20	第40図 建物5柱穴断面図(S=1/40) .....	31
第18図 栗原No. 14トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	20	第41図 郡4区構造配置図(S=1/400) .....	32
第19図 栗原No. 9トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	21	第42図 建物7平面図(S=1/80) .....	32
第20図 栗原No. 15トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	21	第43図 建物7柱穴断面図(S=1/40) .....	33
第21図 栗原No. 19トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	21	第44図 郡5区構造配置図(S=1/400) .....	33
第22図 栗原No. 16トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	22	第45図 建物6平面図(S=1/80) .....	34
第23図 栗原No. 17トレーナー平・断面図 (S=1/100) .....	22	第46図 建物6柱穴断面図(S=1/40) .....	35
		第47図 郡5区出土遺物実測図 (S=1/2, 1/4) .....	36
		第48図 郡6区構造配置図(S=1/400) .....	38
		第49図 6区土壤平・断面図(1) (S=1/40) .....	45
		第50図 6区土壤平・断面図(2) (S=1/40) .....	46
		第51図 6区土壤平・断面図(3) (S=1/40) .....	47
		第52図 6区土壤平・断面図(4) (S=1/40) .....	48
		第53図 6区土壤平・断面図(5) (S=1/40) .....	49
		第54図 6区土壤平・断面図(6) (S=1/40) .....	50
		第55図 6区土壤平・断面図(7) (S=1/40) .....	51
		第56図 6区土壤平・断面図(8) (S=1/40) .....	52

第57図	6区土壤平・断面図(9) (S=1/40).....	53		(S=1/4) .....	84
第58図	6区出土遺物実測図(1) (S=1/4) .....	54	第89図	7区出土遺物実測図(1) (S=1/4) .....	85
第59図	6区出土遺物実測図(2) (S=1/4) .....	55	第90図	7区出土遺物実測図(2) (S=1/4) .....	86
第60図	都7区遺構配置図(S=1/400)…	56	第91図	8区出土遺物実測図(S=1/4)…	87
第61図	建物10平面図(S=1/80) .....	56	第92図	須の内10区遺構配置図 (S=1/200) .....	88
第62図	建物10柱穴断面図(S=1/40) …	57	第93図	10区出土遺物実測図(S=1/4)…	88
第63図	郡遺跡出土硯実測図(S=1/4) …	58	第94図	須の内14区遺構配置図 (S=1/200) .....	89
第64図	郡遺跡出土石器実測図(1) .....	60	第95図	14区出土遺物実測図(S=1/4)…	89
第65図	郡遺跡出土石器実測図(2) .....	61	第96図	須の内遺跡出土石器実測図 .....	90
第66図	郡遺跡出土石器実測図(3) .....	62	第97図	古市場遺跡調査区域図 (S=1/2,000) .....	93
第67図	郡遺跡官衙関係遺構配置図 (S=1/1,500) .....	65	第98図	古市場1区・2区遺構配置図 (S=1/200) .....	96
第68図	須の内遺跡調査区域図 (S=1/2,000) .....	66	第99図	2区出土遺物実測図(S=1/4)…	99
第69図	須の内1区遺構配置図 (S=1/300) .....	68	第100図	古市場3区遺構配置図 (S=1/200) .....	97・98
第70図	1区出土遺物実測図(S=1/4) …	68	第101図	井戸平・断面図(S=1/40) .....	100
第71図	須の内2区遺構配置図 (S=1/300) .....	69	第102図	3区出土遺物実測図(S=1/4)…	100
第72図	2区出土遺物実測図(S=1/4) …	70	第103図	古市場4区遺構配置図 (S=1/200) .....	101・102
第73図	須の内3区遺構配置図 (S=1/200) .....	71・72	第104図	住居1平・断面図(S=1/60) …	103
第74図	須の内4、5区遺構配置図 (S=1/200) .....	71・72	第105図	住居1出土遺物実測図(S=1/4) 103	
第75図	3区柱穴平面図(S=1/60)…	73	第106図	住居2平・断面図(S=1/60) …	104
第76図	3区出土遺物実測図(S=1/4) …	73	第107図	住居2出土遺物実測図(1) (S=1/4) .....	106
第77図	4区出土遺物実測図(S=1/4) …	74	第108図	住居2出土遺物実測図(2) (S=1/4) .....	107
第78図	鍛冶炉平・断面図(S=1/80) .....	75	第109図	土壤 出土遺物実測図(S=1/4) 107	
第79図	鍛冶炉出土遺物実測図(S=1/4) …	75	第110図	4区出土遺物実測図(S=1/4)…	108
第80図	5区出土遺物実測図(S=1/4) …	76	第111図	古市場5区遺構配置図 (S=1/200) .....	109
第81図	須の内6区遺構配置図 (S=1/200) .....	77・78	第112図	豎穴住居3・4平・断面図 (S=1/60) .....	110
第82図	石組土壤平・断面図(S=1/40) …	79	第113図	豎穴住居3・4出土遺物実測図 (S=1/4) .....	111
第83図	石組土壤出土遺物実測図 (S=1/4) .....	79	第114図	5区出土繩文土器実測図 (S=1/2) .....	111
第84図	6区出土遺物実測図(S=1/4) …	80	第115図	古市場6区遺構配置図 (S=1/250) .....	113
第85図	須の内7区遺構配置図 (S=1/200) .....	81・82	第116図	豎穴住居5平・断面図 (S=1/60) .....	113
第86図	須の内8区遺構配置図 (S=1/200) .....	81・82			
第87図	7区焼土平・断面図(S=1/30) …	84			
第88図	焼土及び周辺出土遺物実測図				

第117図	竪穴住居5出土遺物実測図 (S=1/4) .....	114	第129図	竪穴住居9出土遺物実測図 (S=1/4) .....	118
第118図	6区出土遺物実測図 (S=1/2, 1/4) .....	114	第130図	竪穴住居10平・断面図 (S=1/60) .....	121
第119図	古市場7区遺構配置図 (S=1/250) .....	115	第131図	8区出土遺物実測図 (S=1/2, 1/4) .....	122
第120図	土壤1平・断面図(S=1/30) .....	115	第132図	古市場9区・10区遺構配置図 (S=1/250) .....	123・124
第121図	土壤1出土遺物実測図(S=1/4) .....	115	第133図	竪穴住居6平・断面図 (S=1/60) .....	125
第122図	7区出土遺物実測図 (S=1/2, 1/4) .....	116	第134図	竪穴住居6出土遺物実測図 (S=1/4) .....	126
第123図	古市場8区遺構配置図 (S=1/250) .....	119・120	第135図	竪穴住居7平・断面図 (S=1/60) .....	126
第124図	竪穴住居11平・断面図 (S=1/60) .....	119・120	第136図	竪穴住居7出土遺物実測図 (S=1/4) .....	127
第125図	竪穴住居11出土遺物実測図 (S=1/4) .....	117	第137図	9区出土遺物実測図(S=1/4) .....	127
第126図	竪穴住居8平・断面図 (S=1/80) .....	117	第138図	溝平面図(S=1/130) .....	128
第127図	竪穴住居8出土遺物実測図 (S=1/4) .....	118	第139図	溝出土遺物実測図(S=1/4) .....	128
第128図	竪穴住居9平・断面図 (S=1/60) .....	118	第140図	9区出土遺物実測図(S=1/4) .....	129
			第141図	古市場遺跡出土石器実測図 .....	130

## 表目次

表1 郡遺跡出土石器観察表.....	59
表2 須の内跡出土石器観察表.....	91
表3 古市遺跡出土石器観察表.....	130
表4 土器観察表.....	133～147

## 図版目次

図版 1	1. 郡遺跡 遠景(南東から) 2. 建物8(北から) 3. 建物9(北から)	3. 郡4・5区 建物6・7(北から)
図版 2	1. 郡3区 建物1(北から) 2. 郡3区 建物2(北から) 3. 郡3区 建物3(南から)	4. 郡5区 建物6(西から) 2. 建物6柱穴 3. 郡4区 建物7
図版 3	1. 郡3区 建物4(北から) 2. 建物4柱穴 3. 郡3区 建物5(南から)	図版 6 1. 建物7柱穴 2. 郡7区 建物10 3. 建物10
図版 4	1. 建物5柱穴(1) 2. 建物5柱穴(2)	図版 7 1. 建物10柱穴 2. 郡5区 溝2 3. 郡6区 土括検出状況
		図版 8 1. 郡6区 土括検出状況

	2. 郡6区 土括	2. 3区井戸
	3. 郡6区 土括88	3. 竪穴住居1・2
図版9	1. 郡6区 石組土括	1. 竪穴住居2(検出中)
	2. 郡6区 軒丸瓦出土状況	2. 4区(北東から)
	3. 現地説明会	3. 竪穴住居2(東から)
図版10	郡遺跡出土土器	図版27 1. 5区(北西から)
図版11	郡遺跡出土土器	2. 竪穴住居3・4(検出中)
図版12	郡遺跡出土硯	3. 竪穴住居3・4
図版13	郡遺跡出土石器	図版28 1. 竪穴住居3柱穴内
図版14	1. 須の内1区 全景	土器出土状況
	2. 須の内2区 全景	2. 6区(東から)
	3. 須の内3区	3. 竪穴住居5
図版15	1. 須の内3区 柱穴列	図版29 1. 7区(西から)
	2. 聞丸方形 柱穴	2. 7区土壙1
	3. 須の内4区・5区	3. 8区・9区(西から)
図版16	1. 須の内5区 鍛冶炉	図版30 1. 竪穴住居8(検出中)
	2. 鍛冶炉土層断面	2. 竪穴住居8(検出中)
	3. 須の内6区	3. 竪穴住居8(検出中)
図版17	1. 須の内6区	図版31 1. 竪穴住居11
	2. 須の内6区	2. 竪穴住居9
	3. 6区中世墓	3. 竪穴住居10
図版18	1. 須の内7区	図版32 1. 竪穴住居6(検出中)
	2. 須の内7区(東)	2. 竪穴住居6(検出後)
	3. 須の内7区 焼土	3. 竪穴住居7
図版19	1. 須の内8区	図版33 1. 10区(北から)
	2. 須の内10区	2. 10区鍛冶遺跡(1)
	3. 須の内14区	3. 10区鍛冶遺跡(2)
図版20	須の内遺跡出土土器(1)	図版34 古市場遺跡出土土器(1)
図版21	須の内遺跡出土土器(2)	図版35 古市場遺跡出土土器(2)
図版22	須の内遺跡出土土器(3)	図版36 古市場遺跡出土土器(3)
図版23	須の内遺跡出土土器(4)・石器	図版37 古市場遺跡出土土器(4)
図版24	1. 古市場2区	図版38 古市場遺跡出土土器(5)
	2. 古市場3区(下段)	図版39 古市場遺跡出土土器(6)
	3. 古市場3区(上段)	図版40 古市場遺跡出土土器(7)・石器
図版25	1. 3区井戸土層断面	



# 第1章 調査および報告書作成の経緯と体制

## 第1節 調査に至る経緯

落合町は総面積147.92km<sup>2</sup>のうち山林を除く面積は38.75km<sup>2</sup>で26.2%である。さらにその内の耕作地は14.31km<sup>2</sup>で9.7%を占める。上記統計が示すように落合町は農林業の町である。落合町内の大部分の地域では既に農業基盤整備事業は完了しているが、国による減反政策の中、圃場整備事業は終焉を向かえ、最後の補助事業として落合町内で未実施の地域である鹿田、栗原地区で県営圃場整備事業（担い手育成形）が実施される計画が平成9年5月に持ち上がった。

今回圃場整備事業が計画された鹿田、栗原地区は落合町の西に位置し、北房町から東流する備中川の下流域に開けた河岸段丘に立地している。

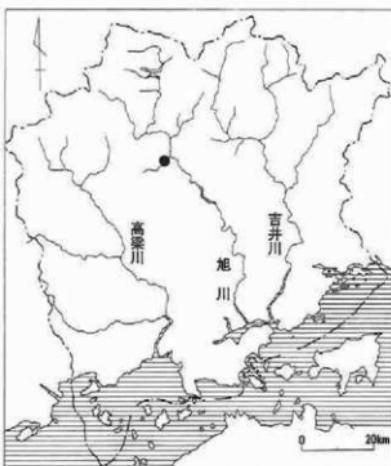
鹿田1工区には周知の遺跡として郡遺跡、須の内遺跡が、鹿田3工区には栗原散布地が存在することがわかつていた。そこで落合町教育委員会は事業主体者の岡山県真庭地方振興局、落合町圃場整備事業担当課の地盤整備対策室、岡山県教育委員会文化課の4者で協議し、以下のことを取り決めた。鹿田1工区については本調査の基礎資料を得るために確認調査を実施すること、鹿田2工区については周知の遺跡は無いが、遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施すること、鹿田3工区については1工区同様、栗原散布地の確認調査を実施することである。

従来、県営の圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の確認調査については県文化課で対応することになっているが、今回の場合は工事開始までの期間が短いこと、年度途中であること、県内各地で圃場整備事業が計画されているため県教委に人員の余力がないことが問題となった。

そこで、落合町教育委員会では埋蔵文化財専門職員がいることから、工事の予定を当初通りに実行するためには落合町で対応することしかないと判断した。これを受けて、落合町教育委員会は県教委文化課の指導を受けて確認調査を実施することとなった。

確認調査を受けての本発掘調査は当初の予定では平成10年度と平成11年度に郡遺跡、平成12年度に須の内遺跡、平成13年度に栗原地区的確認調査、平成14年度に栗原地区的本発掘調査を予定した。

しかし、郡遺跡の発掘調査を実施したあとは緊縮財政の影響で、予算が計画通りには付かず、須の内遺跡の工事が平成14年度に延期された。そのため、平成12



第1図 調査位置図

年度には栗原地区の確認調査を実施し、須の内遺跡の本発掘調査は平成13年度に実施することにした。平成14年度は平成12年度に実施した栗原地区的確認調査の結果古市場部分について遺跡があることが確認されたため古市場遺跡として本発掘調査を実施した。

さらに、平成15年度は今回の圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の最終年度であるためこれまで発掘調査を実施した遺跡の整理作業及び報告書作成を実施した。

また、調査費については、確認調査は文化財保護サイドでの対応という原則を踏まえ、落合町教育委員会で対応することとした。その後の本発掘調査については原因者負担の原則に基づいて岡山県真庭地方振興局と委託契約を結び委託金で対応した。さらに、農業基盤整備事業については農林水産省と文化庁の覚書により農家負担分については文化庁の補助事業として対応することができることから落合町教育委員会は調査費の12.5%については国庫補助事業で対応した。

## 第2節 調査の概要

### (1) 確認調査

工事開始は平成11年度からの予定であるが、一部10年度に着工される部分があるため、収穫が終了した平成9年10月22日より鹿田1工区の確認調査と2工区の試掘調査を開始し、12月19日に終了した。

確認調査の目的は対象地域内の遺跡の広がりと時期を主眼に設定するが、今回の場合は年度途中であるために十分な予算を充てることができなかつたとの、所有者への説明が不十分だったために各場も大豆等の作付けがされているためにトレンチの設定位置にはかなりの制約があった。

従って鹿田1工区では10本のトレンチ、鹿田2工区では僅か2本のトレンチを設定できただに過ぎなかつた。

確認調査の結果、鹿田1工区内の郡遺跡は弥生～奈良時代の遺跡があること、しかも極小片であるが硯が1点出土したことである。鹿田1工区内の須の内遺跡は中世の遺跡であることが判明した。2工区部分については包含層にも遺物はほとんど無く、遺構も確認されなかつた。以上の結果を踏まえて、郡遺跡・須之内遺跡の本調査を実施することが決まったが、落合町教育委員会は岡山県真庭地方振興局、岡山県土地改良連合会、落合町地域整備対策室と出来るだけ発掘調査面積を減らすよう協議を行つた。しかし、設計変更の不可能な部分もあり、切土になる部分については止むをえず記録保存の措置をとるために平成10年度より発掘調査を実施することになった。

鹿田3工区の栗原地区についての確認調査は当初平成13年度に実施予定であったが工事予算の関係から平成12年度に変更された。3工区は大字栗原字余河内と字古市場にまたがつておらず、栗原散布地として周知の遺跡になつてゐたが、詳細については把握できていなかつた。今回の場合は既に概略の設計図ができていたため、切土になると予想される部分を中心トレンチを設定した。

確認調査は平成12年10月19日に着手し、平成13年2月28日に終了して、設定したトレンチは字余河内については3本、字古市場については15本である。その結果は余河内部分については遺物もほとんど無く遺跡は存在しなかつたが、古市場部分については島の奥川の両岸段丘状に弥生後期～古墳時代にかけての集落が想定されるような遺構、遺物が出土した。これにより本発掘調査は古市場部分についてのみ実施することとし、遺跡名も古市場遺跡とした。本発掘調査は当初の予定通り設計変更

にもかかわらず切土になる部分についてのみ平成14年度に実施することとなった。

## (2) 郡遺跡の発掘調査

確認調査を受けての本発掘調査は国庫補助金の関係もあって平成11年度に実施予定であったが、工事の都合上急遽平成10年度に着手する個所が生じた。そのため、その部分については国庫補助対応ではなく、原図者負担の原則に基づいて事業主である真庭地方振興局が全額経費負担をするということで、落合町教育委員会が対応することとした。

この発掘調査は平成10年11月9日に着手し、平成11年1月22日に終了した。発掘調査部分は郡遺跡東端部分に位置し、掘立柱建物2棟と鉄津溜まり、溝が1本検出された。掘立柱建物は2棟とも主軸を南北方向に持ち、同一方向に建てられていた。また、掘立柱建物周辺からは円面硯が検出され、郡遺跡は単なる集落遺跡ではないことが想定された。

また、溝からは弥生中期初めの土器と石包丁、磨製石斧、サヌカイトのスクレイパーが出土しており、弥生時代の構造も存在することがわかった。

平成11年度の郡遺跡の調査は平成9年度に確認調査を実施した結果を基に平成11年5月12日より開始し、平成12年3月21日に終了した。調査面積は9,600m<sup>2</sup>である。

発掘調査は切土部分になるところだけ実施するため、郡遺跡全体に及ぶものではなく飛び飛びの状態での調査となり7区画に分けて実施した。

最初に着手したのは3区で昨年の調査実施地区の西である。3区の東半分のところからは合計5棟の掘立柱建物が検出された。5棟のうち4棟は総柱建物で倉庫と思われる建物が検出された。更に調査を進めていくと4区からは2間×4間の掘立柱建物1棟が、5区からは2間×5間で、北と東に庇を持つ掘立柱建物1棟が検出された。この5区からは均整唐草紋の瓦当を持つ軒平瓦が1片出土した。

平成11年10月初めの時点で郡遺跡は寺院もしくは官衙遺跡のしかも、地名からして真島郡衙の可能性が高いと判断されたため、県教委文化課に連絡し、指導を仰いだ。そこで、10月26日に現地に岡山県真庭地方振興局耕地課、岡山県教育委員会文化課、落合町役場農林課、落合町教育委員会の4者が集合して遺跡の保存と今後の調査について協議した。教育委員会は切土部分についても盛土に設計変更するよう要請した。また、現況で盛土になる部分についても建物が存在する可能性の個所については平成12年度の前半で確認調査を実施できるよう工事の着手個所の順番を変更するよう要請した。しかし、掘立柱建物が所在する個所は圃場整備を実施する部分の内最も高い位置にあり、切土部分も盛土にすることは困難ということで保存については保留された。

一方、地域住民に対しては新聞による広報を行うとともに、11月14日（日）に現地説明会を開催した。町内はもとより、郡内からの見学者も多く、約200名の参加者があった。これ以外にも随時見学者が訪れ、地元の木山小学校をはじめ、美川小学校、川東小学校の生徒も社会科の授業として見学に来た。

11月29日には6区の西端から蓮華文の軒丸瓦の破片が出土した。更に、年が明けて1月には最後の調査区の7区からもう1棟掘立柱建物が検出された。

1月31日に再び、落合町教育委員会は岡山県教委文化課、真庭地方振興局耕地課、落合町役場農林課の4者による協議を行った。再度、郡遺跡は真島郡衙の可能性が高く、一般的な集落跡と違ってどこでも出土する遺跡ではないことを強調し、保存措置を講ずるよう要請した。3月9日に3回目の協議を行った。今回の協議には、設計を担当している岡山県土地改良連合会も参加し、保存措置を講

するという前提のもとに具体的に指定標高を決める内容となった。先述しているように、5区・7区の造構は標高の最も高い部分に在り、盛土にも限界がある。従って、盛土は造構保存に必要な最低ラインとして現造構検出面より30センチ以上とすることで合意した。

また、12年度の事業計画として、8月までに盛土部分の造構確認調査を実施すること、10月以降に鹿田3工区（栗原地区）の確認調査を実施することを了解した。

保存措置が採られることになった建物については平成12年度の盛土部分の確認調査が終了した段階で川砂で覆うこととし、当面はビニールの保護シートを掛けただけの状態で本年度の調査を終了した。

#### （3）須の内遺跡の発掘調査

平成9年度に確認調査で設定したトレンチは僅か4本で、その内本調査対象部分は3本である。しかし、須の内遺跡は昭和49年に中国縦貫自動車道（以下中継と略す）の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しており、確認トレンチは少ないものの、遺跡の時期等についてはある程度予想できるため、多くは設定しなかった。今回の発掘調査対象区域はその南側に位置する。発掘調査は平成13年6月11日に着手し、平成14年3月29日に終了した。

中継の発掘調査は須の内集落の東に隣接する上寺地区から南へ横部地区、大平寺地区と3地区に亘っているが、今回の発掘調査対象地域は上寺地区の東へ続く丘陵上である。中継の発掘調査時には、上寺地区からは古墳時代の堅穴住居と中世の時期の掘立柱建物、井戸、鍛冶炉などが検出されている。今回の発掘調査もそれを参考に実施した。

遺跡は須の内集落の東側前面に伸びる丘陵上に存在するため、切土になる部分が多く、調査面積は14,000m<sup>2</sup>に及んだ。調査区は全体を15の区画に分けて設定し、8区より発掘調査を開始し、7区から1区、2区、3区、5区、4区、6区、10区、11区、13区、14区、15区、9区の順に調査を行った。当初の予想では大型の掘立柱建物が検出されることを予想していたが、直径30センチメートル程度の柱穴は検出されるものの、中継時の調査で出土したような大型建物はいっこうに出土しなかった。やっと3区に入りて1辺が70cm余の方形彫り方をもつ柱穴を検出したが、4個が1列に並んで出土しただけで、それに対応する柱穴列は発見できなかった。5区から4区にかけては大量の鉄滓が出土し、鍛冶炉と想定される造構が検出された。その他は他の調査区でも土壌、溝等が検出されるくらいであった。しかし出土遺物は、弥生時代後期の時期から古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代と長期に亘って出土した。造構は検出されなかったものの、埋め土中には青磁や白磁のかけらも出土しており、庶民の使用したものではないものが出土している。

12区は調査中に元の高さよりもかなりの埋め土をされていることが判明し、調査は実施しなかった。10区から15区については須の内集落北の尾根から続く丘陵端部に在るため、重機による表土除去作業の段階で既に造構面が削平されている箇所もあった。その部分については調査機間に余裕が無いこともあって、重機による表土除去作業の段階で造構の有無を確認し、無い箇所については詳細な調査は実施しなかった。

#### （4）古市場遺跡の発掘調査

古市場遺跡は平成12年度に18本のトレンチを設定して実施した確認調査の結果を基に発掘調査を実施した。発掘調査は平成14年6月24日に開始し、平成15年3月31日に終了した。調査面積は12,000m<sup>2</sup>である。

発掘調査は、切土になる部分についてのみ実施し、全体を10区に分けて実施した。鳥の奥川を中心右岸に1区から4区までを設定し、左岸に5区から10区を設定した。発掘調査は鳥の奥川の右岸から着手することとし、1区より開始した。確認調査時には包含層より弥生後期の遺物が検出されていたため、この時期の集落の出土を予定していたが、1区からも2区からもピットが検出されるばかりで一向にそれらしい遺構に当たらなかった。ちょうど夏の暑い時期に当たったため作業は大変辛かった。4区に入ってやっと方形住居址が調査区の端に僅かに引っかかって検出された。更にもう1軒円形住居址が検出された。鳥の奥川を渡って左岸の5区に進むと、円形と隅丸方形の住居が検出され、次の6区、8区、9区からも住居址が検出された。

また、作業員については、郡遺跡の発掘調査時から地権者を優先して雇用するということで地元の人で対応してきた。しかし、古市場遺跡の調査では地元の地権者だけでは作業員が集まらず、初めは地元地権者だけで対応してきたが、作業の進捗状況が遅れ気味となつたため、11月より地権者以外から作業員を募集して作業のペースアップに努めた。

作業の進捗状況は作業員の増員にもかかわらず、その後徐々に遅れてきた。原因は、当初の予想を越えて包含層が厚いため廃土量が多くなったことが考えられる。そこで、2月10日に県教委文化課の指導を受け、残りの8区、9区、10区については遺構検査直上まで重機により上土の除去を行うことで作業の遅れを取り戻すこととした。遺構の実測についても、調査員一人では期限内の終了は難しく、3月に入ってから測量業者に委託することで切り抜けることができた。

古市場遺跡は弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡であることが判明したが、現地説明会等による地域住民への一般公開は、調査に専念するために調査期間内には開催することができなかつた。そこで、工事が開始される6月までに現地説明会を行うことにし、平成16年5月18日に現地説明会を開催した。地域住民を中心に約70名の参加があった。

#### (5) 整理作業及び報告書作成作業

報告書の作成は平成14年度の古市場遺跡の調査が終了してから、3遺跡分をまとめて刊行することにしていたため、平成15年度はその作業を行った。遺物の洗浄は、郡遺跡、須の内遺跡については各調査年度中に実施していたが、最後の古市場遺跡については15年度にも亘って実施し、洗浄が終了した段階で3遺跡の復元作業から取り掛かった。3遺跡の発掘調査面積は合計で35,600m<sup>2</sup>に及んでおり、出土遺物もコンテナに約280箱を数えた。

発掘調査の質・量に対して整理作業期間はあまりにも短く、十分な整理期間を持つことができなかつた。このことについては事業主の真庭地方振興局に申し入れをしたが、圃場整備事業自体が、平成15年度を持って終了するため、埋蔵文化財の整理作業だけが、16年度に継続することはできないということであった。そのため、復元、注記は遺構からの出土品を中心とし、包含層からのものは一部に留まつた。出土遺物の実測も、実測の時間に制約があるため、遺構内出土のものしかできなかつた。

遺構図の作成は調査担当者が行い、トレースは担当者及び、作業員が行った。

石器については岡山理科大学の白石純氏に実測とトレースを依頼した。

### 第3節 調査の組織

#### 調査体制

平成9年（1997）度

落合町教育委員会

教育長 稲田 晃

生涯学習課長 木村 富江

課長補佐 岡田 修

主査 切明 友子（調査担当）

平成10年（1998）度

落合町教育委員会

教育長 稲田 晃（12月8日まで）

宮川 昭郎（12月18日から）

生涯学習課長 木村 富江

課長補佐 福井 秀明

主査 切明 友子（調査担当）

平成11年（1999）度

落合町教育委員会

教育長 宮川 昭郎

生涯学習課長 金本 良子

参事官 岡田 修

上級主査 切明 友子（調査担当）

平成12年（2000）度

落合町教育委員会

教育長 宮川 昭郎

生涯学習課長 森川 良雄

課長補佐 芦田 聖一郎

上級主査 切明 友子（調査担当）

平成13年（2001）度

落合町教育委員会

教育長 宮川 昭郎

生涯学習課長 森川 良雄

課長補佐 中川 佑子

上級主査 切明 友子（調査担当）

平成14年（2002）度

落合町教育委員会

教育長 宮川 昭郎（1月29日まで）

大倉 貢（2月7日より）

生涯学習課長 芦田 聖一郎

課長代理 中川 佑子

係長 切明 友子（調査担当）

平成15年（2003）度

落合町教育委員会

教育長 大倉 貢

生涯学習課長 菱川 輝夫

課長代理 中川 佑子

上級係長 切明 友子（整理担当）

#### 発掘調査作業員

（郡遺跡）奥村 武一 片山 清三郎 辻 吉亀 難波 健男 難波 誠 仁熊 従子  
福井 繁雄 福井 肇 松下 久恵 松下 与志夫 森 茂夫 湯浅 貞子  
湯浅 峰雄

（須の内遺跡）石井 繁夫 市場 忠志 片山 清三郎 酒井 幹夫 辻 吉亀

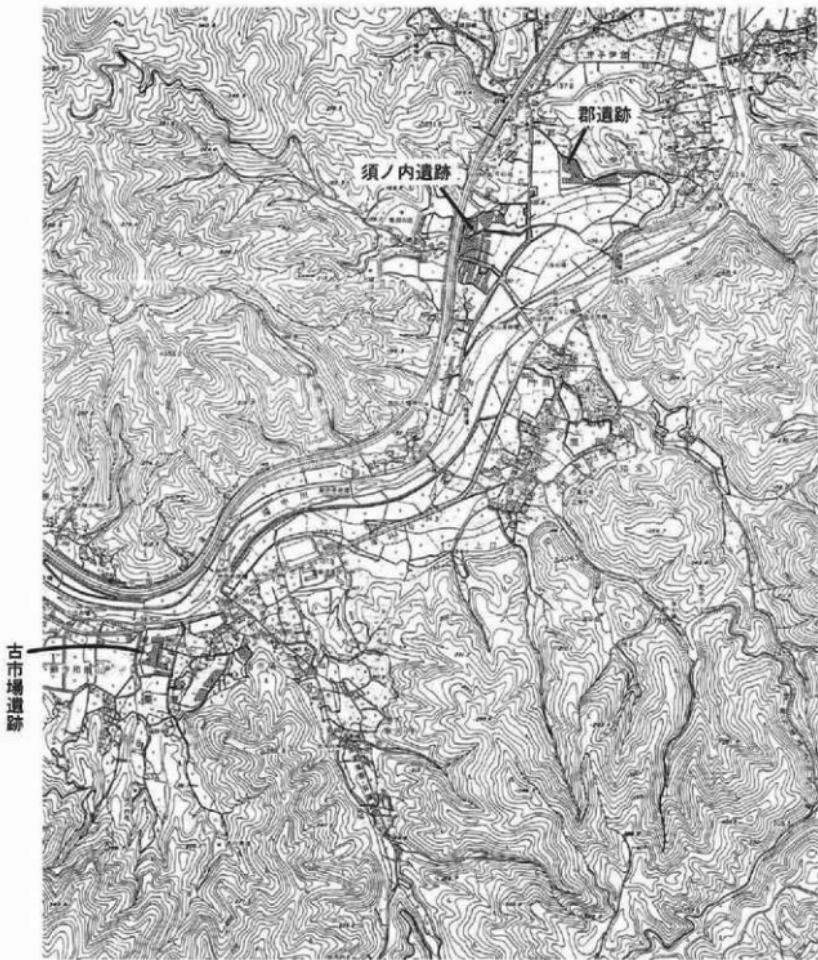
仁熊 従子 福井 黙雄 福井 稔 松下 久恵 松下 与志夫 森 茂夫  
湯浅 貞子 湯浅 峰雄  
(古市場遺跡) 市場 忠志 市場 春子 大杉 泉 片山 清三郎 岸 みや子  
古林 明男 酒井 勝美 酒井 邦明 酒井 高之助 酒井 幹夫 田中 多実子  
飛峪 豊 福井 稔 福田 修作 藤井 秀子 藤沢 勝利 藤田 幸子 森本 和弘  
山本 典子 (あいうえお順)

上記の方々には、猛暑、厳寒の中悪天候の日々も発掘調査に従事していただきました。記して心より感謝申し上げます。

遺物実測・整理作業員

酒井 審史 大月 悟子 藤田 久美子 安田 佳代

発掘調査は落合町教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言を受けて実施し、発掘調査と報告書作成の過程で多くの方々に有益なご教示をいただいた。厚くお礼申し上げます。



第2図 工事範囲と調査区 ( $S = 1/20,000$ )

## 第2章 地理的・歴史的環境

### (1) 地理的環境

落合町は岡山県の中北部に位置し、同県の三大河川の一つである旭川の上流域に開けた町である。町の面積は147.92km<sup>2</sup>（東西19.6km、南北17.7km）で、うち73.8%を山林が占める。人口は15700人余で、年々減少傾向にある。産業はかつては第1次産業が中心であったが、現在は第3次産業従事者が最も多くなっている。

落合町はその名が示す通り、町の中心を南流する一級河川の旭川に、備中川、河内川などの中小河川が流れ込むことによって沖積低地を形成している。北は中国山地の南辺にあたる標高400～600mの山々が、南は吉備準平原の標高300～500m山々が取り囲む小盆地地形である。これらの低地は新第三紀中新統（第三紀層）と第四紀沖積層が分布しており、かつては海底に没していたため、泥岩や砂岩中には化石を含む。第三紀層の上には、部分的に第四紀洪積世の堆積物がのって河岸段丘をなしている。

地質は大部分が三群変成岩であるが、一部西の北房町境の三飛山付近に石灰岩地帯、北西の塩滻付近に礫岩地帯がある。また、北の日名から杉山は花崗岩地帯で、その上に大山の火山灰土が堆積している。

落合町の多くの遺跡は中小の河川によって形成された沖積地を望む河岸段丘上に見られる。郡遺跡、須の内遺跡、古市場遺跡もそういった場所に立地している。

### (2) 歴史的環境

落合町内で旧石器時代の遺構は現在のところ確認されていない。しかし、今回の発掘調査で郡遺跡から出土したスクレイバーと石核は旧石器時代のものと思われる物で、定住はしていない人が活動していたことが窺える。

縄文時代に入ると、当摩川や河内川流域で草創期の尖頭器や早期の押し型紋事が出土している。備中川流域では、宮の前遺跡から中期の土器の他、晩期の遺物以外に40基あまりの貯蔵穴が検出されており、この頃になると確実に定住の痕跡が認められる。遺跡数はまだ少ないが、古市場遺跡、須の内遺跡からも後期から晩期にかけての遺物が出土している。

弥生時代前期から中期前にかけての遺跡は少なく、遺跡数が増加するのは弥生時代中期末から後期にかけてである。この頃になると、旭川の支流によって形成された沖積地を生活の基盤とする地点に見られる。備中川流域では発掘調査が実施された遺跡として、宮の前遺跡、古市場遺跡、須の内遺跡、郡遺跡がある。未調査の遺跡としては、備中川右岸に和田八幡遺跡、栗原大山遺跡、追坂遺跡、左岸に角瀬遺跡があり、土器が採取されている。また、備中川下流の支流西河内川右岸の中山遺跡からは特殊器台・特殊壺を持つ終末期の墳墓群が検出されている。

古墳時代の集落は弥生時代のものに比べると出土例は少なくなる。落合町内でも7遺跡を数えるに留まっており、備中川流域では須の内遺跡と古市場遺跡である。しかし、宮の前遺跡では古墳時代前期の円形・方形の周墳墓が8基検出されており、近くに集落の存在は想定される。

一方で古墳は多数存在する。落合町内だけで200基あまりが存在し、その内、前方後円墳は8基を

数える。備中川流域では左岸下流域に井手伊倉古墳、横部1号墳、垂水古墳がある。いずれも30m前後の小型の前方後円墳で未調査のため時期は確定できないが、それぞれ小規模な平野単位に存在する。備中川流域のその他の古墳は円墳で、中期と推定される古墳は右岸の栗原地区には20基ほど見られる。古市場遺跡の西約1kmの丘陵には和田古墳群、坂本古墳群、相原古墳群が在る。後期の横穴式石室墳は古市場遺跡の南に隣接する瑞照寺古墳群や余河内古墳群がある。右岸には大型の横穴式石室を持つ一色八幡古墳をはじめ、永明寺古墳等多数存在する。

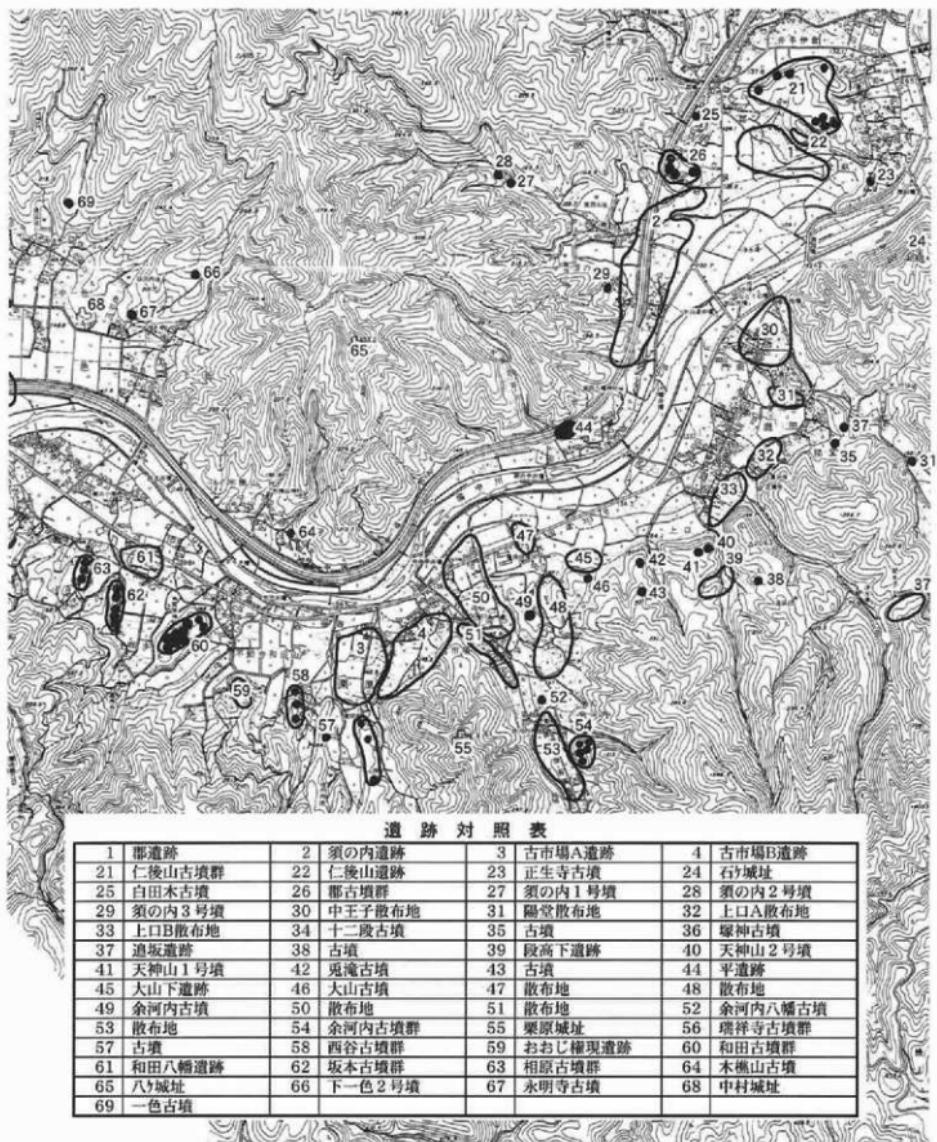
鹿田地区には中期古墳は右岸に天神山1号墳と  
の2基がある。後期古墳は多数存在し、須の内  
遺跡の西の丘陵上にも数基存在し、生活基盤の耕作地を見下ろす丘陵上に転々と築かれている。郡遺  
跡の北側丘陵上には仁後山古墳が所在し、竪穴式石室らしき石材の散乱するものもみられる。

奈良時代以降の遺跡は宮の前遺跡、古市場遺跡、須の内遺跡、郡遺跡があげられる。宮の前遺跡周辺の地名には条里制の名残をとどめる「九反ヶ坪」の地名が見られる。当地に古代寺院は存在しないが、下一色2号墳からは蓮華文の瓦当を貼付した土師質の陶棺が出土している。郡遺跡の北1kmの坂元から宝珠様の骨蔵器が出土しており、仏教が伝来していることが窺える。

(参考文献)

#### 【引用・参考文献】

- |            |      |  |
|------------|------|--|
| 落合町教育委員会編  | 1995 | 「落合町埋蔵文化財分布地図」落合町教育委員会                               |
| 今井 善・河本 清  | 1971 | 「岡山県落合町下一色2号墳出土の瓦当文陶棺」『考古学研究』18-1、考古学研究会             |
| 田仲満雄・新東晃一  | 1974 | 「下市瀬遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3、岡山県教育委員会  |
| 橋本惣司・松本和男他 | 1976 | 「須内遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11、岡山県教育委員会  |
| 橋本惣司・松本和男他 | 1976 | 「宮の前遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12、岡山県教育委員会 |
| 松本和男・森田友子  | 1983 | 『福田A遺跡・高屋B遺跡』落合町埋蔵文化財調査報告、落合町教育委員会                   |
| 山磨康平・高畠知功  | 1977 | 「旦原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告14、岡山県教育委員会  |
| 山磨康平・奥 和之他 | 1978 | 『中山遺跡』、落合町教育委員会                                      |



遺跡対照表

1 郡遺跡	2 須の内遺跡	3 古市場A遺跡	4 古市場B遺跡
21 仁後山古墳群	22 仁後山遺跡	23 正生寺古墳	24 石け城址
25 白木本古墳	26 郡古墳群	27 須の内1号墳	28 須の内2号墳
29 須の内3号墳	30 中王子散布地	31 隅堂散布地	32 上口A散布地
33 上口B散布地	34 十二段古墳	35 古墳	36 塚神古墳
37 道坂遺跡	38 古墳	39 段高下遺跡	40 天神山2号墳
41 天神山1号墳	42 鬼澗古墳	43 古墳	44 平遺跡
45 大山下遺跡	46 大山古墳	47 敷布地	48 敷布地
49 余河内古墳	50 敷布地	51 敷布地	52 余河内八幡古墳
53 敷布地	54 余河内古墳群	55 栗原城址	56 瑞洋寺古墳群
57 古墳	58 西谷古墳群	59 おおじ權現遺跡	60 和田古墳群
61 和田八幡遺跡	62 坂本古墳群	63 相原古墳群	64 木樵山古墳
65 八ケ城址	66 下一色2号墳	67 永明寺古墳	68 中村城址
69 一色古墳			

第3図 周辺遺跡分布図 (S = 1/20,000)

## 第3章 確認調査

### 第1節 確認調査の概要

確認調査は圃場整備事業工事の鹿田1工区と鹿田2工区を平成9年度に実施し、鹿田3工区については平成12年度に実施した。

鹿田1工区には都遺跡と須の内遺跡が所在し、郡遺跡には6本のトレンチを、須の内遺跡には4本のトレンチを設定した。両遺跡ともトレンチの本数が少ないので、年度途中の事業計画であった関係で予算・期間に余裕が無かったことと、須の内遺跡については昭和49年に中国縦貫自動車道に伴う発掘調査が既に実施されているためである。

鹿田2工区には周知の遺跡は該当しなかったが、2本のトレンチを設定して遺跡の有無を確認する試掘調査を実施した。その結果は、遺構は検出されず、遺物も包含層にはほとんど含まれなかった。

鹿田3工区には古市場遺跡が所在する。確認調査の段階では古市場遺跡の範囲等を十分把握できていなかったので、鹿田3工区内の栗原散布地として余河内地内に3本のトレンチを古市場地内に16本のトレンチを設定した。その結果は、古市場地内については遺構・遺物が検出されたが、余河内地内については遺構は検出されなかった。

トレンチの規模は基本的に幅2m、長さ10m程度としたが、地形や遺構の状況に応じて拡幅・延長をした。また、調査期間、経費の関係で設定したトレンチには疎密が生じたことはゆがめず、本調査に見切り発車をした部分もあることは否定しない。

#### (1) 郡遺跡 (T-1~6、第6図~9図)

T-1は工事実施区の北東端近くの水田に設定した。標高132.2mの水田で20cmほどの耕作土を掘り下げるときマンガンの沈着する床土があり、その下の40cmばかりの灰褐色土を取り除くと暗茶褐色土の包含層が出てくる。包含層は5~10cmほどでその下は地山の黄茶褐色土に至る。遺構は暗茶褐色土から地山を切って掘り込まれており、ピットがいくつか検出された。包含層からは奈良時代と思われる須恵器が出土した。注目されるのは、その中に1点だけ円面鏡が混じっていたことである。見落とすような小片のため、図示していない。

T-2はT-1の西200mの所に設定した。標高は135.9mの水田で、表土下40cmあまりで地山に達し、浅い。遺構は不整形の掘り込み状ピットがいくつか検出された。遺物は弥生時代中期後半から後期にかけての土器が出土した。

T-3はT-2の北西110mの位置に設定した。標高137.2mの水田で、表土下約40cmで地山に達したが遺構は何も検出されなかった。遺物も少量である。

T-4はT-3の西80mの水田に設定した。谷筋にあたるため、50cm以上掘り下げたが、遺構面には達せず、また遺物もほとんど出土しなかった。

T-5はT-3の南約140m、標高134.9mの水田に設定した。耕作土の直下から地山となる浅い層で、遺物は土師器が多少出土する程度であるが、遺構はピットがいくつか出土した。

T-6はT-5の南西約140mの水田に設定した。標高は131.5mの水田で、谷部に立地するため

表土下50cmでピットを検出したが、湧き水のため地山面まで掘ることはできなかった。出土遺物も少量である。

以上で、郡遺跡はT-1、T-2、T-3がある標高138m～130mの台地上に存在し、弥生時代中期後半から後期にかけての時期と、奈良時代の二つの時期の遺跡であることがわかった。

#### (2) 須の内遺跡 (T-8～T-10、第10図～12図)

須の内遺跡には4本のトレンチを入れたが、T-9からは何も検出されなかつた。

T-7は須の内遺跡の北東端の位置に設定した。標高は136.7mの水田で、表土下約50cm掘った段階で暗渠排水溝を破壊したため、遺構検出面まで掘り進めることができなかつた。遺物は包含層より奈良時代と思われる須恵器が出土しており、遺構の確認はできていないものの須の内遺跡の範囲に含めた。

T-8はT-7を設定した台地上から小さい谷を一つ挟んだ南側に設定した。中継の調査が実施された上寺地区の北東端に位置する。標高は134.6m～135.4mの北側の谷に向かって傾斜する畑である。耕作土の下、20cmからは穢に混じって暗灰褐色土から奈良時代以降と思われる須恵器・土師器が出土した。遺構は暗灰褐色土の下から掘り込まれており、柱穴が検出された。

T-10はT-8の南約160mに設置した。標高は135.4mの畑で65cm掘り下げた黄茶褐色土層より遺構面を確認した。遺構はT-8と同様に柱穴がいくつか検出された。遺物はやはりT-8同様に、奈良時代以降の須恵器・土師器が出土した。

中継の調査では須の内遺跡からは弥生時代中期末～後期の住居址と中世の大型建物、土壙、墳墓などが検出された。今回の確認調査では弥生時代の遺物・遺構は確認されなかつたが、奈良時代以降の遺構・遺物は確認された。

#### (3) 古市場遺跡 (T-1～3、T-7～19、第13図～24図)

鹿田3工区の確認調査は余河内地区と古市場地区に分かれて実施したが、余河内地区については遺構が検出されなかつたので、ここでは古市場地区に付いて記す。

T-1は標高139.5mの水田に設定したが、鳥の奥川、余河内川の氾濫原であったようで砂礫層が厚く、遺構・遺物は検出されなかつた。

T-2はT-1の南側の標高141.3mの水田に設定した。約40cm掘った暗茶色土層より遺物が検出され、更に30cm下げると茶色土の地山に達したが、遺構は検出されなかつた。出土遺物は弥生時代後期の土器である。

T-3はT-2の南に隣接する、標高142.5mの水田に設定した。約50cmで暗茶色土に達し、遺物が検出された。地山面は更に35cmあまり掘り進めて茶灰色土と思われるが、埋め土と周囲の土との色の判別がしにくく遺構は遺物と同様に暗茶色土から掘り込まれているのを断面図で確認したのみで平面では確認できなかつた。

T-7はT-3の西80mの地点に設定した。標高141.1mの水田で約60cmで地山に達するが、約20cm上方の明茶色土より遺構が確認できる。出土遺構はピットが2つ検出されたのみであるが、遺物は小片ながら6世紀後半と思われる須恵器が耕作土にもいくらか混入していた。

T-8はT-7の南、標高142.65mの水田に設定した。約60cmで地山に達するがその上方の暗茶褐色土には遺物が含まれていた。出土遺物は、6世紀代の須恵器や土師器皿等である。遺構は小さいピットが2つ検出されたのみである。

T-9はT-8の東隣に設定した。標高もほぼ同じで地山面までの深さも同じであるが、遺構は柱穴がかなり出土した。断面では遺構は地山面より上方の黄茶色土を掘り込んだ状態で確認されるが、平面では地山近くまで掘り下げないと検出できなかった。出土遺物は土師器が大半で、甕、皿等が出土した。

T-10はT-9の南上方の、標高144.9mの畑に設定した。南から延びる丘陵と島の奥川の谷に挟まれた場所で埋土が厚く、1m以上埋め立てられており、地山面を検出することはできなかった。遺構はピットが約80cm掘り込んだ黄茶色土から検出された。遺物は弥生時代後期の土器が出土した。

T-11はT-10の更に南上方の、標高146.1mの畑に設定した。T-11もまた埋土が厚く、地山面までは掘り進めなかつたが、80cm掘り下げた黒茶色土の下方より遺構を検出した。遺物は弥生時代後期の土器が出土したが、量は少なかつた。

T-12は更にその上方、標高146.5mの水田に設定した。島の奥川の氾濫原に近い部分と思われ、70cm掘ったが砂礫層が厚く堆積しており、ピットをいくつか検出したに留まつた。

T-13、T-14は島の奥川を挟んで西の段丘上に設定したが、2本とも砂礫層の厚く堆積する箇所で、1m以上掘つたが、地山面には達しなかつた。出土遺物はほとんどなく、遺構はT-14からピットらしきものが2つ検出されたのみである。

T-15は標高144.8mの水田に設定した。このトレンチにもT-13、T-14から続く砂礫が流れ出ており、40cmあまり掘り進んだ地点で、中央部分に幅約4mの溝状遺構が検出された。東端からは方形の竪穴住居と思われる遺構も検出された。遺物は弥生後期から古墳時代初めの土師器が出土した。

T-16は町道を挟んでT-15の西に設定した。標高は144.1mの水田で、耕作土を取り除くと直下から遺構が検出された。柱穴がいくつか検出されたが、遺構は僅かしか出土しなかつた。

T-17は既に遺構面は削平を受けていると思われ、50cmあまりで地山面に達するものの、新しい時期のピットが4つ検出されたのみで、遺物もほとんど出土しなかつた。

T-18、T-19は遺跡が立地する台地の西端に設定した。T-18の標高は141.4m、T-19の標高は142.4mの水田である。T-18からは表土下約50cmよりピットが検出された。T-19は約30cm下方よりピットと円形の竪穴住居が検出された。どちらのトレンチも遺物が少ないので時期は判明しない。

以上により古市場遺跡は島の奥川を挟んで2地点の台地上に遺跡があることが判明した。時期は弥生後期から古墳時代にかけての時期が中心と思われる。



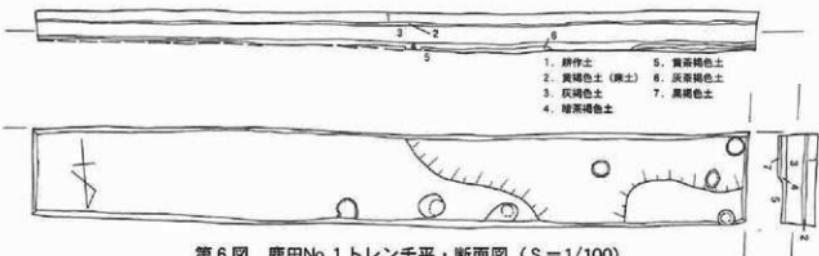
第4-1図1工区トレンチ位置図 ( $S = 1/3,500$ )



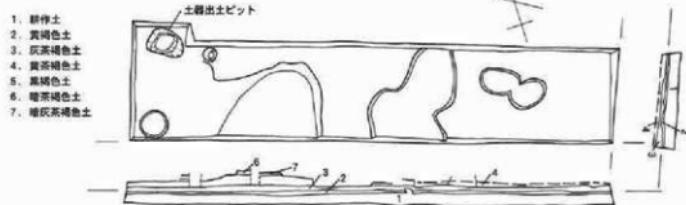
第4-2図2工区トレンチ位置図 ( $S = 1/3,000$ )

第5図 3工区トレンチ位置図 (S=1/2,500)

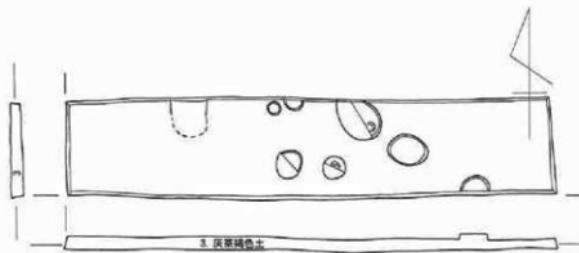




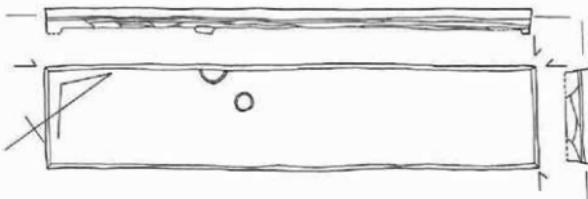
第6図 鹿田No.1 トレンチ平・断面図 (S=1/100)



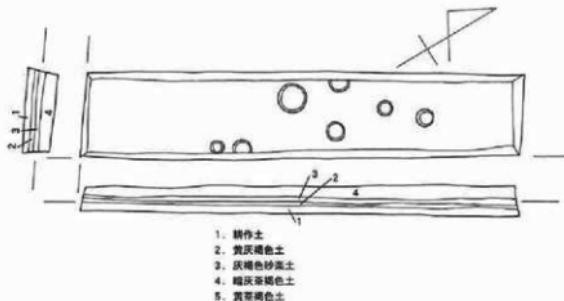
第7図 鹿田No.2 トレンチ平・断面図 (S=1/100)



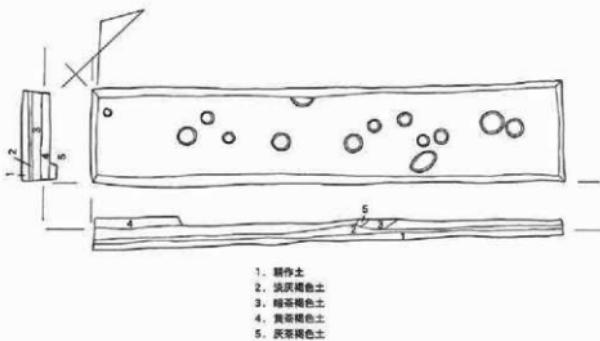
第8図 鹿田No.5 トレンチ平・断面図 (S=1/100)



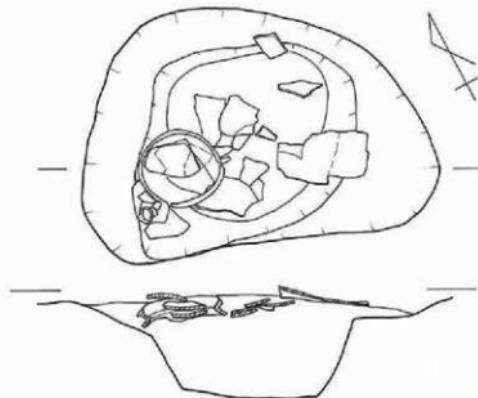
第9図 鹿田No.6 トレンチ平・断面図 (S=1/100)



第10図 鹿田No. 6 トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )



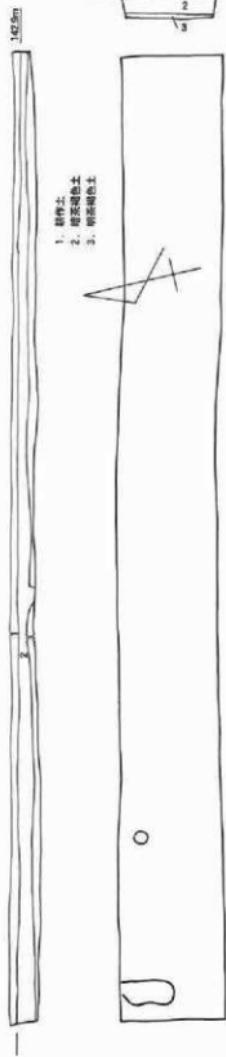
第11図 鹿田No. 8 トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )



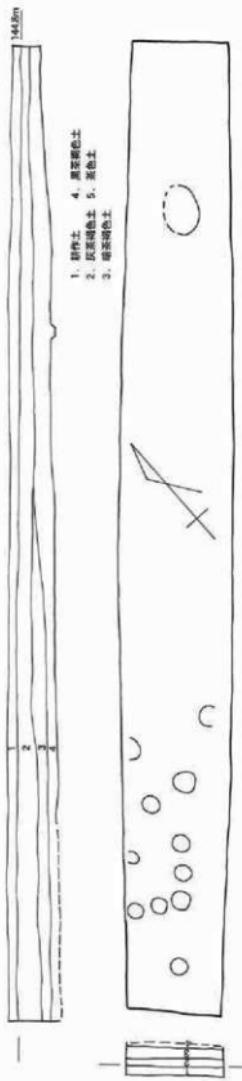
第12図 T-2 ピット内土器出土状況 ( $S = 1/10$ )



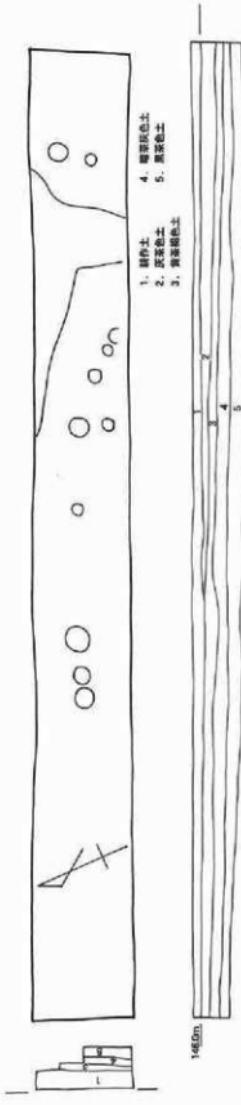
第13図 粿原No.2 トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )



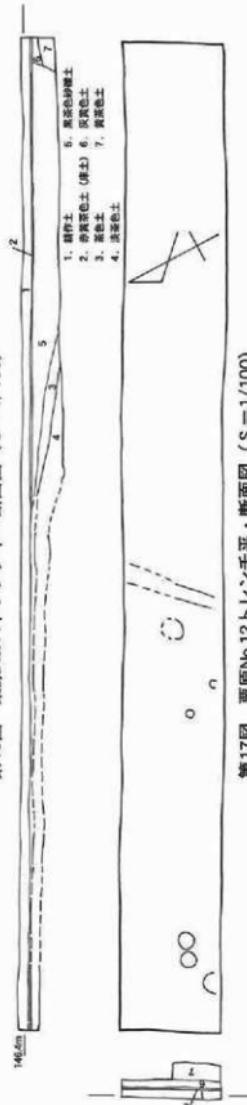
第14図 粿原No.7 トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )



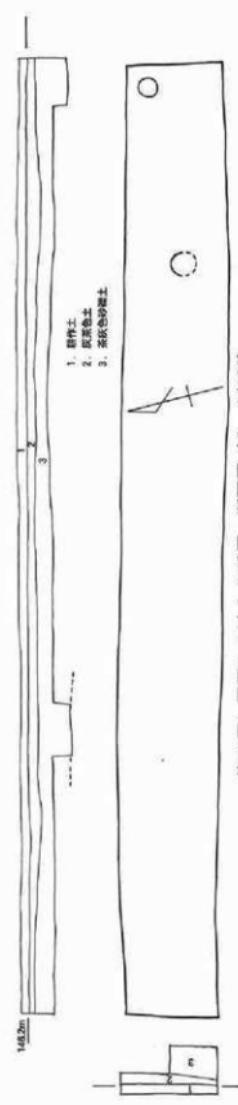
第15図 粿原No.10 トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )



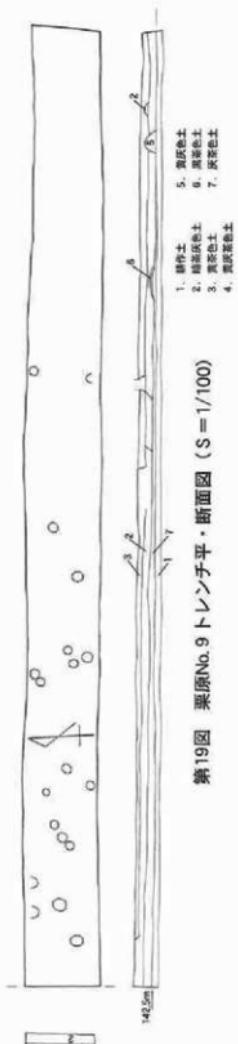
第16図 粿原No.11トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )



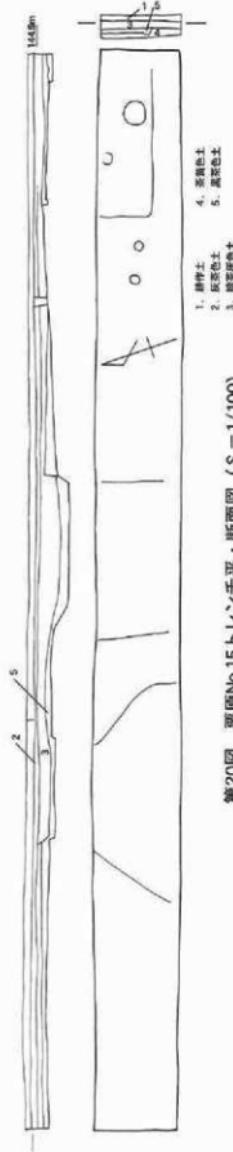
第17図 粿原No.12トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )



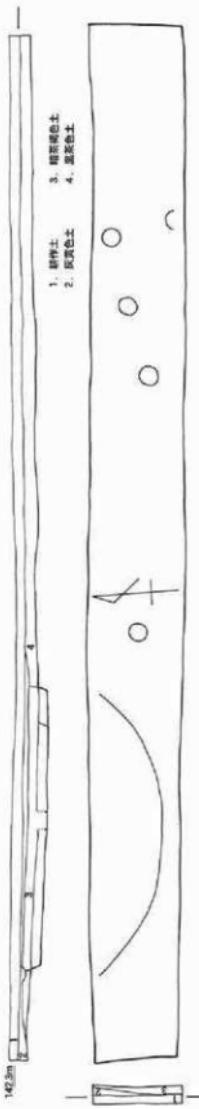
第18図 粿原No.14トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )

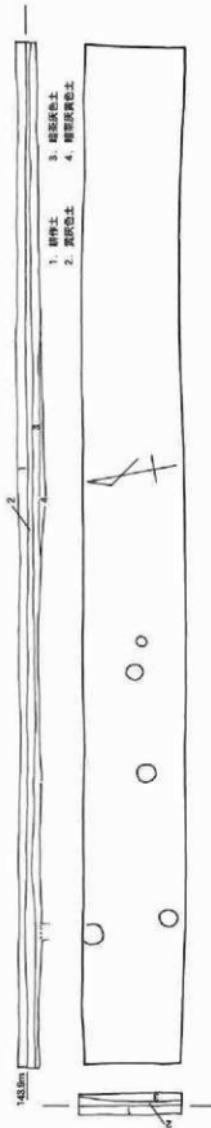


第19図 栗原No.9 トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )

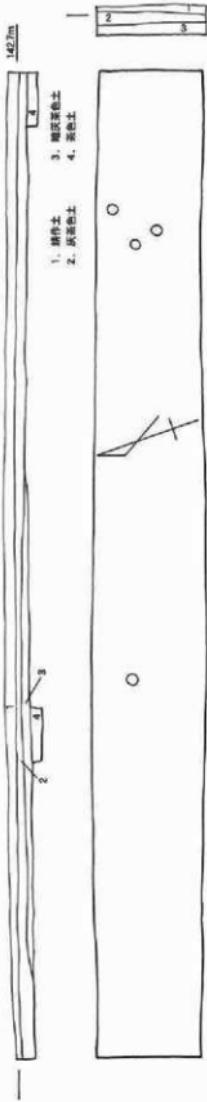


第20図 栗原No.15 トレンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )

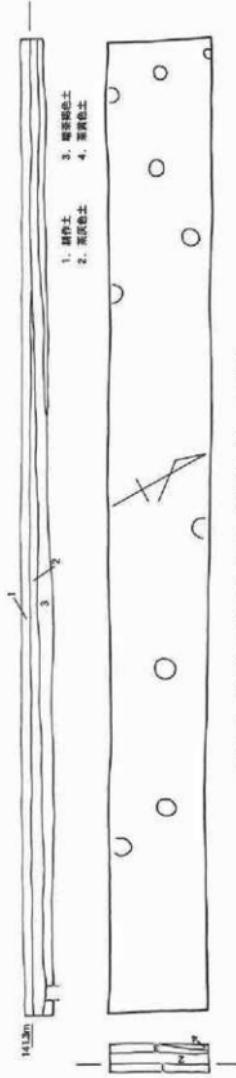




第22図 粿原No.16トレーンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )



第23図 粿原No.17トレーンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )



第24図 粿原No.18トレーンチ平・断面図 ( $S = 1/100$ )

## 第4章 郡遺跡（二次調査・三次調査）

### 第1節 発掘調査の概要（平成10年度）

二次調査は平成10年度に実施した発掘調査である。ほ場整備事業は平成11年度からの工事開始であったが、水路の関係上一部平成10年度中に工事を実施する個所が生じたため、急速発掘調査を実施したもので、調査の期間は平成10年11月9日から平成11年1月22日である。調査区は郡遺跡の東端にあたる位置で、3次調査の実施区の南東に隣接する。調査区は4枚に分かれた水田で、標高は130.0m～130.25mである。この調査区は確認調査時にトレンチ1を設定した水田より約60cm低い標高にあるため、洪水時には備中川の水が逆流して、常に水没する位置にある。その為、確認調査の際も、遺構が残存する可能性が薄いと思われたためにトレンチは設定していなかった。しかしこ水路工事に伴い発掘調査を実施することになった為に、確認調査の意味も含めて、調査の方法はまずトレンチを8本設定し、遺構が見つかったところを中心に拡張するという方法を取った。その結果はトレンチ3から掘立柱建物2棟と鉄滓が多量に出土した。トレンチ5～7からは弥生時代の溝が検出された。

建物8（第27図）

トレンチ3を西に拡張した位置から検出された。遺構は耕作土を除去した直ぐ下から基盤層を掘り込んで検出されており、北側は後世の削平によって既に消滅していた。従って、検出できたのは桁行4間、梁間2間で主軸を南北方向に向けていた。掘り方は円形で、直径は30～46cm、深さは15～28cmを測る。柱の太さ柱痕を推定して、20～25cm程度である。柱間寸法は桁行が188～216cm、梁間が200～250cmを測る。

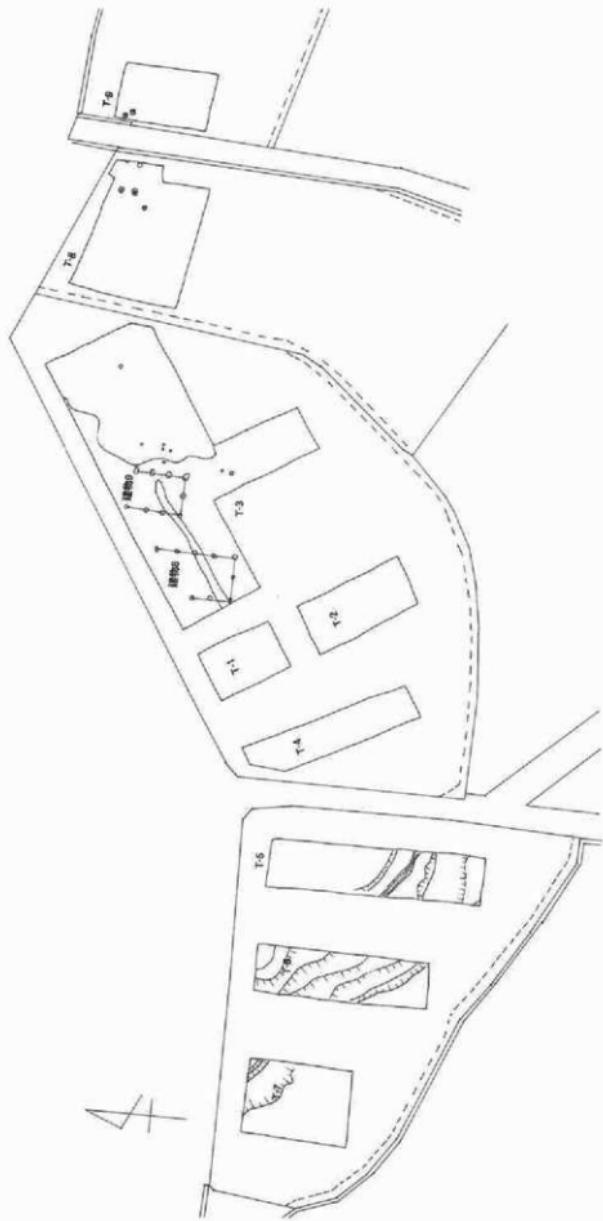
建物9（第28図）

トレンチ3から建物8の東に隣接して検出された。建物9も北側は既に削平を受けて消滅しており、検出できたのは、桁行3間、梁間2間である。



第25図 郡遺跡調査区域図 (S = 1/2,500)

第26図 都道府道構配圖 (S = 1/500)



この建物も主軸は南北に向けており、2棟の建物は平行に並んだ状態で検出された。掘り方は円形で直径26~58cm、深さは6~28cmを測る。柱間寸法は桁行が172~194cm、梁間が190~212cmを測り、建物8と比べてやや小規模である。

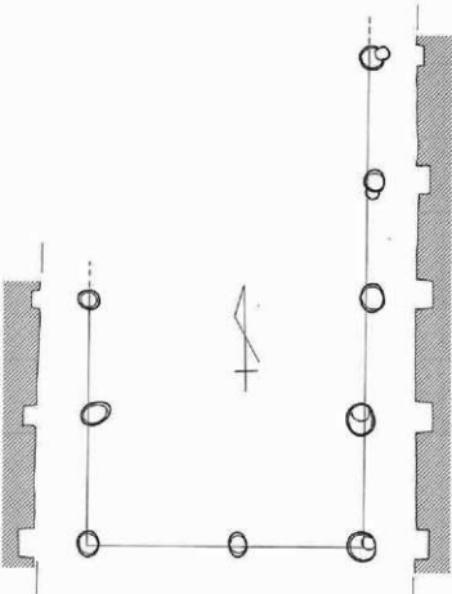
#### 鉄滓溜り

建物9の直ぐ東側から多量の鉄滓を含む灰茶褐色土が出土した。この灰茶褐色土は厚さ20cm余りで、10mあまりの範囲に広がっており、中には鉄滓の他に炉壁片、須恵器、土師器、瓦等が混じっていた。須恵器は底部を窓きりの後、高台を付した壺が多い。壺蓋は扁平な碁石状のつまみが付くものが出土している。瓦は内面が布目、外側は格子状の叩きのものと平行叩きのものとが見られる。これらの時期は奈良時代後期~平安時代と考えられる。

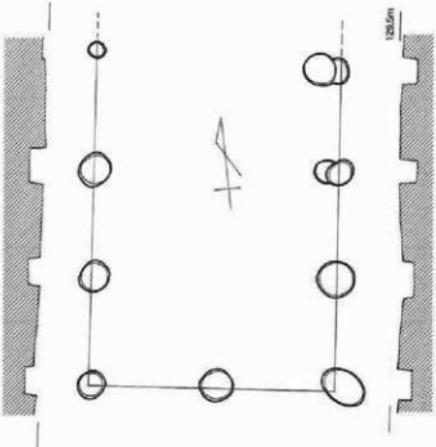
#### 溝

トレンチ5~7から検出された。溝は溝というよりは自然も流路に近い感じで、トレンチ6部分で幅9m、深さ0.57mを測る。埋土も暗灰色の砂礫土と粘質土が混合していた。表土層からは建物8・9周辺から出土する奈良~平安時代の土器が検出されるが、溝からの出土遺物はほとんどなく、トレンチ5の溝下層から弥生中期前半と思われる變形土器1編と磨製石斧2点、石包丁1点(第91図)が出土した。

以上により弥生時代中期前半と考えられる溝と奈良~平安時代の建物2棟と鉄滓溜りを検出した。建物2棟は供伴する土器は出土しなかったが、表土層からの出土遺物及び鉄滓溜りからの出土遺物から判断した。また、鉄滓溜りは、近くに鍛冶もしくは精錬等の工房の存在を想定させるものであるが、2棟の掘立柱建物がその工房と直接関連するものかどうかは言及できない。



第27図 建物8平・断面図 ( $S = 1/80$ )



第28図 建物9平・断面図 ( $S = 1/80$ )

## 第2節 発掘調査の概要（平成11年度）

平成11年度調査は平成9年度に実施した確認調査の結果を基に明らかになった遺跡の範囲内で、しかも削平される部分について発掘調査を実施した。

発掘調査は1区から7区に分けて実施し、3区より調査を開始し、1区～2区～4区～5区～6区～7区の順に行った。（第25図）

1区は確認調査時に包含層より円面鏡の出土した水田の北に隣接する水田であったが、予想に反してピットがいくらか検出されたのみである。発掘調査の期間は平成11年8月12日～9月13日である。

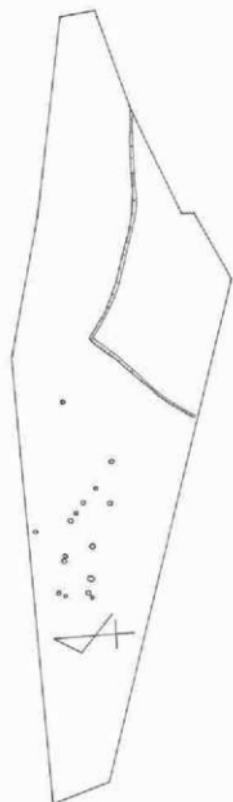
2区は今回の調査でも低い位置の水田で標高131.7mである。そのため埋土が厚く、深いところは1m近くまで掘り下げて地山面を検出したが、遺構は検出されなかった。埋土は小礫を多く含む茶褐色の土で、遺物もほとんど出土しなかった。平成11年9月13日～21日である。

3区は2区同様に標高130.7～131.8mの低い水田で、最初に調査を開始した西側は埋土ばかりが厚く一向に遺構らしきものが出土しなかったが、中央部に差し掛かったところで掘立柱建物を見つかり、合計5棟の建物が検出された。その内4棟は総柱構造であった。出土遺物も円面鏡を含む、奈良時代の須恵器・土師器が包含層より出土している。発掘調査の期間は平成11年5月12日～8月31日である。

4区は標高132.9mの畑で東隣の2区よりは高いが、北隣の5区よりは約1.3m低い。調査区の西半分より隅丸方形の掘り方をもつ掘立柱建物が1棟検出された。東半分は地山面が東に向かって下がっているため埋土が厚く、遺構面の検出はできなかった。埋土内より弥生時代後期の土器が出土してい



第29図 郡遺跡 調査区域図 (S=1/2,000)



第30図 郡1区遺構配置図 (S=1/400)

われていたと思われる。そのため、東半分からは遺構が検出されなかつたとかんがえられ、遺構が検出された西半分も僅かに底部が残っている状態と思われた。

遺構に伴う出土遺物は無いが、上面の埋土中より須恵器、土師器がコンテナに4箱分出土している。図示することができないが、須恵器は壺、盤、壺、甕、長径壺等がみられる。土師器は皿、椀、甕等である。時期は8世紀代と思われる。

## (2) 2区

2区からは遺構は検出されなかった。埋土は1m近くに及んだが、耕作地造成の際に埋め立てられたもので、中に入っていた遺物も断面が磨耗した小片ばかりで図示しえるものは無く、量も僅かコンテナ1箱である。

る。発掘調査の期間は平成11年10月6日～11月5日である。

5区は4区の北に隣接し、標高134.2～135.1mと北から南へ傾斜している。この調査区からは今回の調査では最も規模の大きい掘立柱建物が検出された。遺物も均整唐草紋の軒平瓦が出士し、この遺跡の性格を決める上での重要な要素と思われる。

また、この時期以外の造構として、弥生時代後期の土器を含む溝状造構が1本検出された。発掘調査期間は平成11年9月21日～11月22日である。

6区は5区の北に隣接する。標高は135.9～137.1mで、北から南へ傾斜した地形である。西半分土師器を伴うピットや土壙が検出されたが、東側の暗茶褐色土が堆積する部分には弥生時代後期の土器が出土する土壙が多数検出された。注目されるのは、西端近くで、表土層から軒丸瓦が2点出土した。発掘調査の期間は平成11年11月9日～平成12年2月29日である。

7区は調査区の一一番北に位置し、標高も138mともっとも高い。調査区の南西端より掘立柱建物が1棟検出された。総柱建物で、注目すべきことは隅丸方形の掘り方の1辺が1mを越えるサイズであることと、柱痕が腐食しないで残っていたことである。

発掘調査の期間は平成12年1月19日～3月22日である。

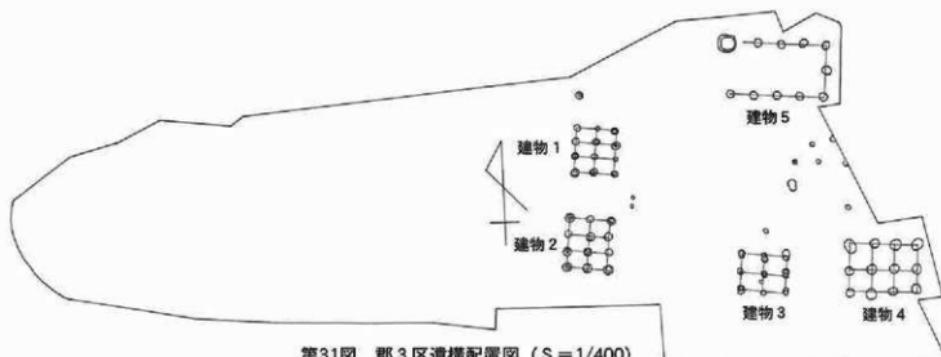
## 第3節 遺構・遺物

### (1) 1区 (第30図)

1区で検出された遺構は直径30～40cm程度、深さも5～20cm程度のピットが調査区の西半分より検出された。基盤層の黄茶灰色土までの深さは耕作土の下から測って20～60cmあり、造構は基盤層まで掘り下げた状態で検出された。1区は耕作地の高い位置に立地するため、これまでに基盤層にまで及ぶ削平が行

れていたと思われる。そのため、東半分からは遺構が検出されなかつたとかんがえられ、遺構が検出された西半分も僅かに底部が残っている状態と思われた。

遺構に伴う出土遺物は無いが、上面の埋土中より須恵器、土師器がコンテナに4箱分出土している。図示することができないが、須恵器は壺、盤、壺、甕、長径壺等がみられる。土師器は皿、椀、甕等である。時期は8世紀代と思われる。



第31図 郡3区遺構配置図 ( $S = 1/400$ )

### (3) 3区 (第31図)

3区の西半分は耕作地造成のために埋め立てられた土が厚く、遺構を検出することはできなかったが、東半分からは掘立柱建物が5棟検出された。何れの建物もほぼ同一の方角に建てられていた。

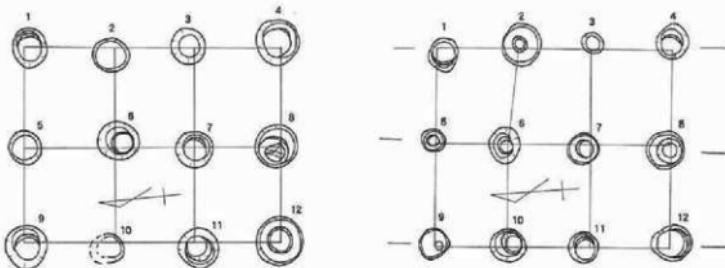
#### 建物 1 (第32図)

調査区の中央部から建物2と平行に並んだ状態で検出された。総柱建物で、桁行3間、梁間2間で、床面積は約10.8m<sup>2</sup>を測る。柱間寸法は桁行が110~132cm、梁間が140~162cmを測る。掘り方は円形で直径40cm~62cmと大きさに幅がある。深さは40~70cmを測る。柱痕跡から推定される柱の太さは20cm前後と考えられる。

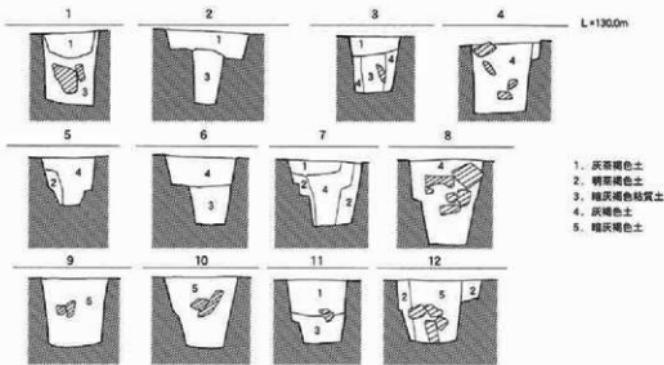
#### 建物 2 (第32図)

建物1の3m南に對を成す様に、並んで検出された。この建物も総柱で、桁行3間、梁間2間、床面積は13.36m<sup>2</sup>を測る。柱間寸法は桁行が114~162cm、梁間が156~166cmを測る。掘り方は円形で直径54~78cmを測る。深さは32~52cmを測る。柱痕跡から推定される柱の太さは25cm前後である。

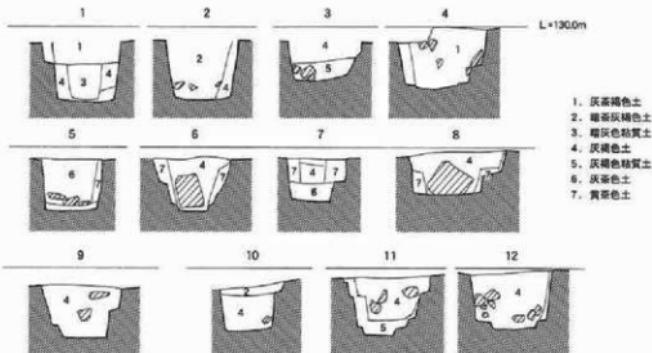
建物1と建物2は同一に見えるが、比較すると建物2の方が全般に亘って規格がやや大きい。



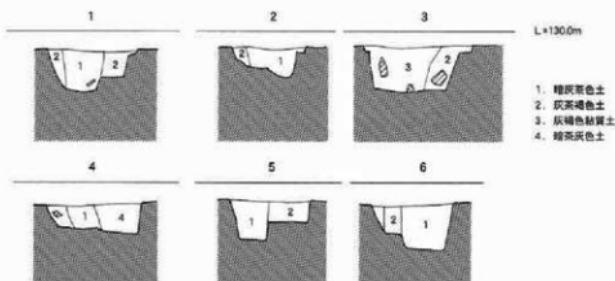
第32図 建物1・2平面図 ( $S = 1/80$ )



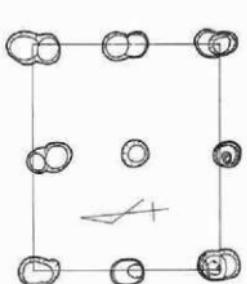
第33図 建物1柱穴断面図 ( $S = 1/40$ )



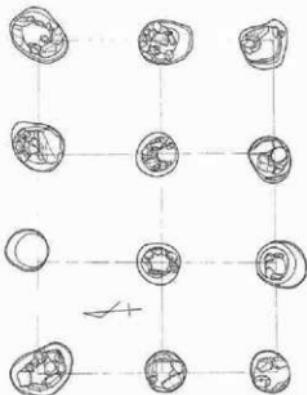
第34図 建物2柱穴断面図 ( $S = 1/40$ )



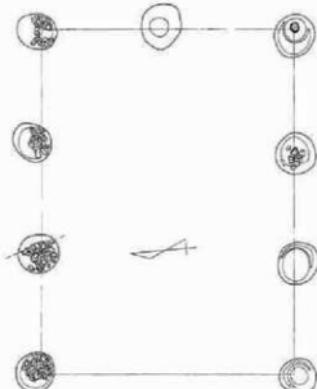
第35図 建物3柱穴断面図 ( $S = 1/40$ )



第36図 建物3平面図 (S=1/80)



第37図 建物4平面図 (S=1/80)



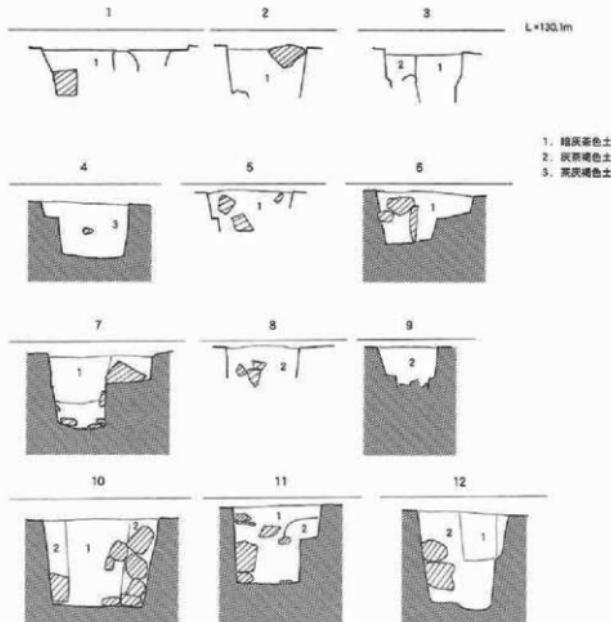
第38図 建物5平面図 (S=1/80)

方は円形もしくは梢円形で、直径も68~106cmとこれまでの建物と比べて大きい。深さも40~80cmと深く、1箇所を除いて11箇所に柱を取り囲むように石が詰められていた。石は20cm大の山石で角の立ったものばかりである。P-1には底に2cmの厚さの板を敷いており、柱の沈み込みを防止する工夫が見られた。柱の太さは柱痕跡から推定して30cm程度と思われる。この建物は他の建物と比べて規模が大きいばかりでなく、裏込め石を充填したり板を敷いたりとかなり強度を持たす工夫をしていることが窺える。総柱構造からこの建物は倉庫と思われるが、相当重量のかかる物を入れていたと想定される。

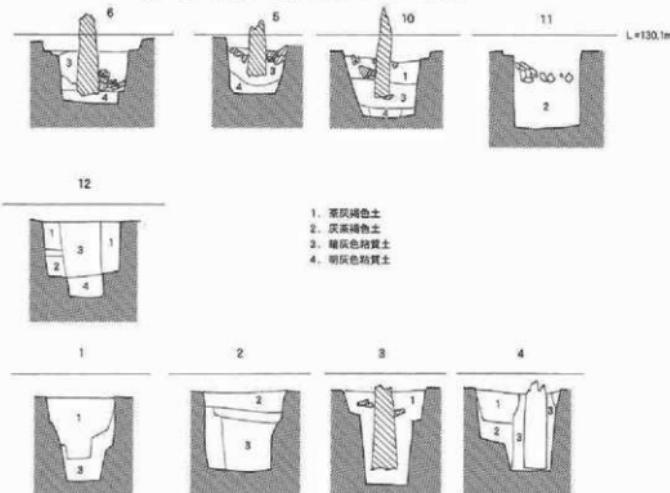
### 建物 5 (第38図)

建物3の北12mに位置に検出された。主軸を東西に向けた建物であるが全体が検出されては無く、現状で桁行3間、梁間2間である。柱間寸法は桁行が176~200cm、梁間が192~216cmである。掘

0-



第39図 建物4柱穴断面図 ( $S = 1/40$ )



第40図 建物5柱穴断面図 ( $S = 1/40$ )

り方は円形で、直径60～70cmを測り、どれもほぼ同じである。深さは50～90cmとばらつきがある。9箇所の柱穴のうち5箇所に柱が残存しており、しかも5箇所には5～10cm大の石が裏込めされていた。残っていた柱の太さは12～20cmであり太くはない。

#### 出土遺物

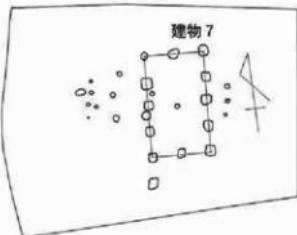
3区からの出土遺物はコンテナに21箱分ある。その内遺構に伴って出土したものは小片のものが僅かで、図示しえるものはない。包含層より出土した遺物は須恵器、土師器、黒色土器、備前焼がある。須恵器の坏は高台のつくものが大半を占め、蓋は扁平な宝珠つまみを持つ。土師器は皿、碗である。黒色土器は少量であるが内面のみ黒色化した椀が出土している。よって、出土遺物の時期は、奈良時代を上限として鎌倉時代にまで及ぶと思われるが、須恵器の占める量が多いことから、主体は奈良～平安時代と思われる。

#### (4) 4区(第41図)

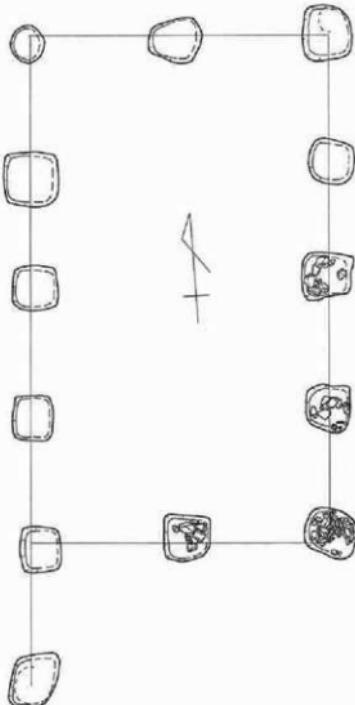
4区の東半分は谷筋に向かって基盤層が傾斜しており、包含層に遺物混入されて入るが埋土が厚く遺構を検出することはできなかった。西半分からは掘立柱建物が1棟とピットがいくつか検出された。

#### 建物7(第42図)

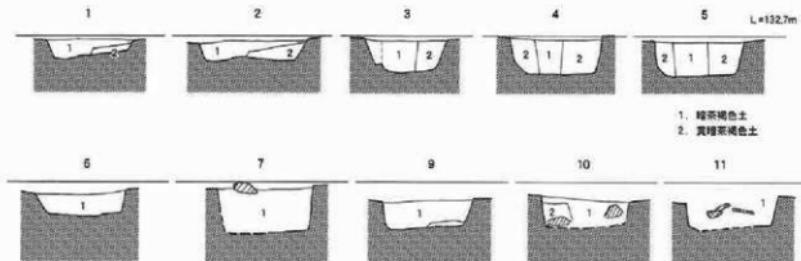
建物7は主軸を南北に向けた建物で、西の柱穴列の南端は柱穴が1つ多く、南側に窓のつく可能性が高いが、対応する柱穴は検出されなかった。よって、この建物は桁行4間、梁間2間とし、床面積は40.16m<sup>2</sup>を測る。柱間寸法は桁行が181～231cm、梁間が235～250cmを測り、桁行の寸法はばらつきが大きい。掘り方は1箇所を除いて隅丸方形で、1辺が67～94cmを測り、やや小ぶりである。深さは10～35cmと浅く、後世の耕作面造成による削平を受けている。柱の太さは柱痕跡から推定して20～25cmと思われる。また、4箇所の柱穴



第41図 郡4区遺構配置図 (S=1/400)



第42図 建物7平面図 (S=1/80)



第43図 建物7柱穴断面図 ( $S=1/40$ )

には5~25cm大の石が入っており、柱の補強が必要だったことが窺える。

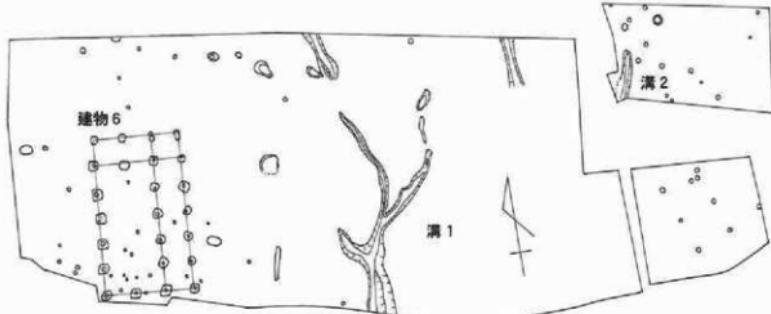
#### 出土遺物

4区からの出土遺物はコンテナに3箱分有り、少量である。遺構に伴う遺物は、建物7の柱穴の中から出土している。13箇所の柱穴のうち7箇所から土器が出土している。何れも小片のため図示できていないが、弥生時代後期の壺・甕・高杯や、須恵器の壺・壺・甕、土師器の皿・椀である。須恵器、土師器の時期は小片のため判断しがたいが奈良時代~平安時代の範疇と思われる。

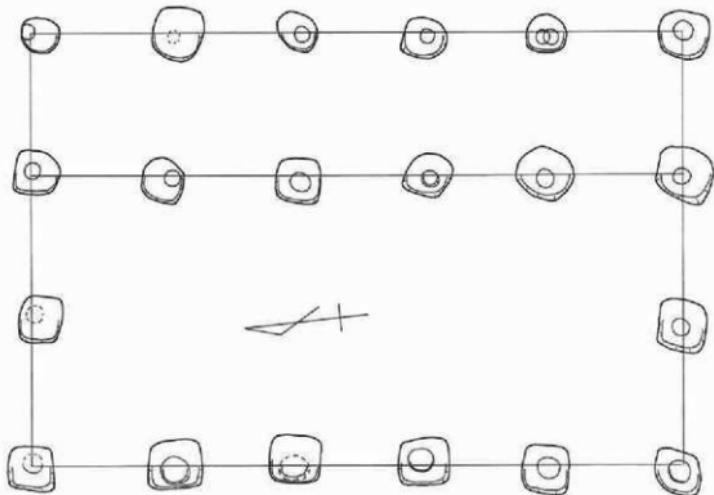
遺構に伴わない出土遺物は上記の建物7の柱穴から出土した時期の土器以外に弥生時代中期の土器がある。遺構検出面の上には黒褐色土の包含層が堆積しており、この中に弥生時代中期~後期の土器を含んでいた。この包含層の中には第8節で述べているが、弥生時代と推定される石器も3点出土している。

#### (5) 5区(第44図)

5区から検出された遺構は掘立柱建物1棟と溝2本、大小のピットである。5区は南に隣接する4区より約1.3m高く、一気に台地上にあがった状態である。基盤層は北から南へ緩やかに傾斜しており、埋土は南側の厚いところで60cm、北側の薄いところで10cmを測る。断面では遺構は基盤層直上の焦茶褐色土から掘り込まれているが、平面ではこの埋土を取り除いて基盤層の黄色土まで掘り下げた状態で検出された。



第44図 郡5遺構配置図 ( $S=1/400$ )



第45図 建物6平面図 (S=1/80)

#### 溝1

溝1は5区の中央部より検出された。北から南へ流れしており、北側は後世の削平によって既に消滅している。この溝は人工的に掘削されたというより、自然にできた流路と思われるもので底は凹凸がみられた。溝は基盤層の黄色土を掘り込んでおり、中には暗茶褐色土が堆積していた。この土層は下の4区では調査区全体に堆積していた包含層と類似している。この溝からは弥生時代後期の土器が出土している。(第47図2~6)

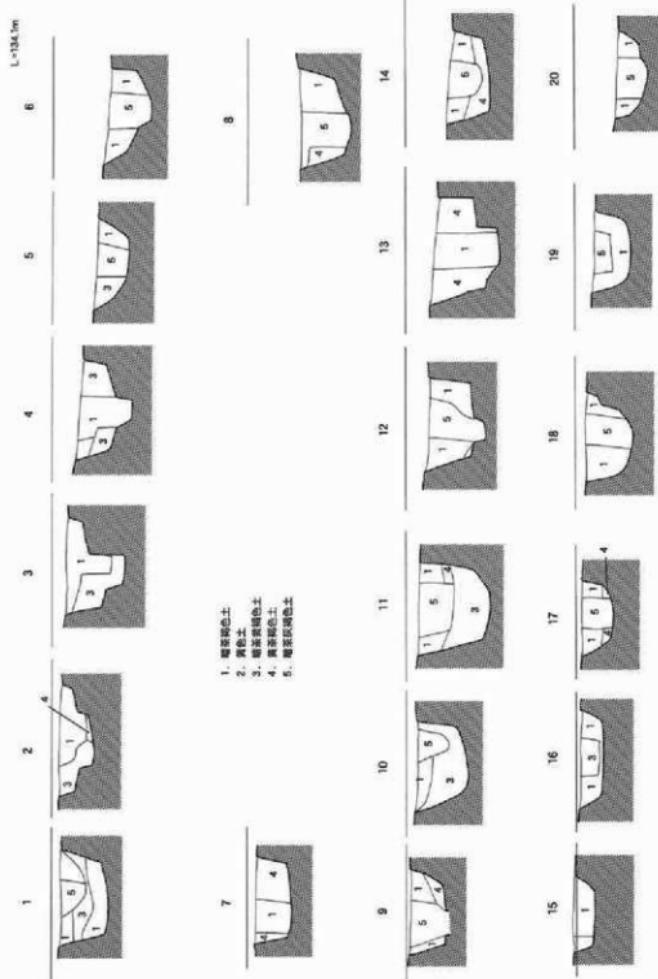
#### 溝2

溝2は5区の北東部より検出された。後世の削平により、一部が僅かに残った状態で出土した。検出した溝は北から南流しており長さ4.3m、幅0.84m、深さは僅か10cmであった。この溝からは土師器、須恵器合わせて30片あまりの土器が出土した。図示したものは、糸切底の須恵器碗と軒平瓦が1点である。(第47図7、8)

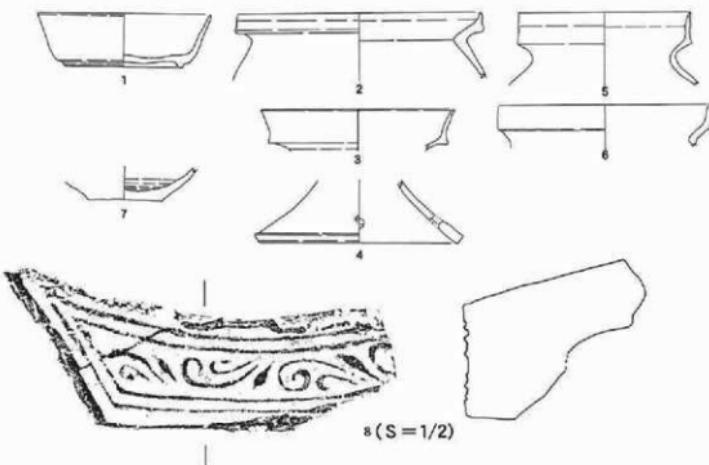
#### 建物6

建物6は5区の南西部から検出された。この建物もまた主軸を南北方向にもち、桁行5間、梁間2間に東と北の2箇所に扉が付く構造である。床面積は79.5m<sup>2</sup>を測り、今回の調査の範囲内では最も規模の大きい建物である。柱間寸法は桁行が190~240cm、梁間が232~250cmを測りややばらつきがある。掘り方は大部分が隅丸方形で、1辺の長さは60~88cmで建物7と比べて僅かに小さい。深さは後世の耕作地造成によりかなり削平されており全般に浅く、18~58cmを測る。柱の太さは柱痕跡から判断して25~45cmと推定され多少幅がある。

北側の廊の柱穴は他の柱穴に比べて貧相で、特に東の廊と比べると歴然としている。この違いは建



第46図 建物6柱穴断面図 ( $S = 1/40$ )



第47図 郡5区出土遺物実測図 ( $S = 1/2, 1/4$ )

物の構造の違いか、又は後世の削平によって僅かに柱穴の底が残っただけの状態かは判別しがたい。

柱穴埋土中より須恵器、土師器が出土している。24箇所の柱穴のうち12箇所から出土しているが、大多数は器種も判別できない小片のため図示できたのは僅か1個体のみである。P-8から出土した須恵器壺である。(第47図1) その他の須恵器は壺・甕・高台付甕などの器種が見られる。土師器は器種を特定できる破片は僅かであるが、皿・高杯が見られる。

#### 出土遺物(第47図)

5区からの出土遺物は全体に少なく、コンテナに2箱分出土しただけである。理由は台地上に位置するため、遺構検出面までの埋土が浅く、包含層が部分的にしか残存していなかったからだと考える。出土遺物は2時期に分かれており、一つは弥生時代後期で、他一つは奈良時代後半から平安時代にかけてと思われる時期である。

図示した遺物は遺構に伴うもので第47図2～6は溝1から出土した。3・5・6は壺で上方に大きく立ち上がる二重口縁をもつ。2は甕で口縁端部が拡張され上方に少し延びる口縁をもつ。4は高杯で脚部に直径1cm程度の円孔透しをもつ。時期は弥生時代後期後半と思われる。

1は建物6の柱穴から出土した須恵器の壺である。焼成はやや不良で灰白色をし、底部は笠きりの後、低い高台が少し開き気味に付く。体部は直線的に外方に立ち上がっており、8世紀後半のものと思われる。

7と8は溝2から出土した。7は須恵器の甕で底部は糸引きを施している。8は軒平瓦である。約1/6程度の破片であるが、瓦当部分は約半分残存しており、均整唐草文様が見られる。内区の文様は中心部の花頭を欠いているが、その回りには中心葉と3単位の唐草が配されている。内区と外区の境は2重の圓線をめぐらしている。瓦当部分の端には圓線から唐草にかけて斜めに範傷がみられる。頸面と瓦当面のなす角度はほぼ直角で、頸面の幅は2cmを測る。平瓦部の凹面と頸部分は横方向の鎧

削り、凸面は縦方向の笠削りが施されており、布目は見当たらない。胎土砂礫をあまり含まず、焼成も非常に良好で須恵質をしており、断口は中心が灰色、その外は暗赤色を呈し、外面は青灰色を呈す。

#### (6) 6区（第48図）

6区は5区の北に隣接しており5区より平均で1mあまり高い位置にある。検出した遺構は多数の土壤と溝、ピットである。6区もやはり基盤層は北から南に傾斜しており、埋土の厚さは一定ではない。検出した遺構のうち、大多数を占める土壤は約一個を数えるが図示したのは53個である。遺構は何れも基盤層を掘り込んだ状態で検出された。調査区の南西と南東部分から検出された20cm前後のピットは中に埋まっていた土は灰茶色の腐食が進んでいない土で新しいものと思われるため、遺構の説明は省いた。

#### 土壤1（第49図）

調査区の西端に位置し、長さ1m弱の楕円形を呈する。基盤層の黄色度を切り込んで検出された。深さは10cmと浅く、上面は後世の削平を受けており、出土遺物も無く時期は不明である。

#### 土壤2（第49図）

調査区の西から検出された。これも長さ1m弱の楕円形を呈し、東半分はピットと切り合っているが前後関係は不明である。遺物は何も無く、時期は不明である。

#### 土壤3（第49図）

土壤2の東に位置し、長さ1.3mの楕円形を呈す。深さは20cmと浅く、後世の削平を受けている。時期は不明である。

#### 土壤4（第49図）

平面は不整形な楕円形を呈す。その形状から二つの土壤が一緒に検出された可能性もある。深さは28~42cmを測る。これも時期は不明である。

#### 土壤5（第49図）

土壤3の東に位置する。平面は長さ1.89mの不整な楕円形をし、深さは16~28cmを測る。

#### 土壤6（第49図）

土壤5の南に位置し、平面は長さ1.58mの長楕円形である。南側にテラス状の段を持ち、深さは10~23.4cmである。中央に後世のピットが切り込んでいる。

#### 土壤7（第49図）

調査区の中央付近に位置する。平面は長さ1.4mの楕円形をし、東西の両端にテラス状の段が見られる。深さは8~20cmを測る。

#### 土壤8（第49図）

調査区の中央南端に土壤9に隣接して出土した。平面は長さ1.38mの不整楕円形をし、深さは25cmを測る。

#### 土壤9（第49図）

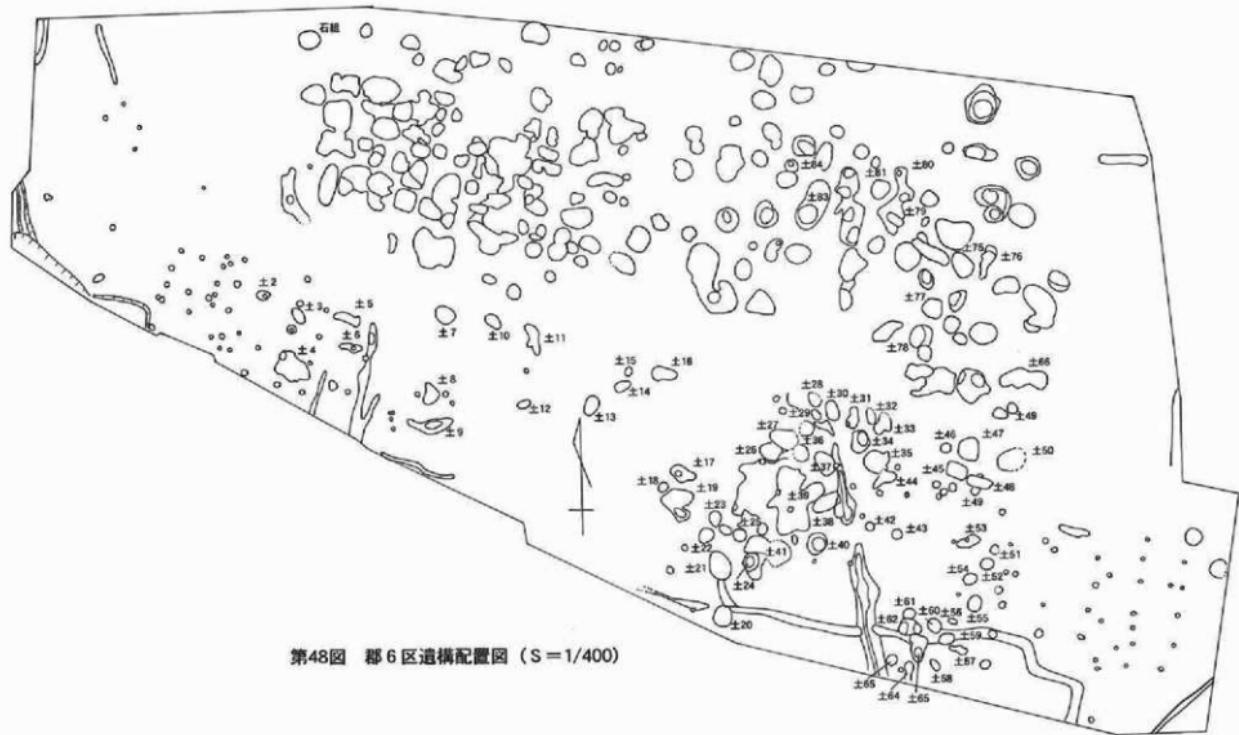
平面は長さ3mの長楕円形をし、途中に緩やかな段を持つ。深さは33cmを測る。

#### 土壤10（第49図）

調査区の中央部に位置し、平面は長さ1.4mの楕円形をしている。深さは22cmをはかる。

#### 土壤11（第50図）

土壤10の東に位置し、平面は長さ2.15mの長楕円形である。底は平坦で、深さは20cmを測る。



第48図 郡6区遺構配置図 (S=1/400)

#### 土壤12（第50図）

長さ0.89mのやや小型の楕円形を呈する土壌である。深さは54cmと少し深い。

#### 土壤13（第50図）

調査区の中央部に位置し、土壌14～16までが並んで検出された。平面は長さ1.32mの楕円形で、東半分にテラス状の段を持つ。深さは12～38cmを測る。

#### 土壤14（第50図）

平面は長さ1.14mの楕円形をし、深さは17cmと浅い。

#### 土壤15（第50図）

平面は長さ0.7mの楕円形をしており、小型の土壌である。底は東から西へ傾斜しており、深さは10～20cmを測る。

#### 土壤16（第50図）

平面は長さ0.4～0.95×1.65mの長方形状を呈し、底は平坦で、深さは15cmと浅い。

#### 土壤17（第50図）

土壌18、19と並んで検出された。平面は長さ1.06mの楕円形を呈する。中央部分に後世のピットが切り込まれている。深さは30cmで、中には黒褐色土に混じって弥生土器が入っていた。小片のため図示できたのは、壺が1点だけである。（第58図9）

#### 土壤18（第50図）

平面は長さ0.74mを測る、小型の円形に近い土壌である。深さは33cmを測る。

#### 土壤19（第50図）

平面は不整形な形状をしており、2つの土壌が切り合っている場合も考えられる。長さは東西2.34m、南北2.08mを割り、深さは20～50cmを測る。埋土中より弥生土器片がいくらかと瓦質土器が1点出土しているが、いずれも小片のため図示できていない。

#### 土壤20（第50図）

調査区中央の南端に位置する。平面は直径1.24mの円形をしており、深さは53cmを測る。

#### 土壤21（第51図）

平面は長さ1.97mを測る楕円形を呈し、底部は2段になっており、深さは16～48cmまでと幅がある。埋土は暗茶灰色土と黒茶灰色土が入っており、中から弥生土器がビニール袋1杯分出土した。器形の判明しない小片が多く、図示できたのは壺が2個体だけである。（第58図10・11）

#### 土壤22（第51図）

平面は長さ1.22mの楕円形を呈し、深さは56cmを測る。埋土は上方に暗茶灰色土、下方に黒茶灰色土が堆積していた。中には弥生土器が少しと須恵器が1点入っていた。図示したのは弥生時代後期の壺である。（第58図12）

#### 土壤23（第51図）

平面は長さ3.04mの長楕円形を呈するが3つの土壌が重複しているとも思われる。深さは、33～58cmを測り、東端の底部には弥生土器が入っていた。土壌内下層に入っていた土は黒茶褐色土に基盤層の黄色土が混入したものである。出土遺物は図示してない。

#### 土壤24（第51図）

平面は長さ1.27×3.0mの不整形な形をしている。西半分は一段深くなっており、深さは70cmを測

る。下層部の黒茶褐色土と暗灰色粘質土の境部分には土器が入っていた。壺の底部であるが図示しえていない。

**土壤25（第51図）**

平面は長さ0.87mの楕円形をしており、底部は平坦で、深さは28cmを測る。埋土は暗茶灰色土で、下層には基盤層の黄色土が混入していた。

**土壤26（第51図）**

土壤27と切り合った状態で検出された。平面は長さ1.58mを測るやや歪な楕円形をしており、深さは10cmとかなり浅い。

**土壤27（第51図）**

平面は楕円形を呈するが、東部分は後世の溝によって切られており残存長は1.58mを測る。深さは38cmで、中には暗茶灰色土が入っていた。

**土壤28（第51図）**

この土壤も北側を後世の溝によって切られており、平面は楕円形をしているが、残存長は0.75mである。深さは18cmと浅い。

**土壤29（第52図）**

平面は楕円形を呈し、長さ0.9mの小型の土壤である。深さも10cmと非常に浅い。

**土壤30（第52図）**

平面は長さ1.38mの楕円形状を呈し、深さは28cmをはかる。埋土中より弥生時代後期の壺の破片が出土したが、図示しえてない。

**土壤31（第52図）**

平面は長さ1.46mの長方形を呈し、深さは14cmと非常に浅い。

**土壤32（第52図）**

平面は長楕円形を呈するが、北側を後世の溝によって削平されており、残存長で0.97mを測る。深さは10cmと浅い。

**土壤33（第52図）**

この土壤も溝によって削平を受けており、北側を欠く。残存長は1.42mを測り、深さは17cmを測る。埋土中より弥生土器が2点出土している。図示できたのは壺と思われる底部である。（第54図13）

**土壤34（第52図）**

平面は楕円形を呈するが、2段になっており、下方の長さは0.98m、上方の長さは1.48mを測る。深さは12cmを測り、浅い。埋土は暗茶灰色土で、弥生土器がいくらか入っていた。小片のため、図示しえていない。

**土壤35（第52図）**

やや歪な楕円形を呈す。長さ1.72mを測り、深さは25cmを測る。埋土は暗黄茶灰色土で弥生土器が入っていた。図示しえていない。

**土壤37（第52図）**

平面は歪な長方形を呈す。長さは1.22m×1.28mで、東半分はテラス状に一段高い。深さは30cmで、埋土は暗灰茶色土である。

**土壤38（第52図）**

平面は長さ1.04mの楕円形を呈し、南側に2箇所テラス状の段がつく。深さは24~38cmを測り、埋土は暗茶灰色土で、下層は基盤層の黄色土が混入する。

#### 土壙39（第52図）

平面は楕円形を呈すが、西側を後世の削平によって欠いており、残存長は1.45mを測る。埋土は暗茶灰色土で、深さ28cmを測る。

#### 土壙40（第53図）

平面は長さ1.45mの楕円形を呈し、中心部は直径0.95mの円形状に一段低くなっている。下層部の埋土は暗灰茶色粘質土で20~40cm大の石が入っていた。図示できてはいないが、弥生時代後期の土器が出土している。

#### 土壙41（第53図）

後世の削平によって西側を欠くが、現状では直径1.86mの半円形を呈す。深さは37cmを測り、埋土中には弥生土器が20片ばかり入っていたが、図示できるものは無い。

#### 土壙42（第53図）

平面はやや楕円に近い円形を呈し、直径は0.65mを測る。深さは20cmで、埋土は灰茶色土で新しい時期の感がする。

#### 土壙43（第53図）

この土壙も平面は円形で直径0.72mの小型土壙である。深さは24cmを測り、埋土は黒茶色土である。

#### 土壙44（第53図）

平面は北東部分を欠いており、不整形な形をしている。残存長で1.66mを測る。深さは20cmを測る。

#### 土壙45（第53図）

平面は1.45m×1.44mの長方形をしており、深さは25~36cmを測る。埋土は暗灰茶色土で下方は基盤層の黄色土が混じる。

#### 土壙46（第53図）

平面は長さ0.7mの楕円形をしており、深さは18cmを測る小型の土壙である。

#### 土壙47（第53図）

平面は北端の一部を欠くが、長さ1.66mの楕円形状を呈し、深さ8~22cmを測る。埋土は暗茶褐色土に基盤層の黄色土が混じっていた。

#### 土壙48（第53図）

土壙49と直交して切り合った状態で検出された。平面は長方形で、長さ0.75×1.84mを測り、深さは32cmを測る。

#### 土壙49（第53図）

平面は長さ0.55×1.53mの長方形を呈し、土壙48によって切られている。深さは28cmを測る。

#### 土壙50（第53図）

平面は東半分を後世の削平により欠いているが、楕円形と推定される。現状では長さ1.5mを測り、深さは34cmと比較的浅い。

#### 土壙51（第53図）

平面は東端を欠くが長さ0.72mの楕円形を呈し、深さ20cmを測る、小型の土壌である。

**土壌52（第53図）**

平面は長さ1.04mの楕円形を呈し、底部は平坦ではなく多少凹凸がある。深さは14~28cmを測り、暗灰茶色土が埋まっていた。

**土壌53（第54図）**

平面は歪な長方形を呈し、長さは0.72×1.68mを測る。底部は中央部が高くなっている、深さは12~30cmを測る。埋土は暗灰茶色土である。

**土壌54（第54図）**

平面は長さ1mの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。埋土は暗灰茶色土で下層には基盤層の黄色土が混入する。

**土壌55（第54図）**

平面は長さ1.22mの楕円形で、深さは35cmを測る。埋土は暗灰茶色土だが、下層は基盤層の黄色土が混入している。

**土壌56（第54図）**

平面は長さ0.62mの楕円形の小型土壌である。底部は平坦で深さ39cmを測る。

**土壌57（第54図）**

平面は楕円形に近い長楕円形で、長さ1.3mを測る。深さは20~26cmを測り、埋土は暗茶灰色土である。

**土壌58（第54図）**

平面は長さ0.9mの楕円形を呈し、底部は平坦で28cmを測る。埋土は暗茶灰色土である。

**土壌59（第54図）**

これも楕円形を呈する土壌で、長さ1.06mを測る。底部は平坦で、深さは20cmを測る。

**土壌60（第54図）**

長さ1.1mの円に近い楕円形を呈するが、東側にはテラス状の段がつく。深さは17~30cmを測る。中から弥生土器が出土した。壺の底部である。（第54図14）

**土壌61（第54図）**

平面は円形を呈し、直径0.78mを測る。深さは38cmを測り、中には暗茶灰色土が埋まっていた。

**土壌62（第54図）**

平面は長さ1.62mの楕円形を呈し、東西の端は一段低い構造である。深さは21~40cmを測る。

**土壌63（第54図）**

後世の削平により、北側を欠くが、平面は楕円形を呈すると思われる。北側はテラス状に一段高くなっている。深さは39~48cmを測る。埋土は暗茶灰色土で、下層には基盤層の黄色土が混じる。

**土壌64（第54図）**

東側の一部を欠くが、平面は楕円形を呈す。深さは27cmを測り、中には弥生土器と須恵器が入っていた。何れも小片のため図示できない。

**土壌65（第54図）**

平面は楕円形を呈し、長さ0.8mを測る。底部は平坦で深さは32cmを測り、埋土は暗茶灰色土である。

#### 土壤66 (第55図)

調査区の北東部に位置し、平面は長さ $0.9 \times 1.47m$ を測る長方形状を呈す。底部北半は一段下がっており、深さは23~30cmを測る。基盤層を切って掘り込まれており、埋土は茶灰褐色土が入っていた。中から土師器と須恵器が僅かに出土している。小片のため図示はできないが、須恵器は奈良~平安時代の坏と思われる。

#### 土壤67 (第55図)

平面は不整形な団子状を呈するが、2つの土壤が重複しているものと見られる。北側のものは長さ2.8mの楕円形を呈し、南側のものは、1.86mを呈す。底部は平坦で、深さ43cmを測る。埋土中より高坏の脚部が出土している。図示できていないが、低脚で、3方向に円孔の透かしをもつものである。弥生時代後期末と思われる。

#### 土壤68 (第55図)

平面は長さ1.4mの楕円形を呈し、南側はテラス状の段を持つ。深さは5~30cmを測り、埋土下層は灰褐色土で、やや新しい様相を呈す。

#### 土壤69 (第55図)

平面は長さ $1.6 \times 1.9m$ の長方形を呈する。中心部は少し浅くなっている、深さは13~30cmを測る。埋土は灰茶褐色土である。

#### 土壤70 (第55図)

平面は円形に近い楕円形を呈し、長さ1.82mを測る。底部は南側が深くなっている、深さは23~39cmを測る。埋土は下層に暗茶灰色土が入っていた。

#### 土壤71 (第56図)

調査区の北東端に位置する。平面は歪な円形を呈し、直径は2.3~2.58mを測る。3段に傾斜しながら掘り込まれており、底部はやや擂鉢状に窪む。深さは65cmを測る。埋土は灰茶色土~暗灰茶色土である。

#### 土壤72 (第55図)

平面は長さ1.83mの円に近い楕円形を呈し、2段に傾斜して掘り込まれている。底は擂鉢状に窪んでおり、深さは60cmを測る。埋土は何層かに分かれているが、粘質土が入っていた。

#### 土壤73 (第56図)

土壤74と並んで検出された。平面はほぼ円形を呈し、直径1.2mを測る。北側は幾分テラス状になっており深さは13~42cmを測る。埋土は灰茶色土~濃灰茶色土である。

#### 土壤74 (第56図)

この土壤も円形に近い形状をしており、直径は1.12~1.26mを測る。埋土は土壤73と同じで、深さは30cmを測る。

#### 土壤75 (第56図)

平面は卵形に近い楕円形を呈し、長さは1.9mを測る。底部は中央部分がやや浅くなっているが、深さは29~57cmを測る。埋土下層には濃灰色粘質土が入っていた。

#### 土壤76 (第56図)

南端の一部欠くが、平面は歪な長楕円形を呈し、現存長は2.3mを測る。底部は平坦だが、北側はテラス状に段がついており、深さは18~44cmを測る。

#### 土壌84（第57図）

調査区の北半分の位置から検出された。平面はやや長めの橢円形を呈し、3.65mを測る。底部中央は少し浅くなっている。それを境に北側は円形に掘り込まれている。深さは54~64cmを測る。南北分からは弥生時代後期の壺が出土した。（第58図16）埋土は4層に分かれており、弥生土器は比較的上層の灰茶色土と濃灰茶色土の境あたりに入っていた。

#### 石組土壌（第57図）

調査区の北西部に位置する。平面は楕円形と長方形を合わせた形状をしており、長さは0.54×1.32mを測る。土壌の上面及び西側には15~40cm大の石がびっしりと詰まっている状態で、入っていた。しかし中心から東部分には石の無い部分がある。断面でもその部分は底部が一段深くなっている意識して石を置いていなかったことがわかる。深さは27~30cmを測る。埋土は上層が灰黄色土、下層が濃灰黄色粘質土で、あまり腐食の進んでいない土である。

#### 出土遺物（第58図・59図）

6区からの出土遺物はコンテナに6箱分である。全体の量はあまり多くはないが、その大部分は弥生土器で、他の調査区に比べて弥生土器の占める割合が多い。弥生土器以外には瓦、土師器、須恵器、備前焼等が出土している。図示したのはその一部である。

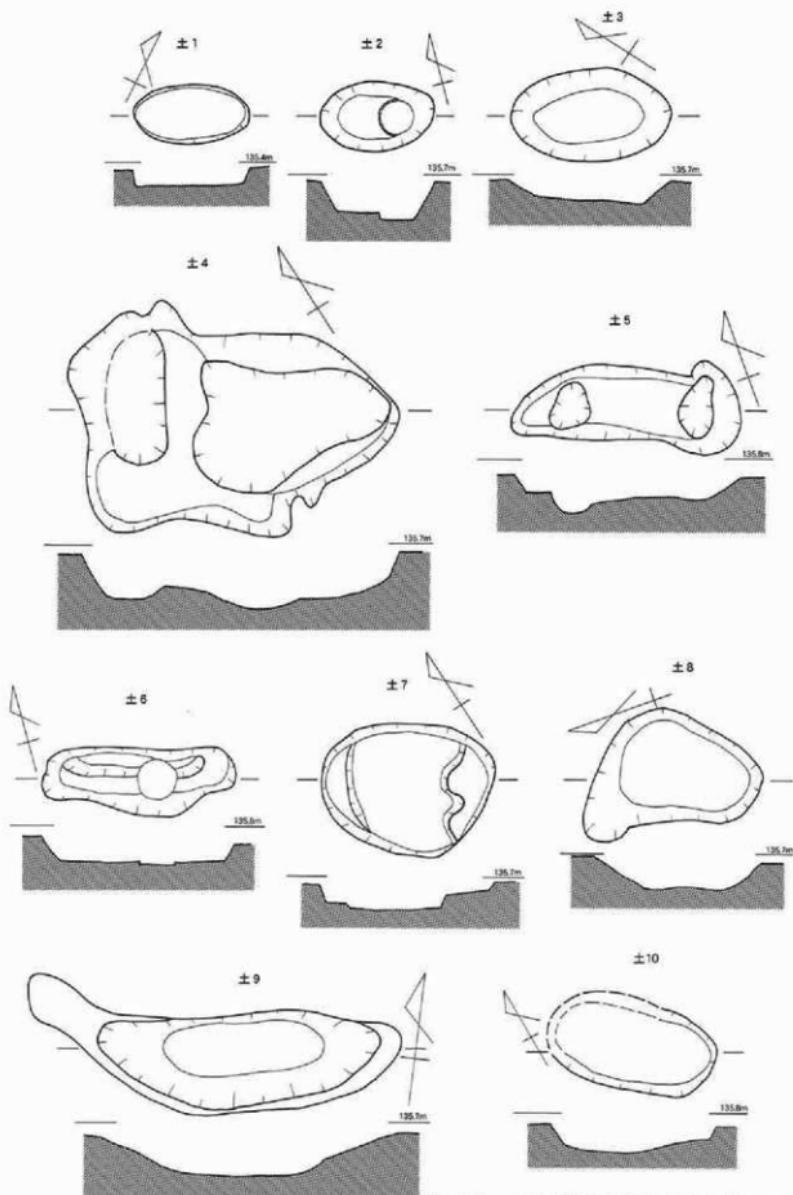
9~18、20は弥生土器である。16の壺は口縁端部が拡張しているが上下にはまだ伸びていない。また、頸部には9条の沈線を施しその下方には範磨きが見られ、後期前半と思われるが、他は後期後半と思われる。

15、17、18、20は土壌39周辺の暗灰茶色土の溜まった所から検出された。弥生時代後期後半の範囲内にある土器である。

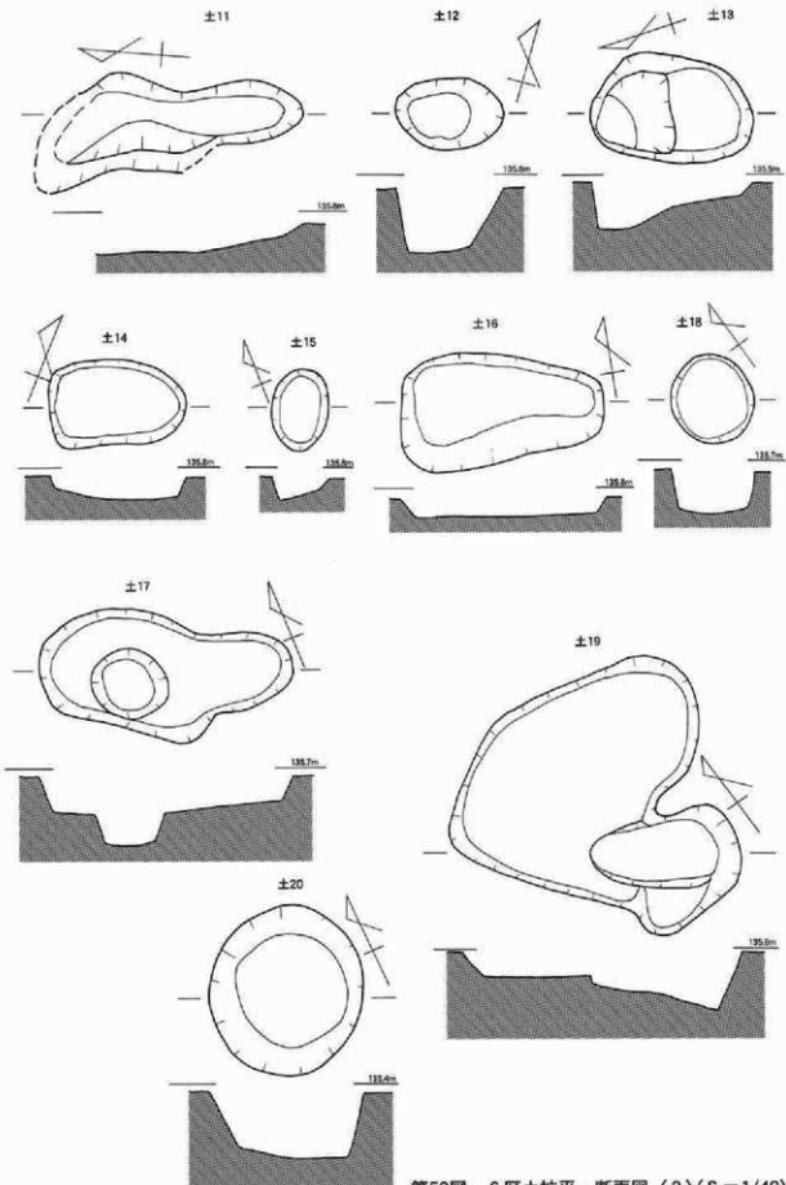
19、21~24は全て須恵器である。19は調査区の西端、土壌1の傍の掘り込みから出土した。その付近からは後述する軒丸瓦も出土している。21、24は碗、22、23は小皿である。4点とも底部は糸引きである。21、22は溝から、23はピット1から出土しており、底部外面には墨書きが見られた。1文字のみで文字は判読できない。24はピット2から出土しており、高台の付く碗で底部は糸引きの後、高台を付いている。器形は土師器碗のように丸みを帯びており、あまり類例を見ない。美作地域で須恵器底部に糸引き痕のみられるものは11世紀後半代からで、津山市の美作国府跡から出土している。県南でも12世紀代に比定されている。本遺跡からの出土須恵器も概ね同時期と考える。

調査区西端の表土層より軒丸瓦が2点出土している。2点とも約1/3周残存しており、焼成は軟質で、灰白色を呈す。推定で瓦当面の直径は25が16.8cm、26が16.2cmである。どちらも同じ文様であるが、同范かどうかは不明である。外区には一重の圓線が巡り、内区は8葉の単弁蓮華文で蓮弁は細く高く隆起し、楔形の間弁を持つ。しかし内区の文様は本来凸表現である部分が凹表現されており、全体的に立体感に欠けた印象をもつ。また、焼成が軟質のため、表面は磨耗しており、調整は不明で、撚削り痕、布目痕は見当たらない。美作地域内での同一の瓦当文は見当たらないが、今岡廃寺（大原町）に凹凸逆表現の軒丸瓦が見られる。比較的似た蓮弁は柏寺廃寺（総社市）出土のものに見られる。今岡廃寺の瓦は8世紀前半に、柏寺廃寺の瓦は奈良時代中葉とされている。本遺跡の軒丸瓦はその特徴から奈良時代後半代と見て良いと思われる。

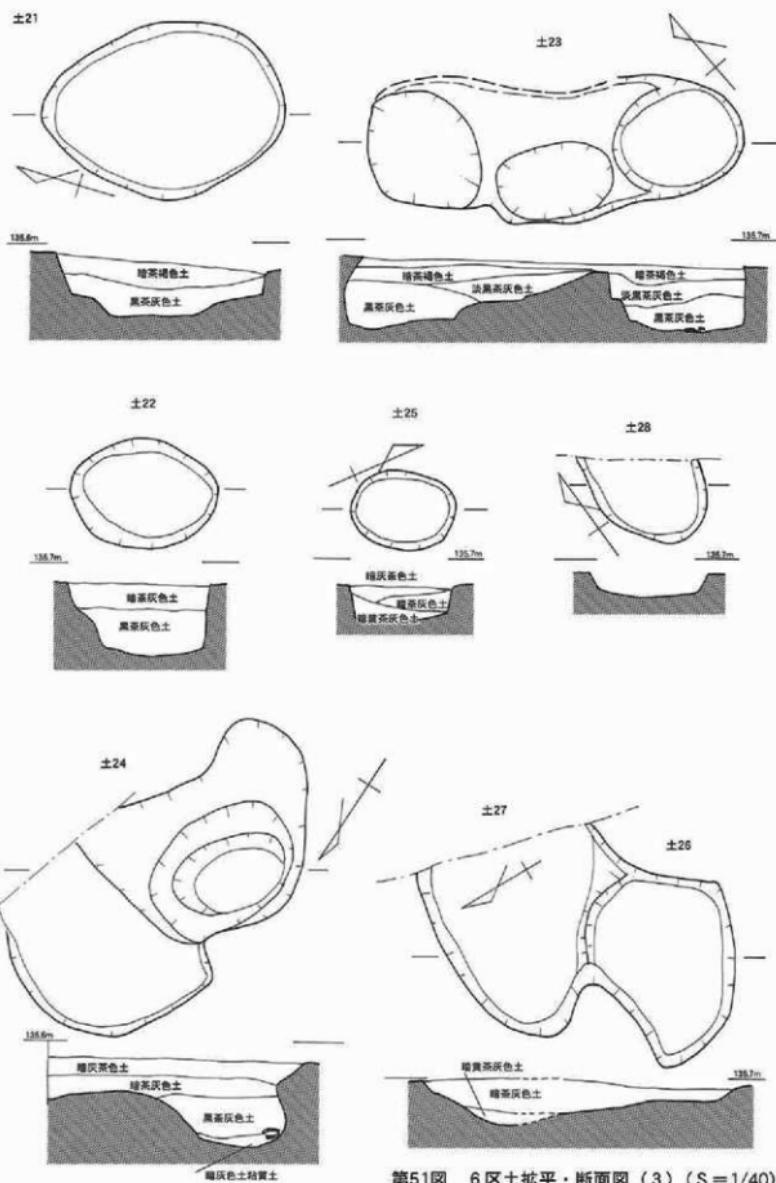
図示した以外の瓦は瓦当の付かないもので、何点か出土している。外面には格子の叩き目が見られ、内面には布目が見られるものである。



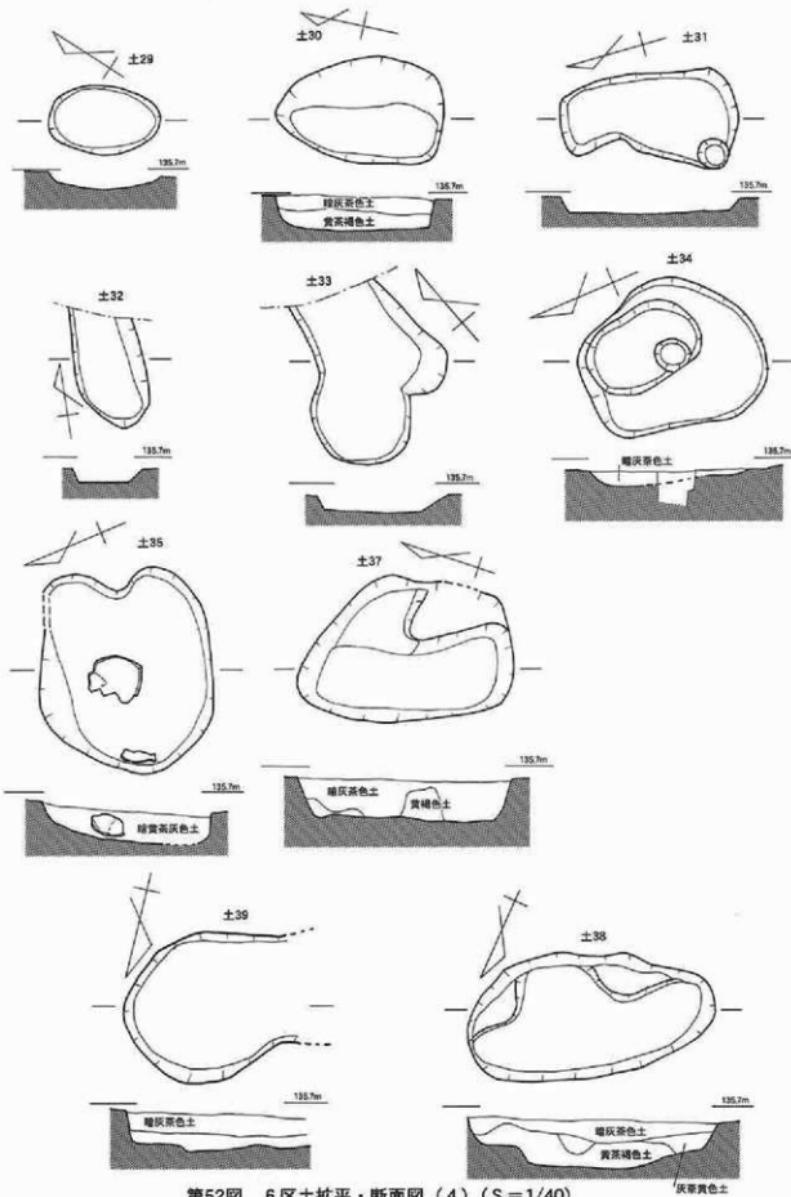
第49図 6区土拵平・断面図(1) (S=1/40)



第50図 6区土塗平・断面図 (2) ( $S = 1/40$ )

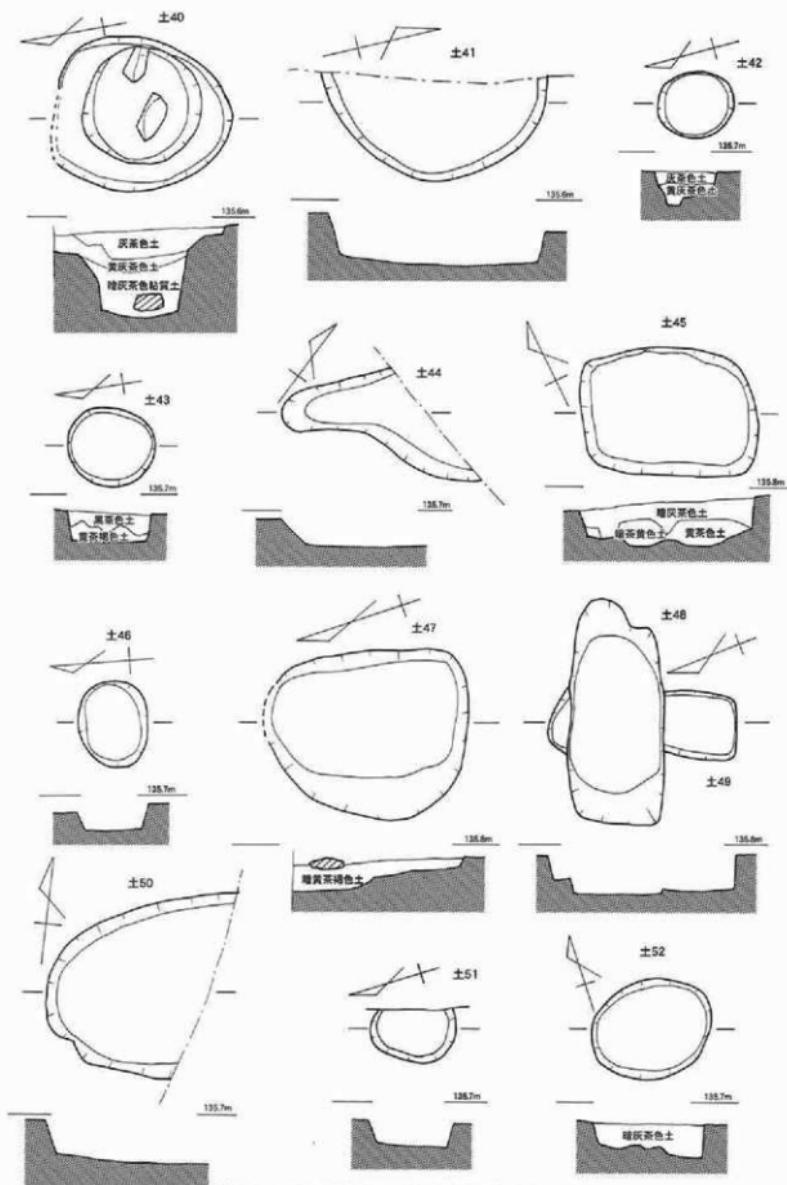


第51図 6区土拵平・断面図 (3) ( $S = 1/40$ )

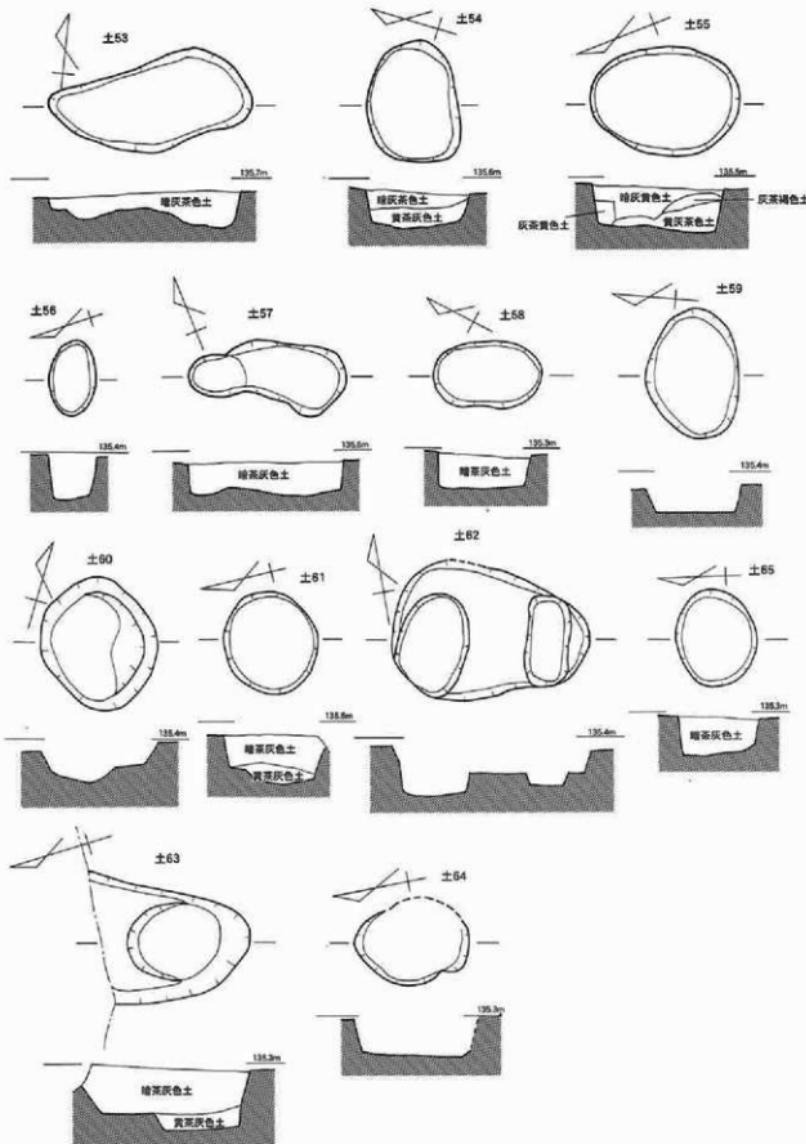


第52図 6区土抜平・断面図(4) ( $S=1/40$ )

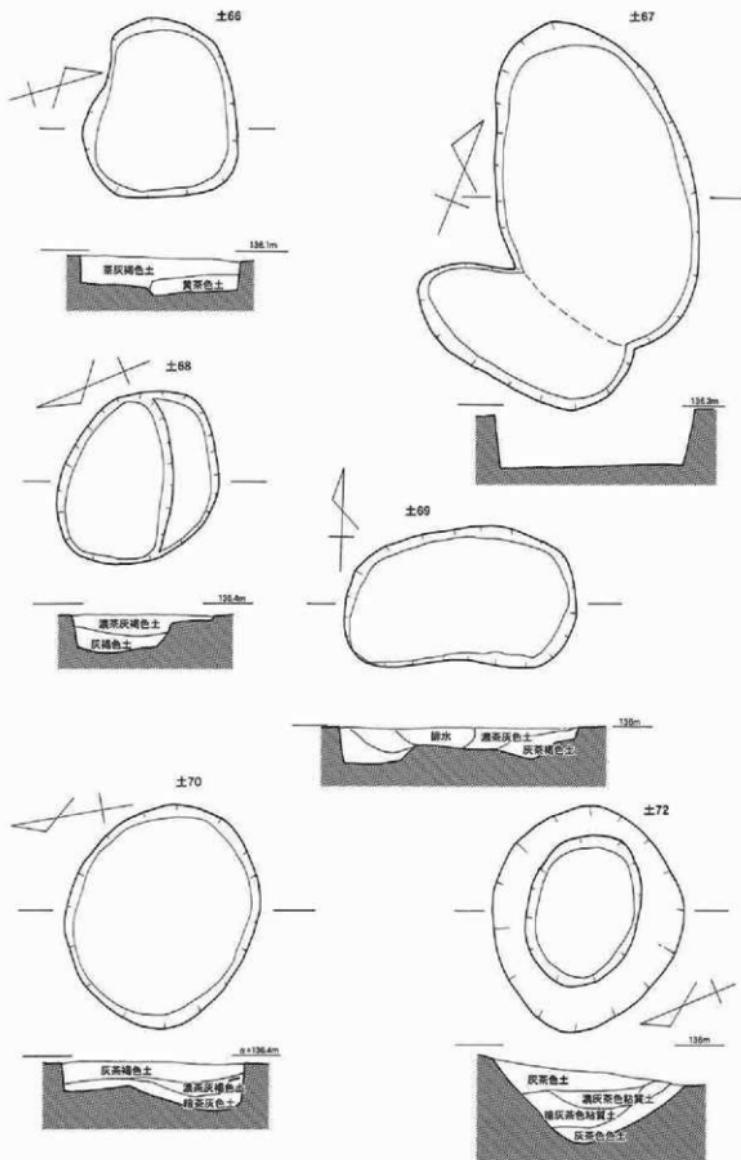
-48-



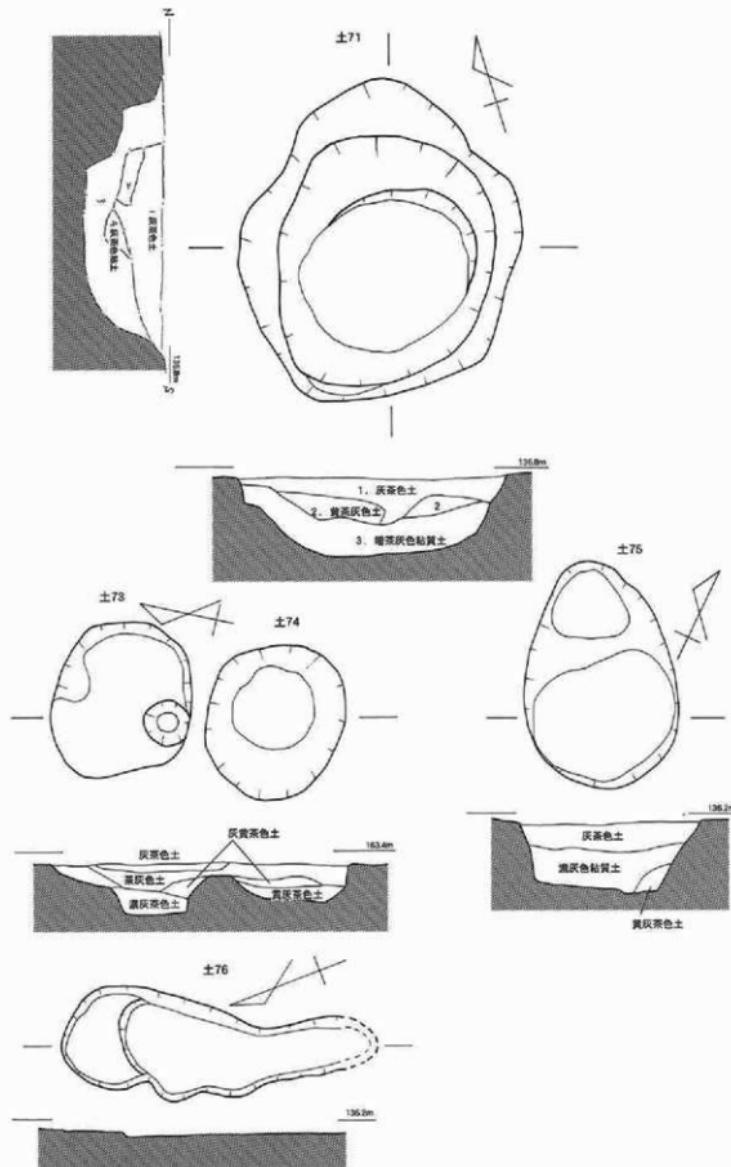
第53図 6区土抜平・断面図(5) (S=1/40)



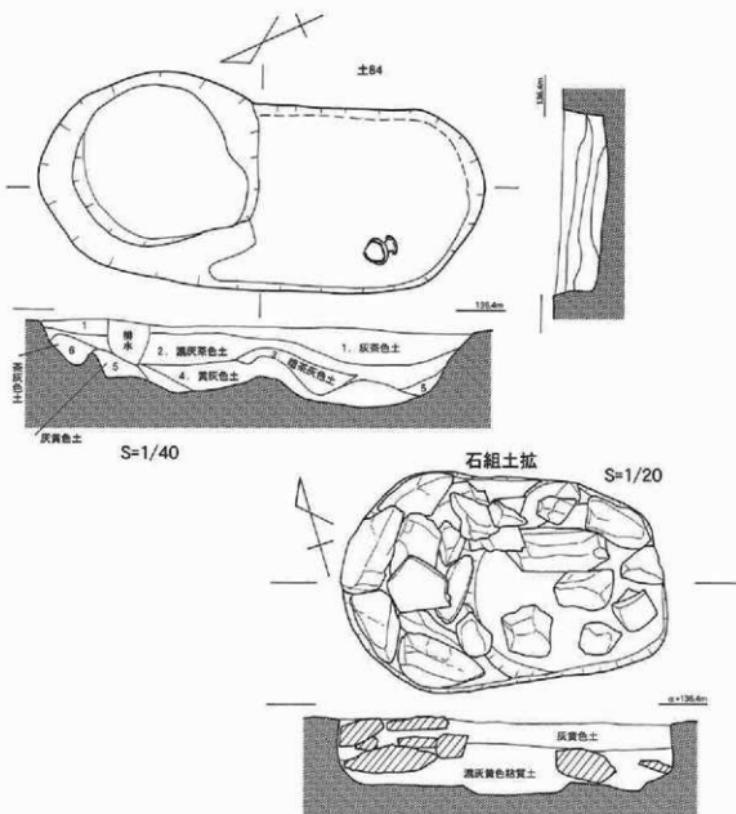
第54図 6区土抜平・断面図 (6) ( $S = 1/40$ )



第55図 6区土払平・断面図(7) ( $S=1/40$ )



第56図 6区土抜平・断面図(8) ( $S = 1/40$ )



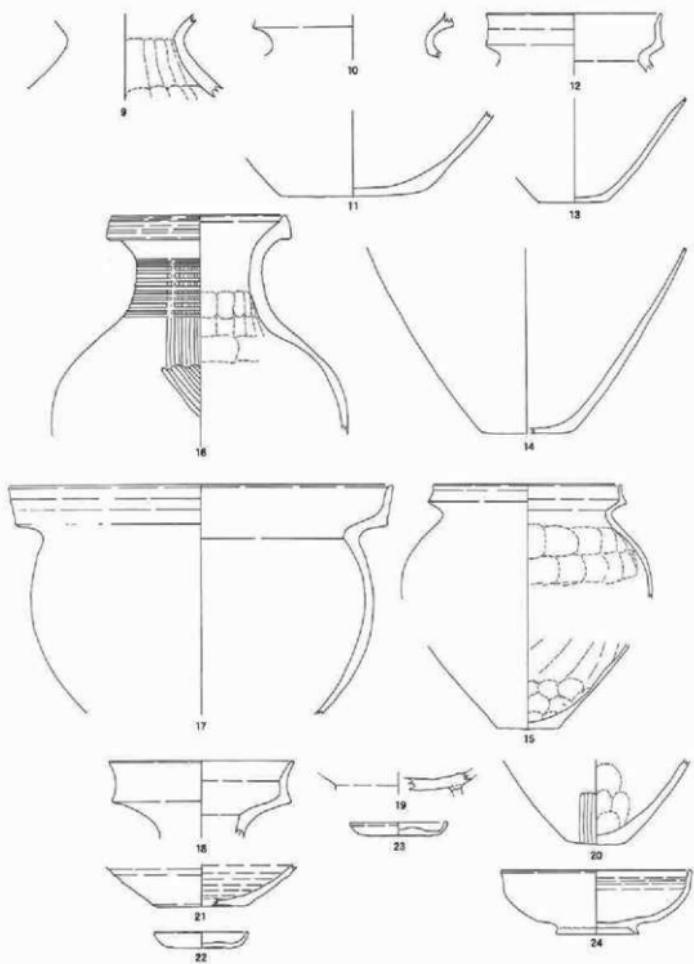
第57図 6区土拵平・断面図(9)(S=1/20・1/40)

#### (7) 7区(第60図)

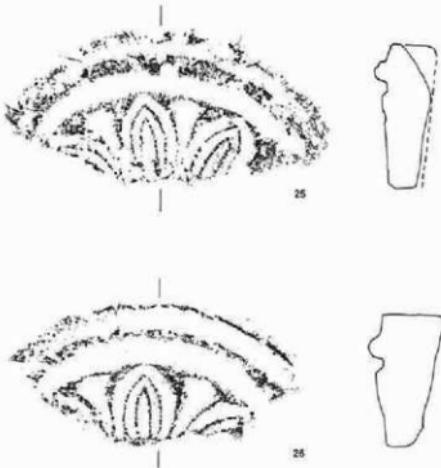
7区は今回の発掘調査の最も北に位置する調査区で、標高も138mと高い位置にある。従って、北端は耕作土を除去した直ぐ下から基盤層の黄色土が検出される。南側は灰茶色土が堆積するものの浅く、遺構は上面がいくらか削平された状態で検出された。検出された遺構は大部分は新しい時期の溝、ピット、土壙で埋土はあまり腐食の進んでいない、灰茶色土が入っていた。注目されるのは調査区の南西部分から掘立柱建物が検出されたことである。

#### 建物10(第61図)

調査区の南西端から検出された。桁行3間、梁間3間の総柱構造で、主軸を東西に向けて建てられている。床面積は42.4m<sup>2</sup>を測り、柱間寸法は桁行が236~250cm、梁間が190~205cmと比較的均一



第58図 6区出土遺物実測図(1) ( $S=1/4$ )



第59図 6区出土遺物実測図（2）（S=1/2）

である。掘り方は隅丸方形で、1辺が90～140cmと本遺跡では最も大きい。16基の柱穴のうち、15基から柱材が遺存しており、太さは直径42～57cmを測る。柱穴は後世の耕作面造成のために、上方はかなりの削平を受けており、検出時の柱穴の深さは浅いものは35cm、深いものでも58cmである。掘り方の埋土は暗灰色土～暗灰茶色土で柱底の回りには暗灰色粘質土が埋まっていた。

建物の西端は溝と切り合っている。前後関係は溝が後から掘られているが、幸いに浅いため、柱穴は上方がいくらか削平を受けている状態で大きく破壊されてはいない。

#### 出土遺物

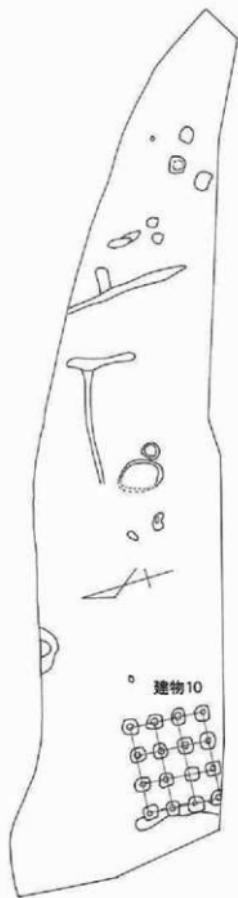
7区から出土した遺物はコンテナに1箱分しか無い。表土層が浅かったことと、遺構が少なかったことが理由と思われる。図示したものは無いが、大部分は瓦である。全て破片で、軒瓦と平瓦である。何れも凹面は布目が見られ、凸面はなでて施したもの、格子状の叩き目が残るもの、縄目状の叩き目が残るもの3種類が見られる。須恵器の器形がわかる物は少なく、僅かに底部糸引き痕のある碗と推定される小片が1点見られる。土師器も僅かしか出土してなく、器形のわかる物は少ない。

出土遺物の全体量が少ないので、出土した瓦の量も知れているが、7区から検出された建物は1棟しかなく、この瓦は建物10に用いられていた可能性が考えられる。

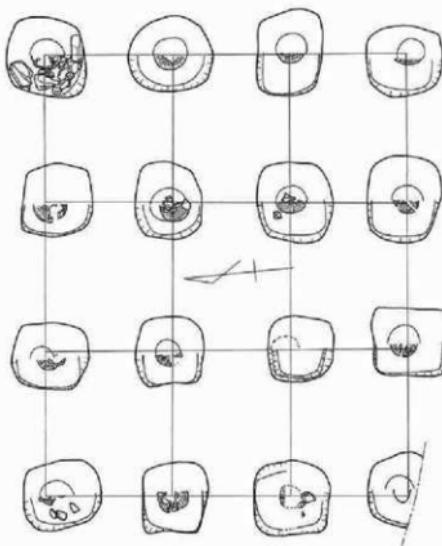
#### (8) 郡遺跡出土品（第63図）

すべて、須恵質の円面鏡である。27は平成10年度に発掘調査を実施した際、建物9の東側埋土中より出土した。28は郡3区の建物4東側の埋土中より出土した。脚部の透かしはX状に穿たれており、凝った意匠である。厳選された胎土、丁寧な成形、良好な焼成とあらゆる点で、洗練された雰囲気をもっており、中央からの搬入品と思われる。29は郡3区の建物5の東から出土した。客部下端

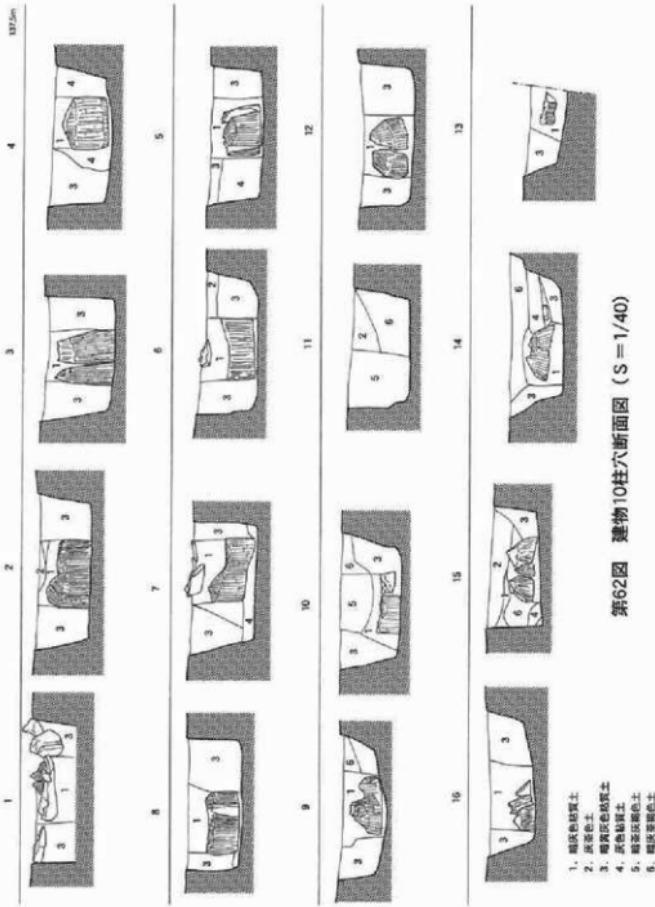
の直径は32.6cmと大型で、脚部には長方形の透かしが穿たれている。30、31は平成12年度調査の際、建物7が検出された、郡4区の南の水田埋土中より出土した。30の最大径は14.9cmを測るで小ぶりなもので、透かしは端部に丸みを持つ長方形である。31は最大径18.3cmを測る。脚部の透かしは長方形である。



第60図 郡7区遺構配置図 ( $S = 1/400$ )



第61図 建物10平面図 ( $S = 1/80$ )



第62図 建物10柱穴断面図 ( $S = 1/40$ )

(9) 郡遺跡出土の石器について (第64~66図)

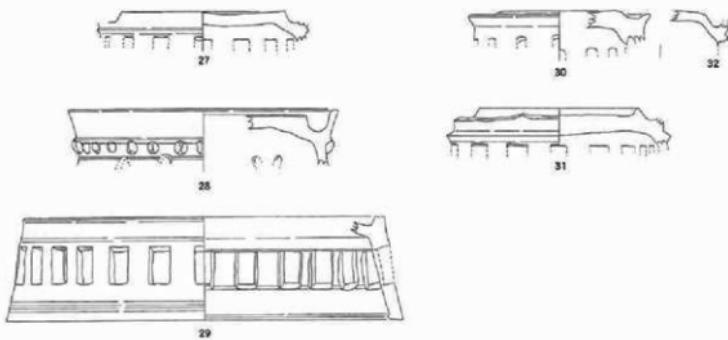
郡遺跡からは、合計31点の石器が出土している。石器の種類は石鏃、石匙、打製石鏃、磨製石庖丁、大型蛤刃石斧、楔形石器、石核、大型板状剥片、剥片などである。

石鏃は3点出土している。

1は基部形態が凸基Ⅱ式で、(1)、両面とも中央部に素材面を残し、形を成形するための剥離痕が器体の周辺部全体に施される。

2は上半分の先端部が残存したものである。これも、中央に素材面を残している。

3は基部形態が平基式で他の石鏃に比べ、やや大きな剥離痕である。また表面の風化の度合いも他



第63図 郡遺跡出土硯実測図 ( $S = 1/4$ )

のものより進んでおり白色化している。

石匙およびスクレイバーは5点出土している。

4は横長の剥片素材を縦方向に用いた縦長の石匙である。両面とも周辺部全体に丁寧な調整加工が施され、上端部につまみを作出している。

5は不定形剥片を素材とし、下半分が欠損している。上端部には丁寧につまみを作出している。

6も不定形の剥片を素材とした縦長状の石匙である。丁寧につまみを作出し、下端部の一部が欠損している。

7は横長の剥片を素材としたスクレイバーである。背面には、前段階にも横長の剥片を剥離した剥離面が観察され、規則的な剥片生産が行われていたことが伺える。下端部全面に刃部が形成されている。また表面の風化が進んでおり、他のサヌカイトに比べ白色化が激しい。

8は縦長剥片を素材としており、素材背面の剥離も上端からの加熱による剥離面が観察される。この素材も規則的な剥片生産により剥離された剥片と考えられる。両側辺に刃部と思われる二次加工がみられる。

9は楔形を呈した打製石鎌である。両面の両側辺および刃部に剥離調整が施され、先端および側辺に摩滅痕が観察される。

10は両端が欠損した磨製石庖丁で、二つの穿孔跡があり、両者とも未穿孔である。制作途中の製品と推測される。

11、12は大型船刀石斧で、11は基部、12は先端部の破片である。

13は楔形石器で上下両端および側辺に剥離痕が観察される。

14は船底状を呈した石核で、腹面側および一側辺からの加熱により剥片を剥離している。

15は大型板状剥片で、片面は筋理面で剥離している。

以上、石器の観察結果および共存する土器などからほとんどの石器が弥生時代に属すると考えられる。しかし、3(石鎌)、7・8(スクレイバー)、14(石核)は形態的などから時期が異なるようである。3の石鎌は表面の風化が進んでおり、剥離痕の大きさも他のものに比べ、大きく丁寧な調整で制作されており、绳文時代に属する可能性がある。また、7は縦長剥片を、8は横長剥片を素材と

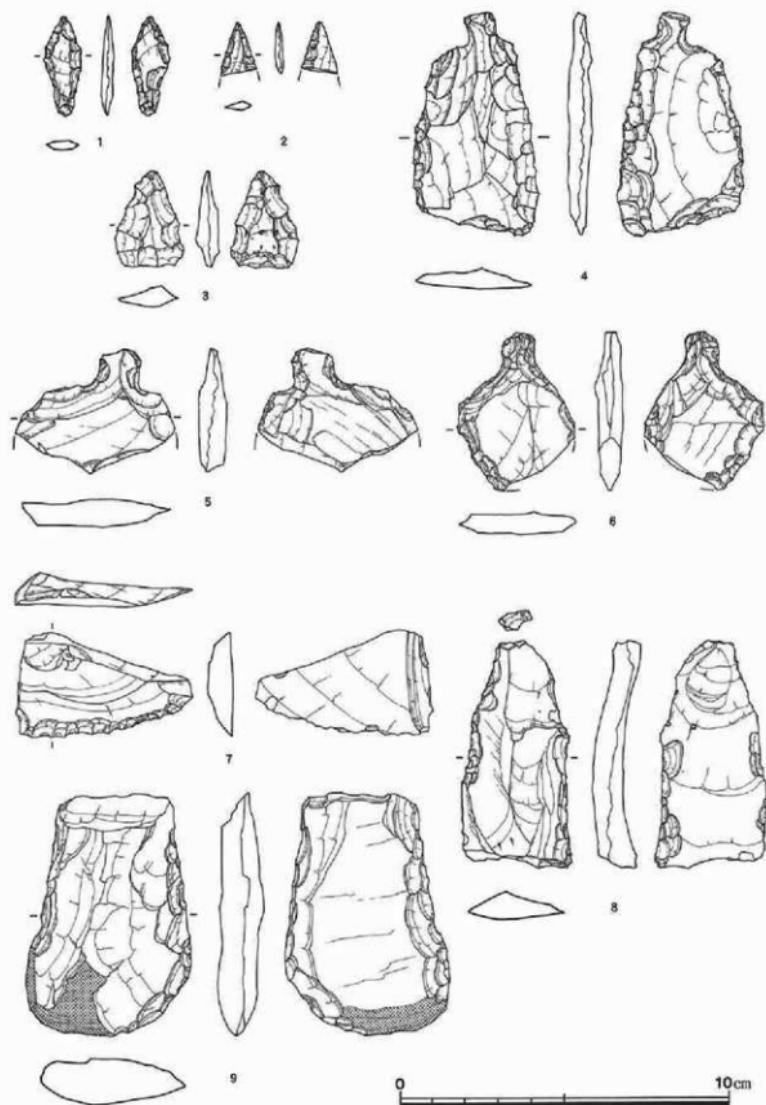
しており、剥片剥離技術から旧石器時代に所属すると考えられる。14の石核に関しても剥片剥離技術に規則性が見られることから、旧石器時代に属する可能性がある。

註)

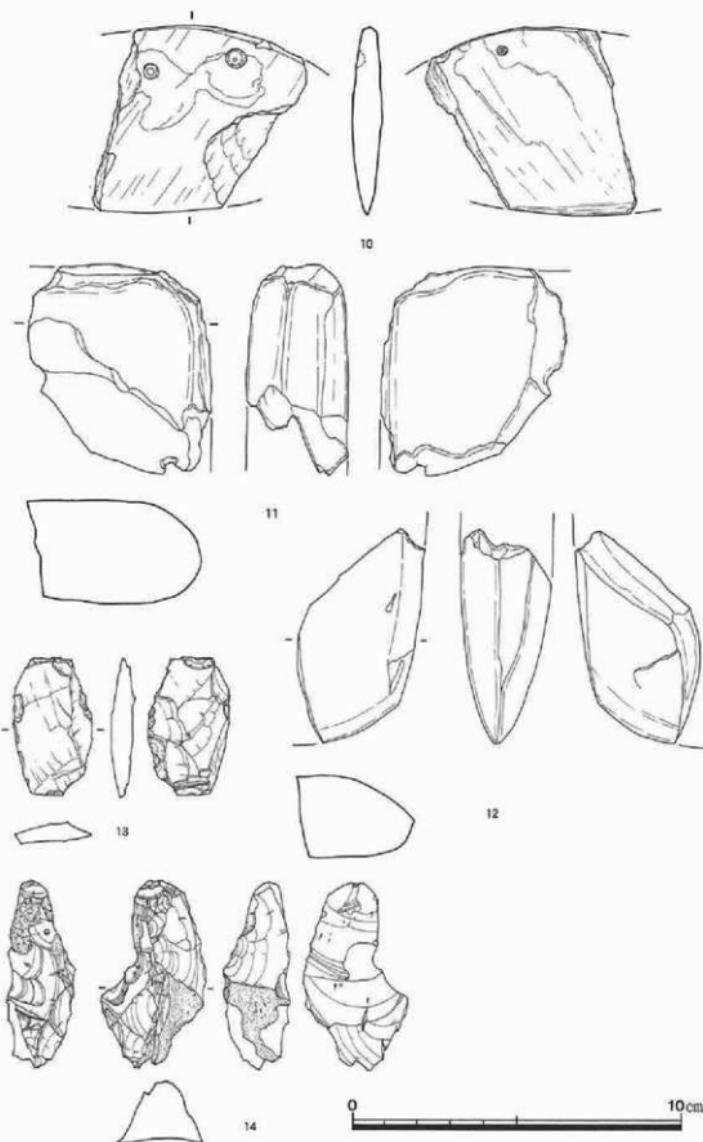
(1) 石器の分類は、松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性 - とくに打製石器について -」『考古学研究』第35巻第4号1989年に従った。

表1 郡遺跡出土石器観察表

番号	地区	遺構・層序	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
図64-1	T-3(二次調査)	灰茶褐色土	石器	サヌカイト	3.1	1.2	0.3	1.1	
図64-2	T-4(二次調査)	灰色土	石器	サヌカイト	1.6	1.1	0.3	0.4	下半分欠損
図64-3	5区Dブロック	溝・セクション3	石器	サヌカイト	3.0	2.1	0.6	3.4	表面風化激しい
図64-4	T-5(二次調査)	灰茶褐色砂礫土	石匙	サヌカイト	6.9	3.8	0.6	18.5	
図64-5	4区Aブロック	黒褐色土	石匙	サヌカイト	3.9	4.8	0.8	13.8	下半分欠損
図64-6	5区		石匙	サヌカイト	4.9	3.7	0.9	13.7	下半分欠損
図64-7	5区Iブロック	ピット2	スクレイパー	サヌカイト	5.3	3.2	0.8	14.3	横長削片素材
図64-8	5区Iブロック	表土	スクレイパー	サヌカイト	6.9	3.3	1.0	24.6	縱長削片素材
図64-9	4区Aブロック	黒褐色土	石器	片岩	7.5	4.9	1.3	66.8	
図65-10	T-5(二次調査)		石庖丁	緑色片岩	5.5	5.8	0.9	38.9	両側刃欠損
図65-11	T-5(二次調査)	灰茶褐色砂礫土	大型始刃石斧	石英片岩	6.4	5.9	3.3	141.1	基部のみ残存
図65-12	T-5(二次調査)	灰茶褐色砂礫土	大型始刃石斧	砂質片岩	6.9	3.8	2.8	84.2	先端部のみ残存
図65-13	4区Aブロック	黒褐色土	楔形石器	サヌカイト	4.3	2.4	0.7	8.3	
図65-14	5区Hブロック	茶褐色土	石核	黒曜石	5.8	2.4	2.1	22.8	
図65-15	T-8(二次調査)	灰茶褐色土	原石	サヌカイト	15.5	13.6	3.2	710.0	

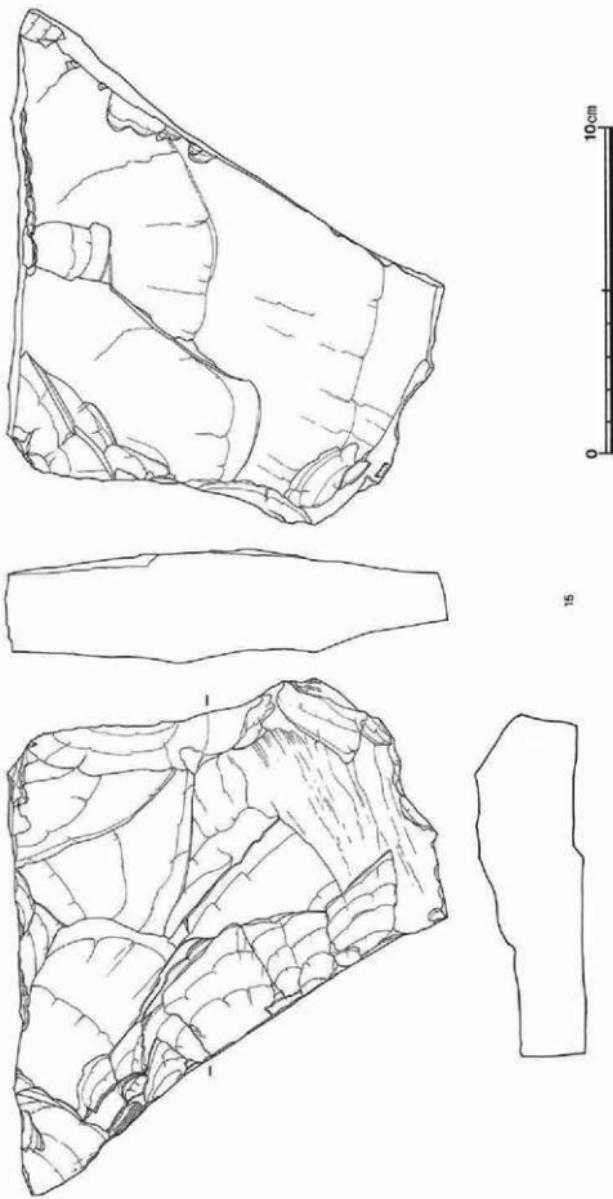


第64図 郡遺跡出土石器実測図（1）



第65図 郡遺跡出土石器実測図（2）

第66圖 鄭遺跡出土石器實測圖（3）



## 第4節 まとめ

郡遺跡は円面鏡を含む須恵器の出土する遺跡として周知されていたが、確認調査の段階では鏡が出土するに相応しい遺構の確認はできていなかった。しかし平成10年度、11年度の発掘調査によって期待に十分応える遺構を検出することができた。

郡遺跡は弥生時代中期～中世に至る複合遺跡である。中心となるのは弥生時代後期と奈良時代後半である。出土遺物は弥生時代中期から出土するが、遺構は弥生時代後期の土壙が出土している。弥生時代の遺構は調査区全体に広がるものではなく、4区～7区の所在する台地上部分である。台地上部分は後世の耕作面造成のために上面が削平されており、集落跡は発見できていない。今回の調査区域に在る可能性もあるが削平による消滅も否定できない。

今回の調査の注目すべき点は、奈良時代後半と思われる掘立柱建物群の検出である。全部で10棟検出された。その配置は建物1～5と建物6・7、建物8・9、建物10の4箇所に分散している。(第67図)建物7と建物9の距離は300m離れており、建物10と建物7は120m離れる。これらの建物群は全て、南北方向を意識して建てられており、その性格を考えると、一般の住居でないことは明らかである。出土遺物も瓦、円面鏡など特殊なものが出土している。織字層の存在が想定され、公的機関に関する遺跡であることが想定される。また、地名に「郡」という字が残っていることは重要な意味を持っていると思われ、郡遺跡は真島郡衙もしくはそれに類する遺跡の可能性が考えられる。

しかし、真島郡衙については、古くより真島郷の高屋にあるとされてきた。高屋遺跡は昭和56、57年に発掘調査を実施しており、奈良時代の掘立柱建物が7棟検出されている。その内4棟は純柱構造で倉庫と考えられている。出土遺物も奈良時代の後半代の須恵器が出土しているが、瓦・鏡等官衙遺跡特有の遺物は出土していない。

ところが、今回の郡遺跡の調査結果と比べてみると、高屋遺跡の建物群はその規模から判断しても、出土遺物から判断しても郡遺跡よりはるかに小規模である。このことから郡遺跡が真島郡衙である可能性は非常に高いと思われる。

また、掘立柱建物や瓦・鏡の出土する遺跡は古代寺院の場合もある。この場合は、仏具の出土や、礎石の出土に加えて、圧倒的に瓦の出土する量が官衙遺跡に比べて多い。このことからみると郡遺跡が古代寺院関係の遺跡とは考えがたい。

当地は「和名抄」によれば美作國真島郡鹿田郷である。真島郡は真庭郡の西側、旭川の右岸地域で、高田、井原、月田、美甘、栗原、大井、鹿田、垂水、真島の10郷からなる。鹿田郷は最も南に位置する。郡遺跡の位置を地図上から考えてみると、確かに真島郡の中にあっては最南端ではあるが、東西には備中川に沿って備中の国への幹線道が通っており、南北には近世になって大山道と呼ばれる備前の国から月田の谷を通って伯耆の国と結ぶ街道が通っていて、交通の要衝に位置する。

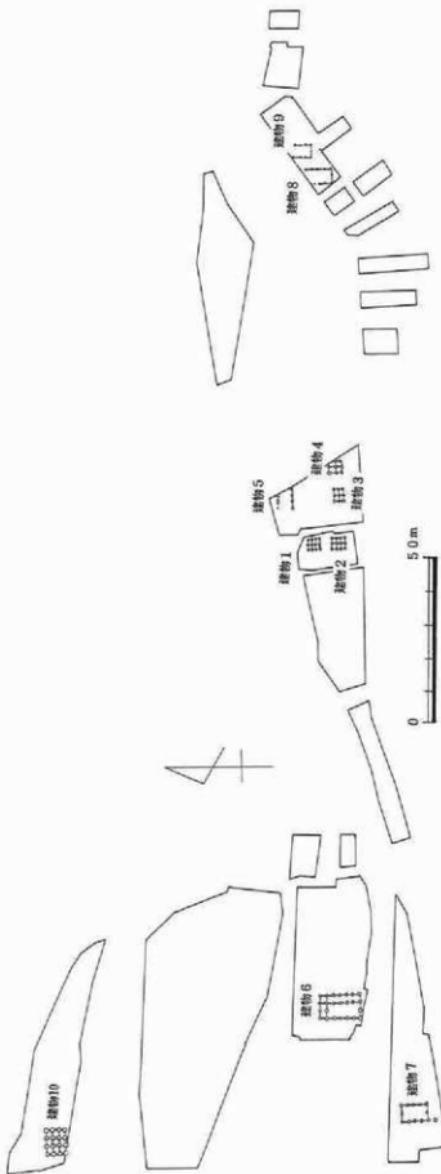
次に郡衙としての郡遺跡はいつ頃成立したのだろうか。遺構に伴う出土遺物が少ないため、決めがたいが、建物6の柱穴から出土した須恵器は8世紀後半代のものである。また均整唐草紋の軒平瓦は奈良時代中葉の時期と考えられ、素弁蓮華文の軒丸瓦は奈良時代後半代のもと推定される。よって、郡遺跡が郡衙として機能を開始する時期は、奈良時代の後半に求めることができる。そしてその存続の期間はいつまで求められるのだろうか。建物1～4の倉庫群が出土した3区の包含層には、平安時代の内黒と呼ばれる黒色土器等の遺物も含まれている。量は多くないが、古代末から中世にかけては

底部に糸きり痕のみられる須恵器碗や小皿が出土する。またもう少し時代が下るが備前焼の撞鉢も出土している。郡衙は少なくとも9世紀代までは機能していたのではないかと思われるが、明らかにはしえない。美作国府の調査例を見ると、国府として機能を終えた後も、生活の跡が認められ、12世紀初頭とされる勝間田焼の碗が多く出土している。郡遺跡からも同時期の須恵器が出土していることは、単なる偶然であろうか。他の類例を調べてないので、これ以上言及することはできない。今後の課題としたい。

#### 第4章参考文献

- (1)「今岡廃寺」『大原町埋蔵文化財発掘調査報告』2 大原町教育委員会 2002年
- (2)「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第50集 津山市教育委員会 1994年
- (3)岡田 博「官衙」「吉備の考古学的研究」(下) 山陽新聞社 1992年
- (4)渡 哲夫『美作の白鳳寺院』津山郷土博物館 1992年
- (5)伊藤 穂「窯業」「岡山県の考古学」吉川弘文館 昭和62年
- (6)「福田A遺跡・高麗B遺跡」『落合町埋蔵文化財発掘調査報告』落合町教育委員会 1983年
- (7)渡 哲夫『美作国府跡』津山郷土博物館 1995年
- (8)「三須河原遺跡・三須畠田遺跡・三須美濃田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16 総社市教育委員会 2003年
- (9)「荒神風呂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』76 岡山県教育委員会 1990年
- (10)出宮徳尚・伊東晃・岡本寛久・駒井正明「瓦当文」「吉備の考古学的研究」(下) 山陽新聞社 1922年

第67図 郡道跡官衙関係遺構配置図 ( $S = 1/1,500$ )



## 第5章 須の内遺跡（二次調査）

### 第1節 発掘調査の概要



第68図 須の内遺跡調査区域図 ( $S = 1/2,000$ )

二次調査は平成9年度に実施した確認調査の結果と、昭和49年に実施した中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を基に明らかになった遺跡の範囲内で、しかも削平される部分について発掘調査を実施した。耕作土の除去は重機により行い、遺構上面の包含層については手作業により廃土した。

発掘調査は1区から15区に分けて実施し、8区より調査を開始し、7区～1区～2区～3区～5区～4区～6区～11区～13区～14区～15区～10区～9区の順に行った。(第68図)

1区は調査区の南西に位置し、標高137.15mの水田である。検出された遺構の大部分は多数のビットである。発掘調査期間は平成13年8月2日から10月4日である。

2区は1区の東に位置し、標高136.52mの水田である。ここから検出された遺構も大部分は多数のビットである。発掘調査の期間は平成13年9月12日に開始し、11月8日に終了した。

3区は2区の更に東側に位置し、標高135.09m～135.25mの畑である。ここから検出された遺構も大部分はビットであるが、本遺跡で初めて隅丸方形の掘り方を持つ柱穴が検出された。発掘調査の期間は、平成13年10月29日から12月5日である。

4区、5区は南北に隣接する調査区で3区の東に位置し遺跡の所在する台地の先端部に位置する。標高は134.65～134.85mの畑である。検出された遺構はビットが大部分を占めるが、南半分の5区を中心とする部分には鍛冶関係の遺構が検出され、鉄滓が多く出土した。発掘調査の期間は平成13年11月22日から平成14年1月25日である。

6区は須の内集落への町道を挟んで、北側に位置する。西は中国縦貫道が通っており、昭和49年の発掘調査の際には中世の館跡と想定される大型建物が検出された調査地点の東側に位置する。調査前は標高137.89m～138.44mの水田であった。

検出された遺構はほとんどがビットであり、その他には中世の土壙墓がある。発掘調査の期間は平成13年12月21日から平成14年3月4日である。

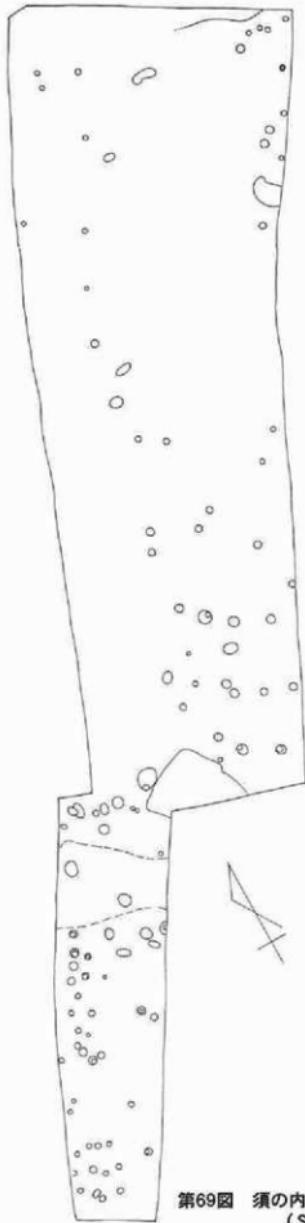
7区は6区の東側に位置し、標高136.13m～136.72mの水田である。検出された主な遺構はここともビットと土壙である。発掘調査の期間は平成13年7月3日から9月19日と平成14年1月24日から2月13日である。

8区は7区の東に位置し、標高136.0m～136.3mの水田である。検出した遺構はビットばかりであるが、南半分に集中して出土し、北半分は北端に僅かに出土しただけである。発掘調査の期間は平成13年6月12日から7月19日である。

9区は7区と8区の北側に位置する調査区で、標高は136.1mの畑である。7区からは遺構が検出されているにもかかわらず、ここからは遺構は検出されなかった。堆積土にもほとんど遺物は見られなかった。調査期間は平成14年3月26日から29日である。

10区は1～9区の調査区が所在する台地から北に谷を一つ挟んだ尾根の端に位置する。標高は138.84m～139.64mの水田である。10区の北部分は耕作地造成の時点では基盤層まで削平されており、遺構が検出されたのは東部分であった。遺構は僅かでビットと井戸である。発掘調査の期間は平成14年3月20日から3月28日である。

11区は10区の東に位置する。標高138.24mの水田であるが、この調査区も既に耕作地造成のため基盤層まで削平を受けており、遺構は検出されなかった。発掘調査期間は平成14年2月28日から3月8日である。



第69図 須の内1区平面図  
(S=1/300)

12区は本遺跡発掘中に既に埋土によることが判明し、調査の対象区域から外れた。

13区は11区の北東に位置し、標高137.92mの水田である。確認調査の際に、奈良時代と推定される須恵器が出土した水田の直ぐ西に位置するが、遺構は検出されなかった。発掘調査の期間は平成14年3月4日から18日である。

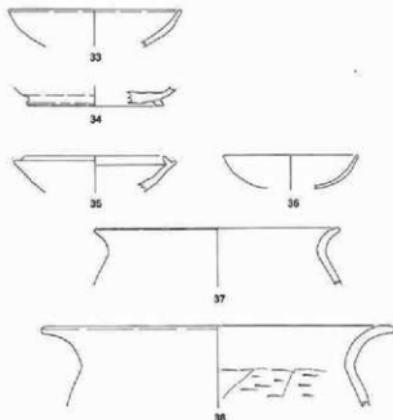
14区は13区の東に位置し、標高は136.7mの水田である。検出された遺構はピットと溝である。出土遺物も確認調査時のものと同時期の須恵器が出土した、発掘調査の期間は平成14年3月11日から22日である。

15区は14区の東に位置し標高134.57m～134.87mの14区より2m余り低い水田である。本遺跡の遺構検出面より低いため、この調査区からは遺構は検出されなかった。発掘調査の期間は平成14年3月14日から19日である。

## 第2節 遺構・遺物

### (1) 1区(第69図)

1区は調査区域の南西部に位置し、南北に細長い調査区である。遺構はほとんどが直径20～50cm程度のピットであるが、建物が建つように並んだものは見当たらない。出土の状況も北半分はまばらで、南半分は密であった。耕作土の下は灰茶色土が薄く堆積



第70図 1区出土遺物実測図 (S=1/4)

し、その下方は厚さ40cm余りの暗茶色土の包含層が堆積し、その下は基盤層の黄茶色土である。遺構は暗茶色土の下層から掘り込まれているが基盤層まで掘り進まないと、平面では検出できなかつた。

#### 出土遺物（第70図）

1区からの出土遺物は包含層が厚かったため、コンテナに17箱分出土している。その内の半分は包含層からの出土であるが、図示できていない。種類は須恵器、土師器が大部分を占め、その他には鉄滓や炉壁片も出土している。図示したのは遺構からの出土のものだけである。

33は須恵器の壺でP-11から出土した。曲線を描いて外方に立ち上がる大部を持つ。34も須恵器の壺であるが、外方に開いた高台が付く。P-3から出土した。高台の付く壺は包含層から多く出土している。35も須恵器の壺で、口径が11.4cmと小型化しており、7世紀初頭と思われる。38の甕とともにP-27から出土した。この時期の須恵器は少量であるが包含層からも出土している。36は土師器碗である。P-22から出土した。37は土師器甕である。33の壺と共にP-3から出土した。

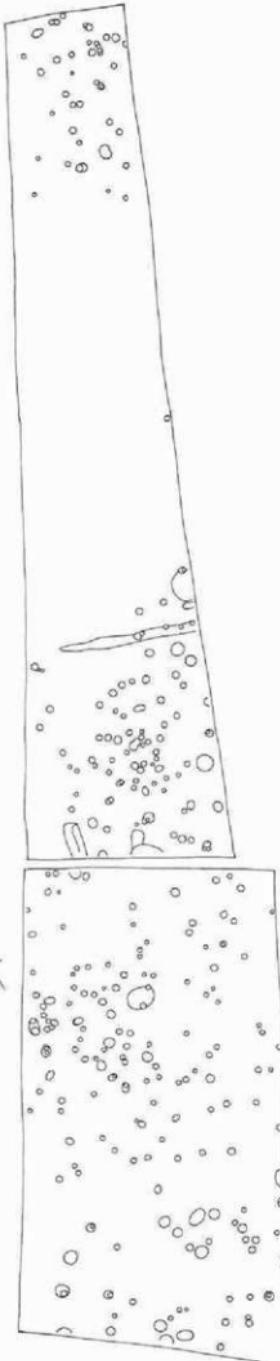
土器以外に包含層より滑石製の紡錘車が1点出土した。石器はまとめて後述する。（第96図）

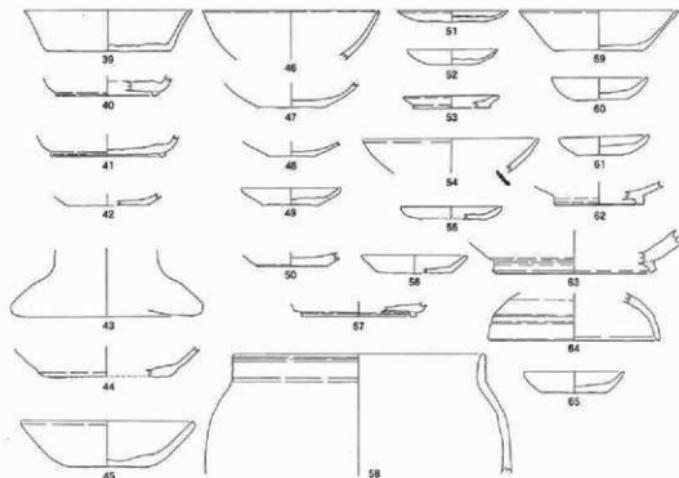
#### （2）2区（第71図）

2区から検出された遺構も直径20~50cm程度のピットが大半で、他には溝が1本と土壤状のやや大きいピットである。遺構は北側の1/4余りの部分にほとんど検出されない部分がある。この範囲には暗茶色土が厚く堆積しており、既に工事の指定標高より30cm低い高さまで掘り込んでおり、遺構検出面まで下げる必要が無いためである。他は比較的密な状態で検出されている。

2区の基盤層は黄色土で、その上には暗茶灰褐色土の包含層が堆積しているが、15~20cm余りと1区に比べて薄い。遺構は基盤層で検出された。遺構内には基盤層を掘り込んで暗茶色土が埋まっていた。

第71図 須の内2区遺構配置図 (S=1/300)



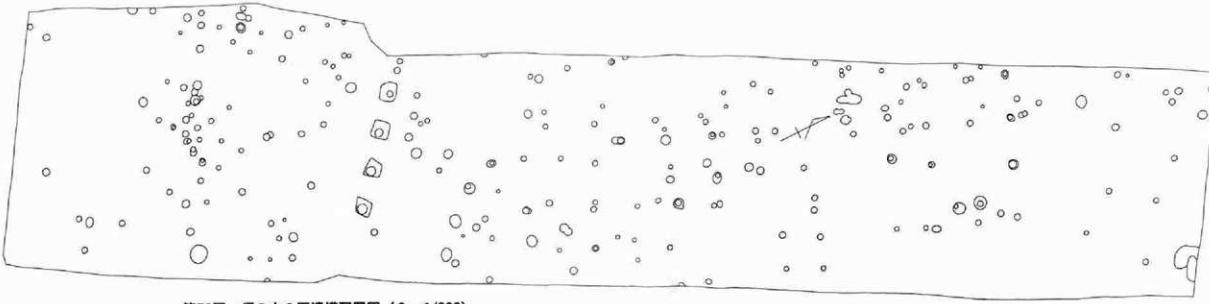


第72図 2区出土遺物実測図 (S=1/4)

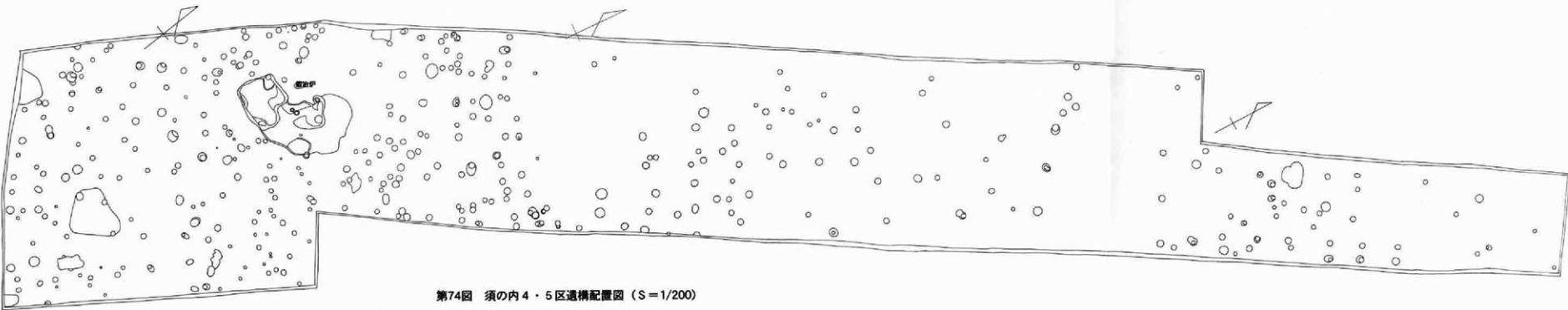
出土遺物 (第72図)

2区からの出土遺物はコンテナに9箱分である。1区に比べて包含層が薄かった分、出土遺物の量は1区より少ない。包含層からの出土遺物は須恵器、土師器、青磁、白磁、染付等である。須恵器の主な機種は高台の付く壺、扁平な碁石状のつまみを持つ壺蓋、高壺、壺、甕である。土師器は皿、碗、甕、鍋である。青磁や白磁、染付の量は僅かである。

39・40はP-5から出土したもので、須恵器壺である。どちらも底部は籠きり痕が残り、40には高台が付く。8世紀後半代と思われる。41も同時期の須恵器で、底部は籠きりの後、高台を付す。P-11より出土した。42は土師器皿で底部には糸きり痕が残る。P-18より出土した。43は土師器支脚である。P-24から出土した。44・45は須恵器壺である。どちらも体部は碗型に開く。8世紀後半代と思われる。44はP-48から、45はP-62から出土した。46~50はP-25から出土した。46・47は土師器碗である。底部は糸きり痕が残る。48は器壁の薄い白磁の碗である。底部は籠きり痕が残る。49・50は土師器小皿で底部には糸きり痕が残る。12世紀代と思われる。51~53は土師器の小皿である。51はP-27から出土した。52はP-32から、53はP-35からで何れも底部は籠きり痕が残る。54・55はP-36から出土しており、土師器の碗と小皿である。小皿の底部は籠きり痕が残る。56もP-41から出土した土師器小皿で底部は籠きり痕が見られる。57はP-89から出土した須恵器壺である。58は須恵器の壺で、P-64から出土した。口径は20.2で、垂直に立ち上がる短い頸部を持つ。内外面とも横なでを施している。59はP-53から出土した土師器碗である。60~63は土壙2から出土した。60・61は土師器の小皿で、底部は糸きり痕が残る。62は青磁である。底部しか残存しないが、内外面とも釉薬がかかっており、器種は高台の付く皿か鉢と思われる。63は須恵器で底部が一部しかないが、器壁の厚さから壺と思われる。64はP-106から出土した須恵器壺蓋である。口径13.8を測り、6世紀末頃と思われる。65はP-97から出土した土師器小皿で底部には糸きり痕が残

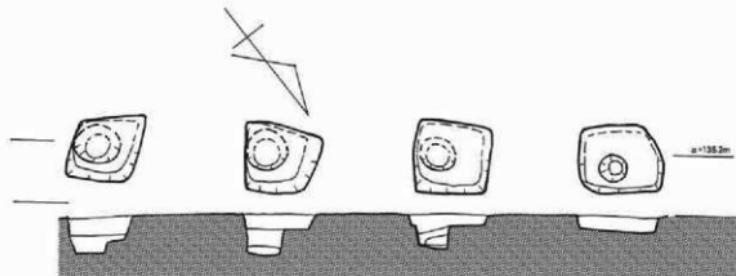


第73図 須の内3区遺構配置図 ( $S = 1/200$ )



第74図 須の内4・5区遺構配置図 ( $S = 1/200$ )

5区  
4区



第75図 3区柱穴列平・断面図 (S=1/60)

る。

図示した土器は大まかに3時期に分かれる。最も古いのは64の蓋で古墳時代後期のものである。その次は須恵器・土師器供に底部に笠きり痕を残す壺や小皿で、奈良時代後期、8世紀後半代と考える。その次は土壤2やP-36の出土土器の底部に糸きり痕を持つもので、12世紀代と考える。

### (3) 3区 (第73図)

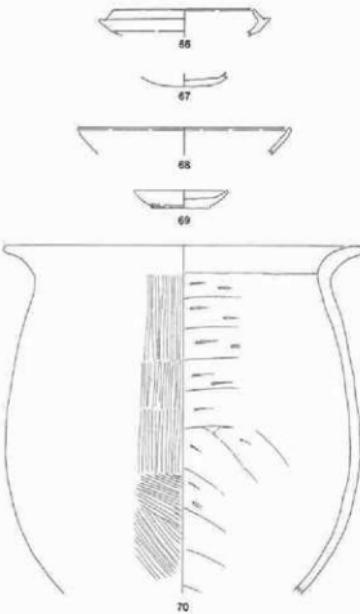
3区は2区の東に位置し、遺構はこの調査区からも20~50cm大のピットが調査区全体に広がって検出された。注目すべきは、方形の掘り方を持つ柱穴が検出されたことである。耕作土の下は床土層が薄く堆積し、その下に20~30cmの厚さに茶褐色土の包含層が堆積し、その下は黄色土の基盤層となる。遺構は基盤層から掘り込まれており、遺構内には黄茶色~暗黄茶色土が埋まっていた。

#### 柱穴列 (第75図)

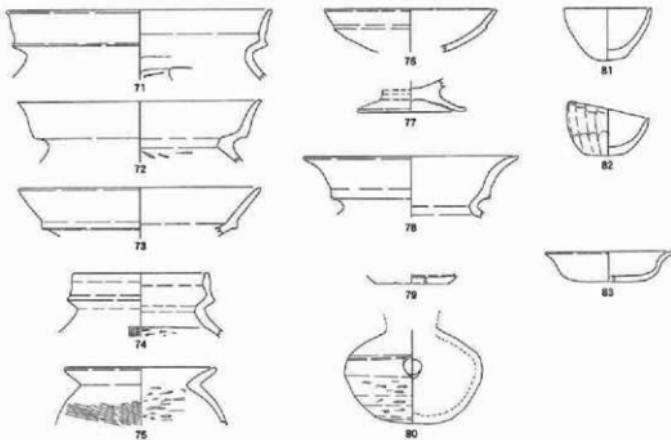
調査区の中央より少し南によった地点から方形の掘り方を持つ柱穴が1列で4基のみ検出された。掘り方は1辺が70~105cmの方形で柱間寸法は210~220cmを測る。深さは17~50cmと比較的浅く、上面は後世の削平を受けていると思われる。柱穴の埋土は、上層は黄茶色土、下層は暗茶黄色土である。柱の太さは、柱痕の残存状態から35cm程度と推定される。

#### 出土遺物 (第76図)

3区からの出土遺物はコンテナに7箱分出土した。須恵器と土師器を中心で、須恵器は壺、壺蓋、壺、甌、皿等の器種が見られる。壺は大部分が高台の付くもので、壺蓋はそれに対応するつまみが付いて扁平なものと、少量だが返りのつくものが見られる。甌は底部



第76図 3区出土遺物実測図 (S=1/4)



第77図 4区出土遺物実測図 ( $S = 1/4$ )

に糸きり痕が残るものである。

土師器は皿、甕、鍋の器種が見られる。その他は少量だが、青磁、白磁、備前焼、瓦質土器の碗、瓦である。

図示したのは遺構から出土したものだけである。66はP-5から出土した須恵器壺である。口径11.3cmである。67はP-14から出土した土師器皿である。68はP-20から出土した須恵器碗である。口径17.3cmである。69はP-21から出土した土師器の小皿である。底部には糸きり痕が見られる。70は土師器甕で、P-30から出土した。外面は刷毛目、内面は箒削りにより調整されている。

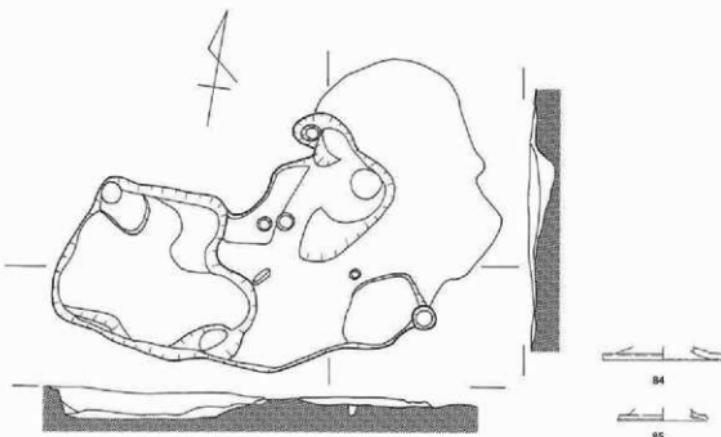
#### (4) 4区(第74図)

4区は5区と南北に隣接する調査区で北側を4区、南側を5区とした。検出した遺構は大部分が直径20~50cm程度のピットで、多少ばらつきはあるものの調査区全体から出土している。多数出土してはいるものの、建物が建つような配置ではない。

#### 出土遺物(第77図)

4区からの出土遺物はコンテナに10箱分出土している。須恵器、土師器が主な出土遺物であるが、須恵器は壺、甕、甌、平盤等の器種が見られる。土師器は古墳時代初頭と思われる甌、甕、高壺などと、時期が下って古代末~中世にかけての碗、皿、甌等の器種が見られる。碗は内黒といわれる黒色土器も見られる。皿は底部に糸きり痕が残るものがある。これ以外には備前焼、青磁、白磁の欠片が出土している。また隣接する5区から鍛冶炉が検出されているため、鉄滓、炉壁片や羽口片が出土した。図示したのは遺構からの出土のものである。

71~78、81、82は4区の南東端の掘り込みから出土した。71~78は土師器と思われる土器で、71~75は甌と甕である。72と73の外面には赤色顔料の付着痕が見られた。76は高壺である。78は鼓形器台で、表面には赤色顔料の付着痕が見られた。81、82は手づくね土器で、小型の碗状を呈す。82には指押さえの痕跡が明瞭に残っている。掘り込み内から出土した土器の時期は二重口縁の甌・



第78図 錫治炉平・断面図 ( $S = 1/80$ )

第79図 錫治炉出土遺物実測図 ( $S = 1/4$ )

裏に弥生土器の様相を残すものの75の表のように一重口縁のものが見られることなどから、古墳時代初頭の時期と思われる。

79はP-11から出土した白磁である。80はP-7から出土した須恵器壺である。83はP-29から出土した須恵器杯である。直径10.3cmの小型で底部には荒い籠きり痕が残り、体部は大きく湾曲して外方に開くタイプである。余り類例を見ない。

#### (5) 5区 (第74図)

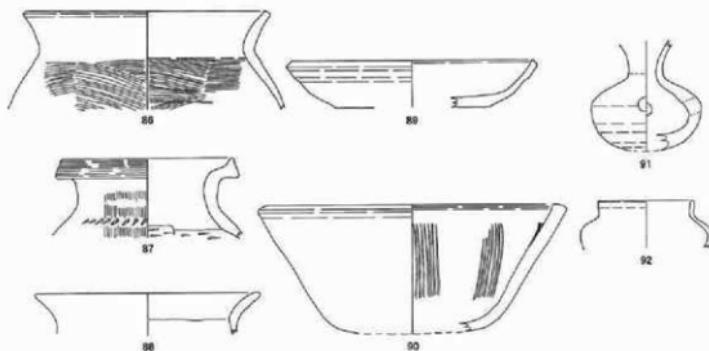
5区は4区の南に隣接しており、調査区全体に造構が密集して検出された。大多数の造構はここでも20~50cm大のビットであるが、その他には錫治炉と思われる造構が検出された。

#### 錫治炉 (第78図)

4区と5区の境界付近から検出された。表土層を除去した段階から鉄滓と焼土、炉壁片、炭を含む暗茶灰色土が東西7m、南北5m余りの範囲に広がっていた。炉本体は既に上面の削平を受けており、検出されたのは下部構造と思われる部分である。平面図の西側の長方形状に掘り込まれた部分には、上層に暗茶灰色土、下層に暗灰茶色土が堆積し、中には鉄滓と焼土が大量に入っていた。堆積していた暗灰茶色土も炭が大量に混じる黒ばこのような土であった。この土壌状の掘り込みは基盤層の黄色土を掘り込んでおり、深さは40cm程度で、底は比較的平坦であった。掘り込みの東斜面は基盤層が焼けている。造構の中央部分は10cm程度埋められており、暗茶灰色土が堆積するが、底部に焼けた跡は見られない。造構の東部分は2m×4mの範囲に基盤層が焼けており、赤色~赤橙色を呈していた。

錫治炉からの出土遺物は須恵器が10点と土師器が50点余り出土した。須恵器は壺、高壺である。土師器は甕、支脚などである。何れも小片のため図示できたのは2点である。第79図84、85である。2点とも須恵器の高壺の脚部である。

図示できなかった出土遺物も含めてこの錫治炉の時期は7世紀末~8世紀前半と考える。



第80図 5区出土遺物実測図 ( $S=1/4$ )

#### 出土遺物（第80図）

5区からの出土遺物は全部でコンテナに38箱分出土したが、その内35箱は鉄滓で土器は僅か3箱である。出土した土器は、弥生土器が少しと須恵器、土師器を中心であるが、備前焼、瓦質土器、陶器などの新しい時期の焼き物もある。図示したのは遺構内から出土したものである。

87はP-41から出土した弥生土器の壺である。口縁端部は少し上方に拡張しており、弥生時代後期初頭の時期と思われる。86、88は土師器の甕である。どちらも同じような口縁部であるが86の体部には内外面ともに、刷毛目調整が施されている。P-24から出土したものである。88の体部内面は笠削りである。P-43から出土した。89は陶器のおろし皿である。胎土の色は淡灰色で緑灰色の軸薙が塗られているが、産地・時期はわからない。内面底部には格子状のおろし目が刻まれている。90は瓦質土器の擂鉢である。櫛描条線は7条が1単位で約3.5cm間隔に刻まれている。図示できないが同じピットから備前焼の擂鉢が出土している。すり目の単位はほぼ同じで7条が1単位である。口縁は単純でまだ肥厚してなく、すり目の様子から、時期は13世紀後半から14世紀前半位と思われる。91、92は土器罐よりから出土した須恵器である。91は甕で、92は小型の短頸甕である。6世紀後半のものと思われる。

#### (6) 6区（第81図）

6区は今回の調査の中では最も広い調査区で、標高も137.89m～138.44mと高い位置にある。現状は4枚の水田に分かれており、表土層の堆積状況は西が薄く、東が厚い状況であるが、全体に表土層は薄かった。また、この調査区は丘陵の頂部にあたるため既に基盤層の削平を受けている部分もあり、遺構の検出状況は密の部分と全く無い部分とに分かれた。

検出された遺構はほとんどが20～50cm程度のピットと数基の土壙である。ピットは多数出土したものかわらず、建物が建つような配置のものは見当たらなかった。

#### 石組土壙（第82図）

調査区の東側中央部分から検出された。平面は隅丸長方形形状を呈し、南北200cm、東西114cmを測



第81図 須の内 6区遺構配置図 ( $S=1/200$ )

る。土壤の中心部には25~35cm大の石が5個長軸に沿って並び、北端の石の下からは土師器小皿がcm枚出土した。石は5個がほぼ同じレベルに揃えて並べられており、小皿3枚も石を並べる前に、土壤内に置かれたものと思われる。土壤の底部は平坦で深さは25cm余りであるが、南端は直径50cm、深さ30cmの堀込みがみられた。土壤内の埋土は上層は暗茶灰色土で、下層は灰茶色砂礫土であった。この石組土壤は墓と思われる。

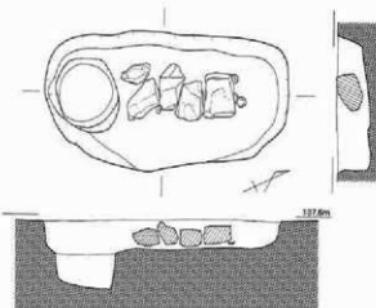
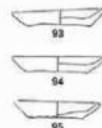
石組土壤から出土した遺物は土師器の小皿3枚である。口径は7~7.5cmで、底部外面には範きり痕が見られる。

#### 出土遺物（第84図）

6区からの出土遺物はコンテナに11箱分出土した。表土層が浅いため、調査区の広さに比べると出土遺物の量は少ない。出土遺物の種類は、須恵器、土師器が大部分を占め、その他には青磁、白磁、染付、瓦、鉄滓、羽口片、弥生土器が挙げられる。須恵器の器種は壺、壺蓋、壺、甕、等がある。土師器は鉢、皿、甕等である。

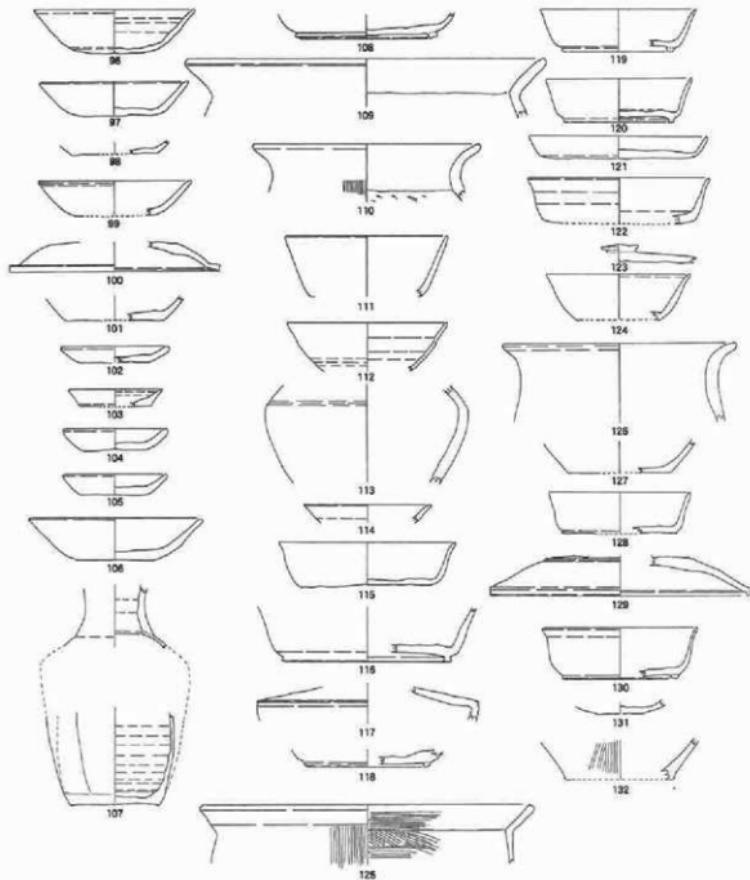
第83図

石組土拵出土遺物  
(S=1/4)



第82図石組土拵平・断面図  
(S=1/40)

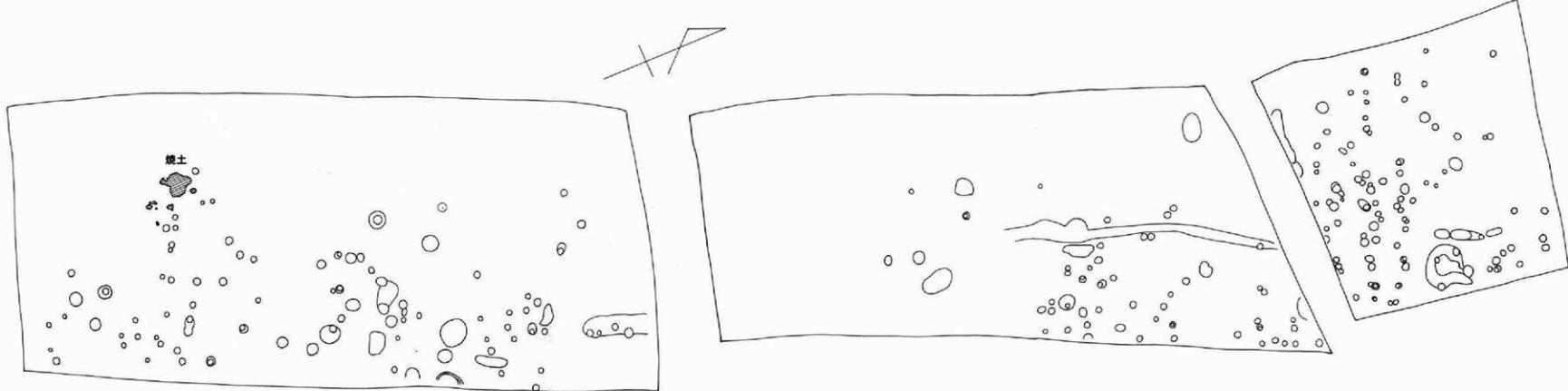
96はP-6から出土した須恵器壺である。底部は笠おこしで、体部は腕型に外方に大きく開く。97、98はP-4から出土した土師器碗である。2点とも表面が磨耗のためわかりづらいが底部は笠おこしと思われる。99も土師器碗で、P-9から出土した。100は須恵器の壺蓋で、P-10から出土した。101は須恵器壺で、P-12から出土した。102、103は土師器皿で、P-13から出土した。底部は磨耗しているが笠おこしと思われる。104~107はP-16から出土した。107以外は土師器で、3点とも底部は糸きり痕が見られる。107は白磁の長頸壺で、胴部は八稜の花びら形を呈する。頸部及び胴部の一部しか残存しないが、大変優美な姿をしている。中国からの輸入品である。108~110はP-26から出土した。108は須恵器壺で、底部は笠おこしの後、高台を付けている。109、110は土師器甕で、外面は刷毛目、内面は笠削りが見られる。111はP-29から出土した須恵器壺で、底部は一部しか残存しないが、笠削りが見られる。112はP-32から出土した須恵器碗である。体部は水引技法による成形痕が残るが、底部は不明。113はP-37から出土した須恵器壺である。114はP-39から出土した白磁である。口径10.2cmで小さく、器形は不明である。115~117はP-46から出土した須恵器である。115、116は壺で底部は笠きりの後なでを施している。117は壺である。118はP-47から出土した須恵器壺である。116同様に底部は笠きりの後なでを施し、高台を付けている。119~122はP-48から出土した須恵器である。4点とも笠きりの後なでを施しており、高台はその後に付している。123はP-52から出土した須恵器壺蓋である。扁平な基石状のつまみを持つ。124は掘り込み2と呼ぶ不整形ピットから出土した白磁碗である。114と同様に、口縁端部には釉薬がかかってなく、同一の生産地と思われる。125は土師器鍋で、P-60から出土した。体部外面にはススが付着している。126はP-75から出土した土師器甕である。127はP-88から出土した土師器壺と思われる。



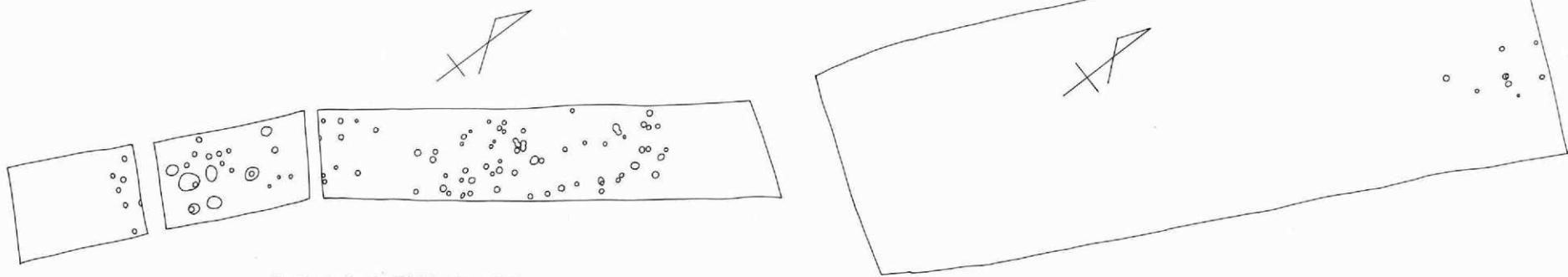
第84図 6区出土遺物実測図 (S = 1/4)

128はP-101から出土した須恵器坏である。129、130はP-113から出土した須恵器である。129は坏蓋で、130は坏である。坏の底部は篦きりを施している。131は土高から出土した須恵器碗である。底部には糸引き痕が見られる。132はP-55から出土した弥生土器である。壺または甌の底部である。

6区からの出土土器の時期は大まかに4時期に分かれる。最も古いものは弥生時代後期である。次は113、117に代表される6世紀末～7世紀初めの時期である。次は、最も出土数が多い時期で、坏は高台が付くものと付かないものがあるが底部篦きり痕が残る。坏蓋は160、123、129の碁石状のつまみを持つタイプで、8世紀から9世紀と考える。残りは底部に糸引き痕の見られる須恵器碗の出



第85図 須の内7区 遺構配置図 ( $S = 1/200$ )



第86図 須の内8区 遺構配置図 ( $S = 1/200$ )

土する時期で、12世紀と考える。

また土器以外にサヌカイトの石鎌が包含層より1点出土している。(第96図)

#### (7) 7区(第85図)

7区は6区の東に位置する調査区で、検出された遺構はここも、20~50cmのピットと土壤、溝である。調査区の南半分は台地の頂部にあたるため、耕作土の下は、小礫岩を多く含む土で、中に含まれる土器はかなり小さい破片であった。また、中央部分は暗茶色土が厚く堆積し、遺構は検出できなかった。

図示したのは調査区の南西端から検出された、焼土遺構である。

#### 焼土遺構(第87図・第88図)

耕作土の下の黄茶色土を除去した段階で、1.5m四方の範囲にわたって、赤色~赤橙色に焼けた個所が検出された。焦土の直ぐ南には、土師器壺がほぼ1個体分、押しつぶされた状態で出土した。焼土は10~30cmの小さい塊で周辺にも見られ、元は3m以上の範囲に焼けていたものと推定される。この焼土周辺からは土器が何点か出土したが、鉄滓や炉壁と思われるものは出土してなく、鍛冶に関係したものとは考えがたい。土器はコンテナに2箱分出土しており、図示したものだけでも12点あるが、焼土の正確についてはわからない。

焼土遺構周辺からの出土遺物は第83図133~144である。133は須恵器の短頸壺である。134は須恵器壺である。135~139は須恵器高坏である。残存するものは丸い坏部に短い脚が付く。139は脚部に2条の沈線が施されている。140~143は土師器壺である。4個体とも口縁部は丸く外方に反り返っており、体部外面は継方向の刷毛目、内面は笠削りにより器壁が整えられている。口径は20.6~25.2cmで大きさも比較的類似している。144は厚手の土師質の焼き物である。体部はボウル状を呈し上下は切れており底はない。器形はわからないので、上下ははっきりしない。内面の中心部は横方向の笠削り、上下端は指押さえの後、外面に向けて横なでを施している。

以上のことから、これらの土器の時期はその特徴から7世紀後半代と考える。

#### 出土遺物(第89図)

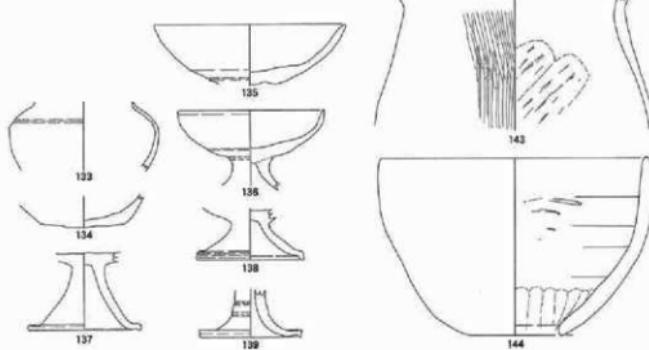
7区からの出土遺物はコンテナに19箱分である。出土土器の大部分は須恵器、土師器で、その他には少量だが青磁、白磁、備前焼、瓦質土器、綠釉陶器、天目茶碗等が見られる。土器以外には石鎌、石鎌、硯が出土している。須恵器の器種は壺、高坏、壺、甕が見られる。土師器は碗、皿、甕、鍋等が出土している。図示したのは遺構から出土したもののみである。

145、146はP-1から出土した。145は土師器皿で、146は須恵器高坏である。147はP-12から出土した須恵器坏である。148も須恵器坏で、P-14から出土した。149はP-22から出土した青磁の壺である。150はP-24から出土した須恵器坏である。151、167はP-38から出土した。151は土師器碗で底部には糸引き痕が認められる。167は土師器の土鍾である。152はP-8から出土した土師器甕である。153、154はP-15から出土した。153は土師器、154は須恵器坏である。

155~2164は土壤2から出土した。155は須恵器甕である。体部内面は笠削り、外側は格子目の叩きが施されている。156は石鎌である。滑石製と思われるもので、口径25.8cmを測る。157、158は須恵器坏である。底部は笠おこしである。159~163は土師器皿である。どれも底部は糸引き痕が残り、口径は6.9~8.3cmを測る。164は青磁壺である。口縁端部の屈曲が149とは異なるが、釉薬の色は類似しており、同一の産地と推測される。

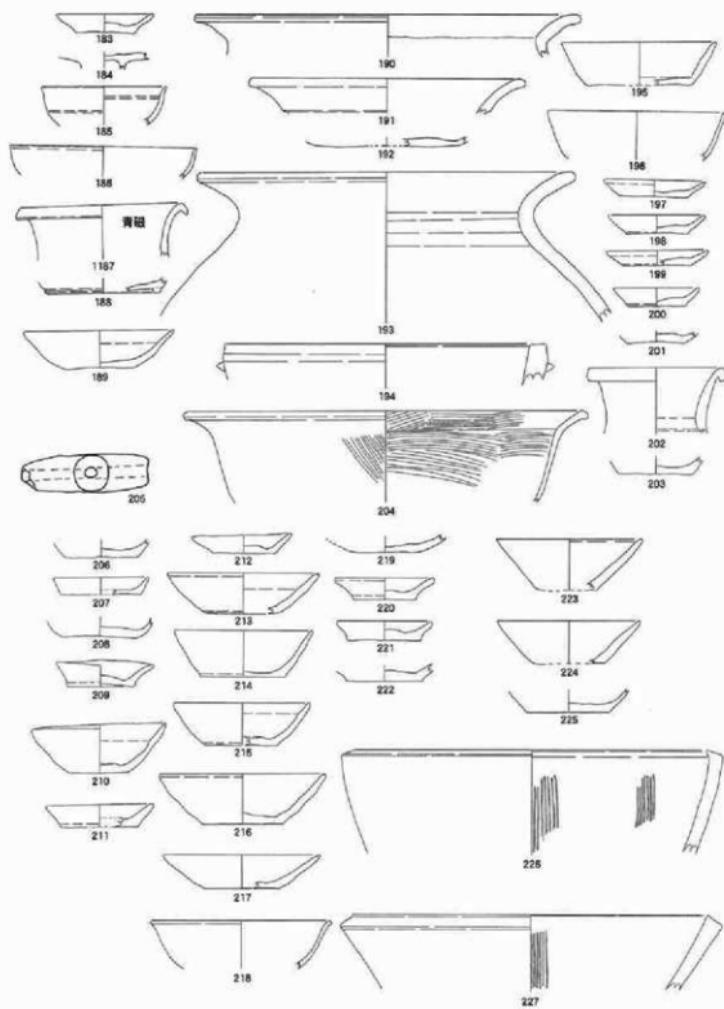


第87図 7区焼土平・断面図 (S = 1/30)



第88図 焼土及び周辺出土遺物実測図 (S = 1/4)

165は溝から出土した土師器皿で、底部には糸引き痕が見られる。166は土師器鍋で石組土壙から出土した。内外面ともに刷毛目が施され、スヌの付着個所が見られる。168、169はP-40から出土した土師器皿である。168は底部糸引きであるが、169は板目痕が見られる。170はP-41から出土した土師器皿で、底部は糸引きである。171172はP-48から出土した土師器の皿と碗である。どちらも磨耗が著しく、調整は不明である。173はP-51から出土した土師器皿である。調整は不明。



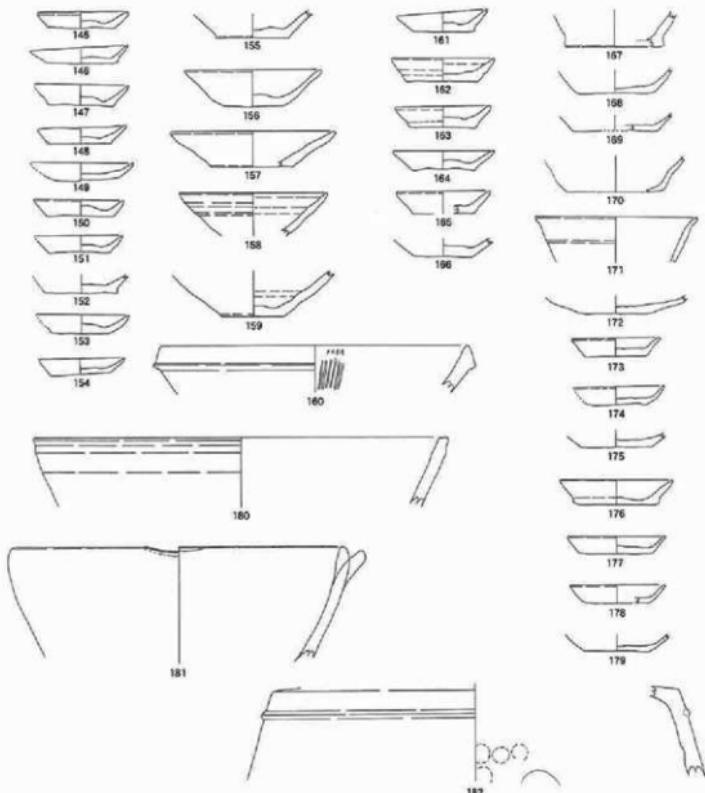
第89図 7区出土遺物実測図(1) (S=1/30) (S=1/2・1/4)

174～178はP-49から出土した土師器皿と碗である。5点とも磨耗が著しく、調整は不明である。碗の口径は10.9～13.4cmを測る。

179も土師器碗であるが、P-52から出土した。これも調整は不明である。180はP-43から出土した青磁の碗である。

181～189は溝から出土した。181の須恵器以外は土師器の皿と碗で181と187には底部に糸引き痕が見られる。188、189は須恵質の擂鉢である。二つとも7条1単位の櫛描条線が見られる。口縁端部はまだ脛厚していない。

190～205は調査区の北部分の掘り込み1から出土した。全て土師器の皿と碗である。皿の口径は7.0～8.3cmを測り、底部には笠きりのもの(194)と糸きりのもの(196)が見られる。碗の口径は10.9～13.3cmを測り、外方に大きく開く体部を持つ。底部は糸きり痕の見られるものがある。(201)205は僧前帳の捕鉤で6条1単位の櫛状条痕が刻まれている。口縁端部は上下に少し拡張し始めている。



第90図 7区出土遺物実測図(2)(S=1/4)

る。

206～211は掘り込み2から出土した土師器皿である。口径は7.4～8.3cmを測る。何れも磨耗のため調整は不明。

212はP-68から出土した土師器碗である。弥生土器に似た形をしているが、底部は糸引き痕が残り、図示できていないが備前焼擂鉢が共伴している。

213～215はP-74から出土した土師器皿と碗である。213には底部に板目痕が残るが、215には糸引き痕が残る。

216はP-75から出土した縁軸陶器である。器形は碗と思われる。217はP-78から出土した須恵器碗である。体部は外方に大きく開き、底部は糸引き痕が残る。

218～220はP-83から出土した土師器皿である。3点とも底部は糸引きで口径は7.1～7.3cmを測る。221、222も土師器皿であるが底部は笠引き痕が残る。221はP-84から、222はP-88からの出土である。

223、224、227はP-91から出土した土師器皿と瓦質土器の火鉢である。土師器皿の底部には糸引き痕が残る。225はP-81から出土した須恵器の鉢である。御目が見られないのでこね鉢と考える。226はP-82から出土した須恵器の片口である。

7区から出土した土器の内、土師器皿、碗の底部に笠引き痕と糸引き痕の相違はあるものの共伴する土器からそれは時期差では無いように思われる。擂鉢については188、189の須恵器のものと205の備前焼とがあり、多少時期差が見られるが、7区からの出土時の時期は概ね13～14世紀ごろと思われる。

#### (8) 8区(第86図)

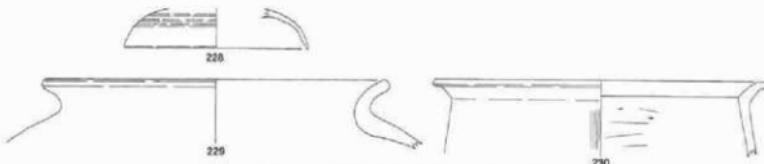
8区は7区の東に位置し、南北に細長い調査区である。北半分は砂礫層が厚く堆積しており、出土遺物も少なく遺構も10～30cm大のピットが僅かに検出されたのみである。南半は耕作土の下に礫を多く含む茶灰色土が20cm程度に薄く堆積し、その下は基盤層となっている。検出した遺構は、ここも20～50cm大のピットを中心である。

##### 出土遺物(第91図)

8区からの出土遺物はコンテナに5箱分である。須恵器、土師器、瓦質土器、灰釉陶器、青磁、白磁、備前焼などがある。須恵器は壺、壺蓋、甕等の器種が見られ、土師器は皿、碗、支脚等の器種が見られる。土器以外に表土層よりサヌカイトの石鱗が出土している。(第96図)

図示した3点はピット内から出土したものである。

228はP-1から出土した須恵器の壺蓋である。口径15.0cmを測り、6世紀後半代と見られる。229はP-2から出土した瓦質土器の甕で、体部外面には3mm大の格子目の叩きが施されている。内



第91図 8区出土遺物実測図 (S=1/4)

面には同心円状の叩きが見られ、亀山焼と判断され、亀山遺跡の出土遺物から、第3段階のものと思われる。報告書では13世紀後半から14世紀初頭とされている。230はP-11から出土した土師器甕である。外面には刷毛目、内面には範削りが見られる。

#### (9) 10区（第92図）

10～15区は1～9区の位置する台地から幅約20mの谷を隔てた北側の丘陵上に位置し、10区は最も標高の高い位置に所在する。そのため調査区の南西部分は既に耕作面造成時に基盤層にまで及ぶ削平を受けており、遺構が検出されたのは、北西部のみであった。検出された遺構はピットがいくつかと掘り込みである。掘り込みは調査区の北端に位置するため全体を検出することはできなかったが、埋土は灰色砂質土と暗灰色粘質土が交互に埋まっており、井戸の可能性もある。

#### 出土遺物（第93図）

10区からの出土遺物は僅かにコンテナ1箱分である。大部分は須恵器で、僅かに備前焼、青磁、白磁、染付などが出土している。図示した土器は井戸状の掘り込みから出土したものである。

231、232は須恵器壺である。233はやや高めの高台が付く土師器で、碗と思われる。234は須恵器甕で、外面は縦方向の並行叩きが見られ、内面は同心円叩きの後、擦り消している。口縁端部の形状は勝間田焼の戸岩窯出土のものや、須恵器の油杉式の壺に類似しており、11世紀末から12世紀前半と考える。

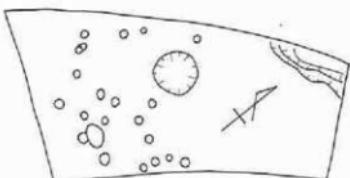
#### (10) 11区、13区

11区、13区からは遺構は検出されなかったが、表土層より土器が出土している。11区、13区から出土した土器はどちらもコンテナに1箱分しかなく、大部分は須恵器である。その他は備前焼、青磁、白磁、染付、瓦質土器が見られる。

#### (11) 14区（第94図）

14区からは20～50cm大のピットと溝、掘り込みが検出された。溝は調査区の南に8m×13mの長方形の2辺を描くように検出された。溝の幅は30～50cm、断面はU字状に掘り込まれている。コーナー部が最も深く、30.5cmを測り、端の最も浅いところは深さは13.4を測る。

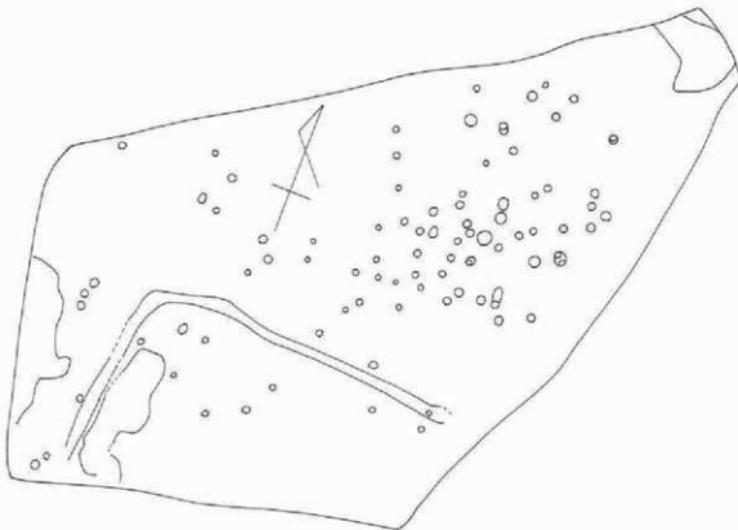
溝の周辺には多数のピットが検出されたが、建物が建つような配置のものは見当たらなかった。溝の短辺を挟んで東西に不整形なプランの掘り込みが検出された。暗茶褐色土が10～20cmの深さに埋まっており、自然の堆積に近い状態であったが中からは土器が多く出土した。



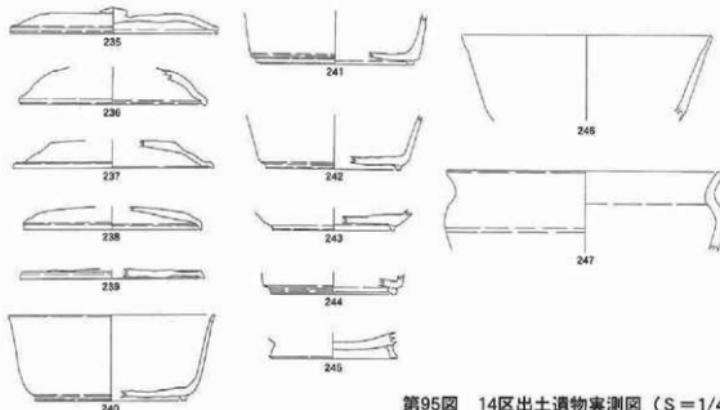
第92図 須の内10区遺構配置図 (S = 1/200)



第93図 10区出土遺物実測図 (S = 1/4)



第94図 須の内14区造構配置図 ( $S = 1/200$ )



第95図 14区出土遺物実測図 ( $S = 1/4$ )

#### 出土遺物（第95図）

14区から出土した遺物はコンテナに1箱分である。大部分は須恵器で僅かに土師器、備前焼、青磁、白磁などが見られた。溝と掘り込みから須恵器が出土したが、溝のものは小片のため図示できなかつた。図示したのは掘り込みから出土したものである。

235～339は壺蓋である。口径は14.3～16.6cmで、器高が扁平なもの（239）と膨らみを持つもの（236）がある。240～244は壺で、断面長方形の高台が付く。体部は少し開きながら直線的に立ち上

がる。245はやや器壁が厚く、高台もハの字に開き、器種は壺と思われる。246は口径20.3cmとやや大きいが、壺と思われる。247は短頸壺である。

これらの土器は奈良時代後半の時期と思われる。

#### (12) 須ノ内遺跡出土の石器および石製品について

須ノ内遺跡からは合計13点の石器と石製品が出土している。石器の種類は、石鏃、楔形石器、剥片で、石製品は紡錘車と硯が出土している。以下、各石器・石製品について報告する。

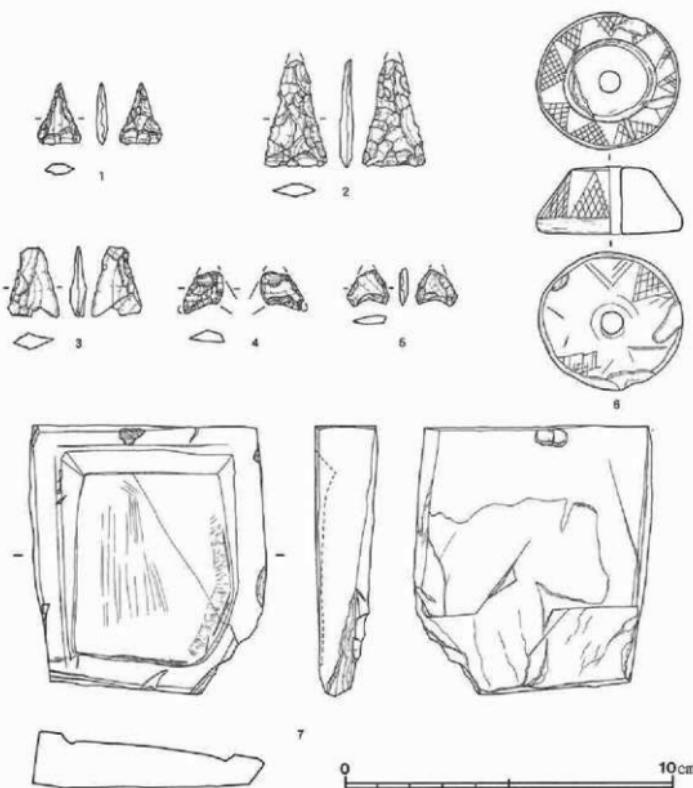
1から5までは石鏃で、基部の形態から1・2の平基式と4・5の凹基式に分類できる（註1）。

1は先端部をやや尖り気味に調整加工している。

2は先端を欠損しているが、二等辺三角形を呈した大型の石鏃である。

4は黒曜石製で先端部および基部が欠損している。

5も先端部を欠損しており、周辺部のみを調整加工している。



第96図 須ノ内遺跡出土石器実測図

なお、3は一側辺のみに加工痕が観察され未製品と考えられる。

この他に石製品として6の紡錘車、7の硯が出土している。

6は断面形態が台形状を呈し、側面と底面には格子文入りの網目文が線刻されている。

7は素材の形状に合わせて、硯面の形状を決めたためにやや歪な硯面となっている。断面も墨堂部の厚さがやや薄くなっている。

石鎌の時期は、他の出土土器などから弥生時代と推定されるが、4などの丁寧に加工された黒曜石製の石鎌などは、縄文時代に属する可能性がある。また、石製の紡錘車は、形態、文様などから豊島の分類では第Ⅱ期に属することから（註2）古墳時代後期以降と考えられる。なお、硯に関しては、時期は不明である。

註)

(1) 石鎌の分類は、松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地城性 - とくに打製石鎌について - 」『考古学研究』第35巻第4号1989年に従った。

(2) 紡錘車の形態分類や時期に関しては、豊島當絵「古墳時代における石製紡錘車の性格 - 中国・近畿地方出土例を中心に - 」『古代吉備』第23集2001年に従った。

表2 須ノ内遺跡出土石器石製品観察表

番号	地区	遺跡・層序	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
図96-1	6区4B		石鎌	サヌカイト	1.9	1.3	0.3	0.6	
図96-2	7区1B		石鎌	サヌカイト	3.3	1.9	0.9	1.7	先端欠損
図96-3	7区2B		石鎌	サヌカイト	2.1	1.5	0.5	1.1	未製品
図96-4	7区5B	P-8	石鎌	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.5	欠損
図96-5	8区4B		石鎌	サヌカイト	1.0	1.2	0.2	0.3	先端部欠損
図96-6	1区2B	暗茶色土層	紡錘車	滑石	直径4.4 穿孔径0.6	2.1	57.2		
図96-7	7区	暗茶色土層	硯	泥質片岩(墨色片岩)	8.2	7.0	1.7	147.8	

### 第3節 まとめ

須の内遺跡は昭和49年の調査では縄文時代後期、晚期の土器を初め、弥生時代中期末～古墳時代にかけての住居跡と古墳時代後期の鍛冶炉、中世の掘立柱建物、火葬墓などが出土した。その時の発掘調査は中国縦貫自動車道建設に伴うものであったため、東西に長い調査区で北から上寺地区、横部地区、太平寺地区と3地区に分かれていた。今回の発掘調査は当時の上寺地区の東部分である。

上寺地区から検出された遺構は古墳時代前期の堅穴住居址、後期の鍛冶炉、鎌倉～室町時代の掘立柱建物群などであった。今回の発掘調査はそれらの成果を踏まえ、中世の時期を中心とする遺構の出土を予想していた。その結果、検出できた遺構はほとんどの調査区とも20～50cm程度のピットが中心で、他には土壤、溝などであったが、3区から出土した4基の隅丸方形柱穴や5区から出土した鍛冶炉、7区から出土した焼土遺構は昭和49年の調査と関連があると思われる。

出土遺物から見てみると、数量は僅かだが、弥生時代中期末から後期にかけての土器が出土したが、それに伴う時期の遺構は検出できなかった。古墳時代の遺物は、前期の土師器、後期の須恵器、土師器が検出されている。この時期の遺構は5区の鍛冶炉と7区の焼土遺構である。出土遺物の時期から5区の鍛冶炉は7世紀末～8世紀初頭に、7区の焼土遺構は7世紀の後半と考える。昭和49年の調査時にも7世紀初頭の須恵器を伴う鍛冶炉が2基出土しており、7世紀～8世紀初頭には、鍛冶が盛んに行われていたことが窺える。奈良時代の遺物は8世紀後半の須恵器、土師器で主に6区、14区で出土している。この時期の遺構はピットがほとんどであるが、遺物の量はこの時期のものが多い。次の時代の遺物は12世紀～14世紀のものである。この時期の遺構は6区の石組土壙や7区の土壙やピットである。土器は從来からの須恵器、土師器に加えて輸入陶磁器や新しく生産された瓦質土器や備前焼などバラエティーに富む。須恵器は底部に籠きり痕を残す碗形の坏や小皿と大型の甕、擂鉢などがある。土師器は須恵器同様に、碗と小皿が多く、甕、鍋も出土する。須恵器、土師器は日常生活の必需品であるが、日常雑器以外には輸入品の陶磁器が出土している。量は多くはないが、青磁、白磁、染付片が見られる。また瓦質土器の中には鍋以外に火鉢が見られる。中世を代表する遺跡の草戸千軒町遺跡では火鉢は寺院や富裕層の屋敷から出土しており、これらの出土遺物は一般市民の日常生活には使用しない物が含まれていることが窺える。今回の発掘調査ではそれを裏づけるような遺構は検出されなかったが、昭和49年の調査時に検出された掘立柱建物4棟はこの時期の遺構で、支配者層の館と報告されており、今回出土の輸入陶磁器製品や火鉢の存在と関連づけて考えられる。

#### 第5章参考文献

- (1)「須内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11 岡山県教育委員会 1976年
- (2)伊藤 晃「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館 昭和62年
- (3)山本悦世「寒風古窯址群」『吉備考古ライブラリー』7 吉備人出版 2002年
- (4)岩本正二「草戸千軒」『吉備考古ライブラリー』6 吉備人出版 2000年
- (5)「鹿田遺跡」3『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』6 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年
- (6)「鹿田遺跡」4『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』11 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年

第97図 古市場道路調査区域図 (S=1/2,000)



## 第6章 古市場遺跡（二次調査）

### 第1節 発掘調査の概要

二次調査は平成12年度に実施した確認調査の結果を基に明らかになった遺跡の範囲内で、しかも削平される部分について発掘調査を実施した。基本的に耕作土の除去は重機により行い、遺構面上の包含層については手作業により廃土したが、8区～10区については、調査が予定より遅れたため、やむを得ず遺構面直上まで重機により廃土した。

また、出土遺構の実測は調査員1人体制では予定期間内の終了が無理なため、測量業者委託とした。委託した調査区は5区～10区である。

発掘調査は1区から10区に分けて実施し、1区より調査を開始して2区～3区～4区～5区～6区～7区～10区～9区～8区の順に行つた。（第97図）

1区は発掘調査区域の東端に2区と並んで位置し、調査前は標高141.3mの水田であった。検出された遺構は直径20～30cm大のビットと土壙が僅かであった。発掘調査の期間は平成14年6月24日～7月25日である。

2区は1区の南に隣接した調査区で、調査前は標高142.07mの水田であった。ここから検出した遺構も1区同様に直径20～30cm程度のビットがいくらか出土したのみである。発掘調査の期間は平成14年7月25日～9月4日である。

3区は調査区域の南に位置し、調査前は標高144.65～145.6mの水田と畑であった。この調査区は、耕作面が3段に分かれ、しかも遺構検出面までの堆積度が厚く、遺構検出までが予想以上に手間取った。検出した遺構は20～50cm大のビットと土壙、井戸である。発掘調査の期間は平成14年8月29日～12月6日である。

4区は3区の南に隣接した調査区で、調査前は耕作面が4段に分かれた水田であった。標高は146.1～147.6mである。検出した遺構は弥生時代後期と古墳時代の竪穴住居2軒と、土壙、ビットである。発掘調査の期間は平成14年11月22日～平成15年2月7日である。

5区は1～4区の所在する丘陵から鳥の奥川を隔てて西に位置する。調査前は標高145.12～145.8mの3段に分かれた水田であった。検出された遺構は古墳時代初期の竪穴住居2軒とビットである。遺構は検出されなかつたが、表土層より縄文後期の土器が出土した。発掘調査の期間は平成15年1月14日～2月24日である。

6区は調査区域の西南に位置し、調査前は標高144.0mの水田であった。検出した遺構は弥生時代末の竪穴住居1件と土壙、ビットである。この調査区からも縄文時代後期の土器が出土した。発掘調査の期間は平成15年1月20日～2月10日である。

7区は6区の北に位置し、調査前は標高143.16mの水田であった。検出した遺構は古墳時代の土壙や溝、ビットである。この調査区からも縄文土器が出土している。発掘調査の期間は平成15年2月5日～3月3日である。

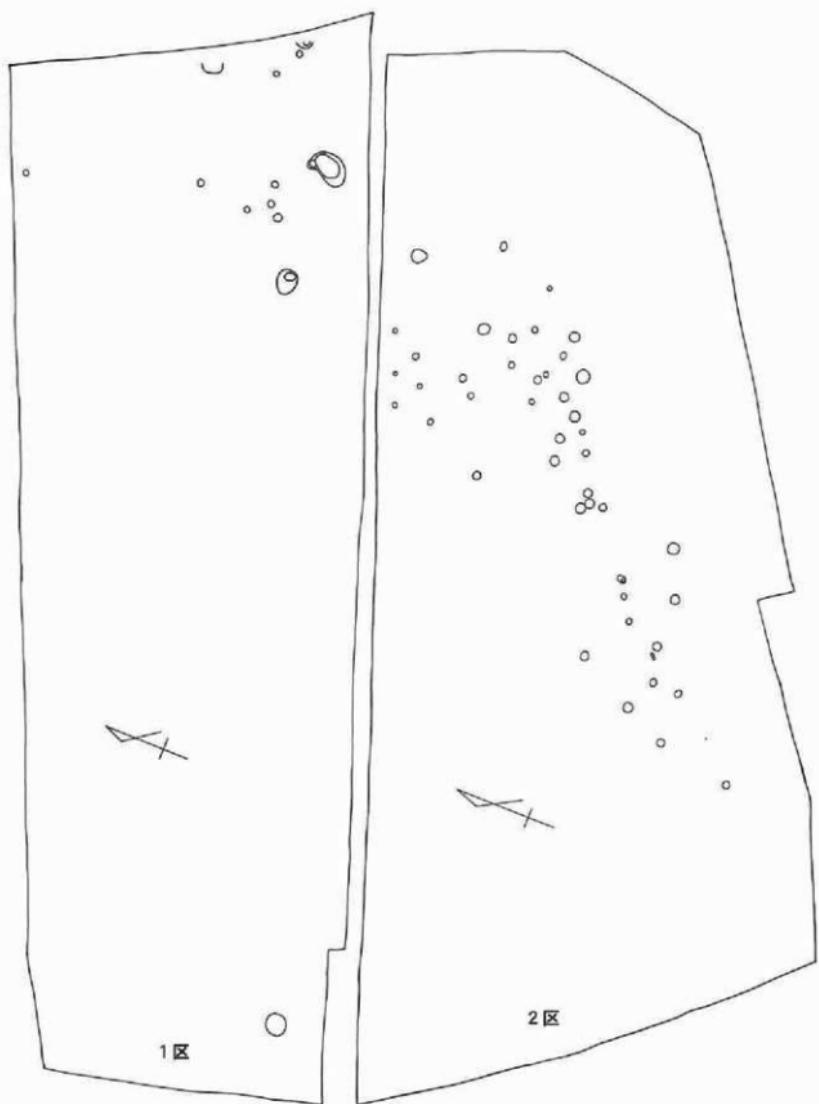
8区は調査区域の西端に位置し、調査前は標高142.43～143.15mの4段に分かれた水田であった。

検出した遺構は古墳時代前期の竪穴住居4軒と土壙、ピットである。発掘調査の期間は平成15年2月28日～3月31日である。

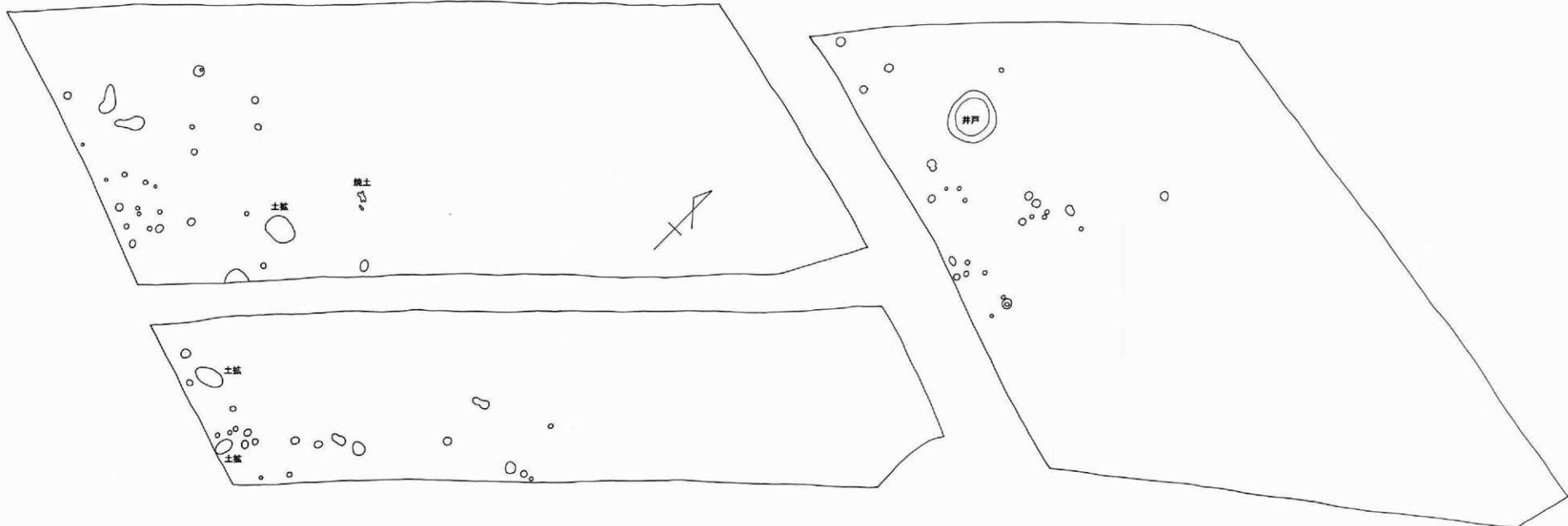
9区は8区の北に隣接する調査区で、調査前は標高141.4～141.8mの3段に分かれた水田であった。検出した遺構は弥生時代末～古墳時代初めの竪穴住居2軒とピット、土壙である。発掘調査の期間は平成15年2月17日～3月18日である。

10区は9区の北に隣接し、調査区域の北西端に位置する。調査前は標高140.0～140.8mの3枚に分かれた水田であった。検出された遺構は弥生時代後期の溝と鍛冶炉二基である。発掘調査の期間は平成15年2月13日～2月28日である。

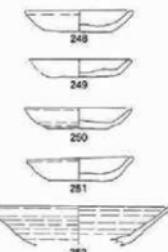
## 第2節 遺構・遺物



第98図 1区・2区遺構配置図 ( $S = 1/200$ )



第100図 古市場3区遺構配置図 ( $S = 1/200$ )



第99図 2区出土遺物実測図 (S=1/4)

### (1) 1区・2区 (第98図)

1区と2区は南北に隣接しており、ここでは区画を分けて説明する。検出した遺構は20~50cm大のピットと土壙が3基余りである。遺構は調査区全体からではなく、南西から北東部分にかけて検出された。

#### 出土遺物 (第99図)

1区・2区からの出土遺物は、コンテナに4箱分である。遺構はほとんど検出されなかつたが、調査区の西側部分からは弥生時代後期の高環や壺などが少量であるが出土している。大部分の量を占めるのは土師器で、須恵器は余り多くない。須恵器、土師器共に壺の底部は回転窓きり痕が残存する物と糸きり痕が残存するものが見られる。土鍋や瓦質土器も見られることから、平安末から鎌倉時代にかけての時期と思われる。図示したのは2区のP-8から出土した土器である。

248~251は土師器皿で口径は8.3~8.8cm、高さは1.5~2.0を測る。底部は糸きり痕が見られる。252は土師器皿で口径15.0cmを測る。体部は水引技法による凹凸が見られる。この土器も12世紀代と考える。

### (2) 3区 (第100図)

3区は南北に長い調査区で、基盤層は西と北が谷に向かって下がっているため埋土が厚く、遺構の検出は基盤層まで検出できた範囲に限られた。よって、遺構は偏って検出された。

3区から検出された遺構はピット、土壙、井戸である。ピットは直径20~50cm程度で、小規模である。建物が建つよう配置のものは見当たらなかった。出土した遺構の内、井戸について概略を記す。

#### 井戸 (第101図)

調査区の北の一番低い水田面より検出された。耕作土の下の茶褐色土、さらにその下層の暗茶褐色土を除去すると基盤層の黄茶褐色土が検出される。井戸はこの黄茶褐色土から掘り込まれていた。検出した標高は約143.3mで上面の掘り方は直径約3mのやや歪な円形を呈していた。埋土は暗茶褐色土で掘り掌大の小石が多く混入していた。60~70cm掘り下げた下からは直径110cmの円形に石が組まれている状態が検出された。石は30~50cm大の割り石が使用されており、比較的小さい石を積み上げていた。深さは上面から約1.5m掘り下げた段階で中止した。調査期間が十分でないことと、指定標高より既に1m以上掘り下げていたためである。

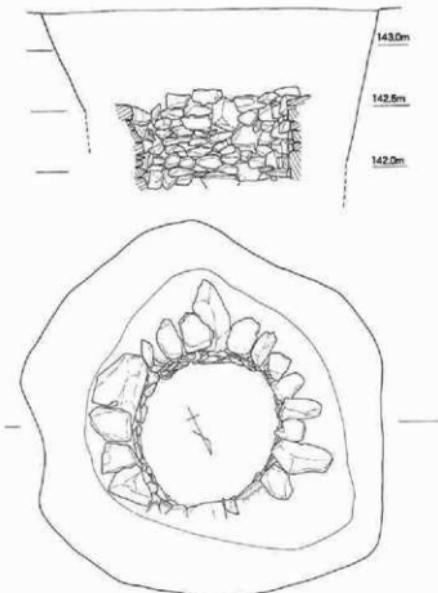
井戸から出土した遺物はビニール袋2杯程度であるが、土師器7に対し須恵器3の割合であった。図示したのは第97図253、254の須恵器壺である。2点とも底部は回転窓削りの後、高台を貼付している。8世紀代と思われる。図示し得なかつた小片の内、土師器は皿、鍋などが見られる。須恵器は図示した壺以外に壺、甕が見られる。壺の底部は回転窓きりで、甕の外表面は平行叩き、内面は同心円叩きが見られる。また、埋土上層部分には備前焼も混入している。

井戸の埋まつた時期については判断材料が少ないため、決めがたいが、上層とはいえ備前焼が出土していることから、最終は13世紀まで下ると思われる。

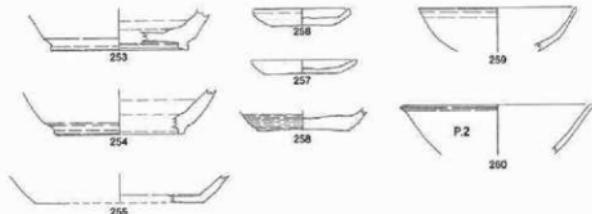
### 出土遺物（第102図）

3区から出土した遺物はコンテナに21箱分である。この調査区は遺構の検出は少なかったものの表土層の堆積が高く、出土遺物の量が多い。古い順に見てみると、まず弥生時代後期～末の壺、甕、高杯、鼓形器台などが見られ、その中には丹塗りのものも含まれている。次は6世紀後半の時期の蓋受けの付く須恵器壺が見られる。それに続く時期は奈良から平安時代で、高台付きの須恵器壺や土師器の土鍋や取っ手等が出土している。最後の時期は備前焼擂鉢や糸引き痕の残る土師器皿の出土するもので鎌倉時代と考える。

図示したのは遺構に伴って出土した土器である。255はP-9から出土した須恵器である。256～260はP-8から出土したもので、260の青磁碗以外は土師器である。土師器の底部には糸引き痕が



第101図 井戸平・断面図 (S = 1/40)



第102図 3区出土遺物実測図 (S = 1/4)

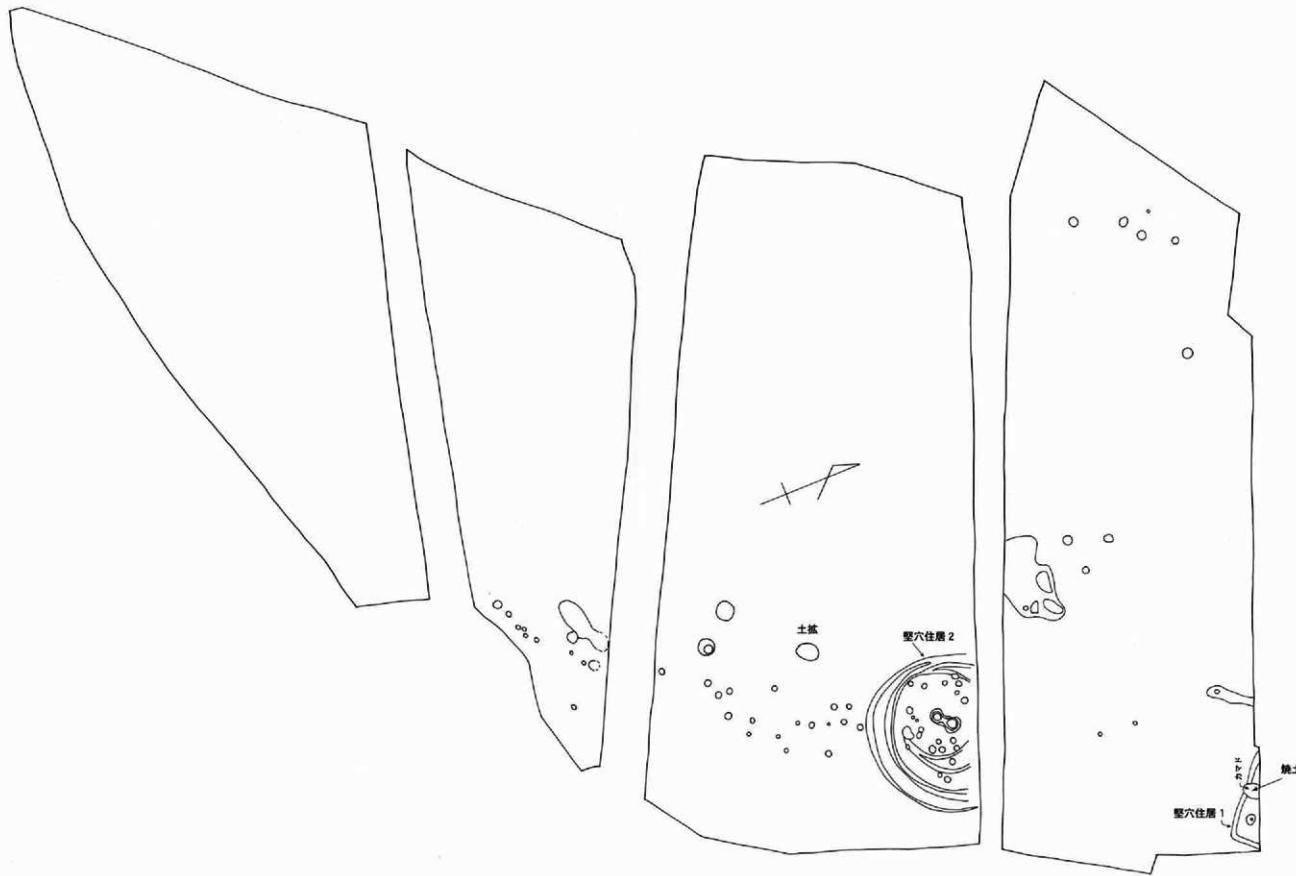
みられることから12世紀代と考える。

### (3) 4区（第103図）

4区は元は南北に4段に分かれた水田で、南と東は基盤層が急傾斜で下がっており、埋土は厚い。そのため、調査区の西半分は遺構を検出することができなかった。検出した遺構は多くないが、竪穴住居2軒と土壤、ピットである。また調査区の一番南の区画からは遺構は検出されなかったが、弥生時代後期の土器を含む包含層が検出された。

### 竪穴住居1（第104図）

調査区の北東端から検出された竪穴住居で、平面のプランは1辺4.9mを測る方形である。調査区



第103図 古市場4区遺構配置図 (S = 1/200)

の端から検出されたため検出できたのは全体の約1/3程度である。上面もかなり削平されており、表土層の直下から僅かに床面が残存していた状況で、壁体の床面からの高さは5cm残存していたのみである。柱構造は4本柱と思われるが、検出されたのは1本のみである。床の南端からは1m×0.75mの梢円形状に赤褐色の焼土の薄い塊が出土した。焼土は壁体溝の一部を覆っており、出土位置から考えて竈の存在が想定される。壁体溝は断面「U」字型に掘り込まれており、幅25~35cm、深さ11.4~14.3cmを測る。

この堅穴住居から出土した土器は壁体溝、柱穴から土師器の小片が出土しているが器形や時期は不明である。床面からは第100図に示した須恵器壺以外に、土師器腹片がいくらか出土しているが、時期の判明するものはない。図示した壺が唯一わかるものである。壺は口径12.8cm、器高8cmを測る。立ち上がりは僅かに内傾するが器高は低く、その特徴から6世紀後半と考える。

上層の出土遺物の中にも同一時期の須恵器が出土していることから判断して、この堅穴住居の時期は6世紀後半と考える。

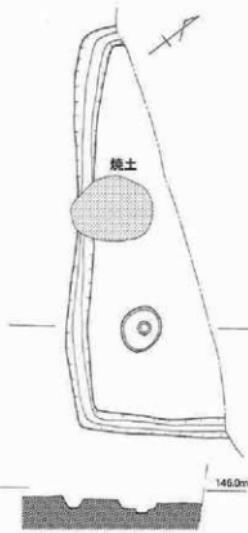
#### 堅穴住居2(第106図)

調査区の東端に位置し、堅穴住居1の南12mのところから検出された。北側は約1/3が耕作面造成の際に削平されていて、残存するのは南側2/3である。平面プランは円形で、壁体溝の数から3回の建て替えが行わっている。西側の壁体溝の重なる部分を基点に同心円を描くように大きくなっている。床面の直径は小さいものから順に4.7m、5.7m、6.9mを測る。建て替えの順番は内側の小さいものから外側の大きなものへと移っていると考えられる。堅穴住居内の埋土は厚く、約70cmに及び、上面には灰茶色土、その下には黒茶色砂礫土が堆積し、部分的に淡黒茶色砂礫土と黄灰色土が堆積していた。

一番内側の、直径4.7mの堅穴住居の壁体は3回目の建て替えの堅穴住居と共有しており、55.5cmである。壁体溝は南北の一部が欠けるものほぼ検出することができた。壁体溝の幅は10~20cm、深さは5.5~9.4cmを測る。中央穴はだるま型に東西に2つ並んで検出されているが、位置から想定してこの堅穴住居に伴うのは西側のものと推定される。西側の中央穴の深さは42.7cmである。柱構造は5本ないし6本と想定される。

次に真中の、直径5.7mの堅穴住居は最初の堅穴住居の床面をそのまま利用して、全体の規模を北東方向に拡張している。従って、床面の平面プランから推定すると中央穴は東側のものに作り変えて使用していると思われる。壁体溝の幅は10~20cm、深さは4.7~8.4cmと浅い。柱構造は8本と想定される。

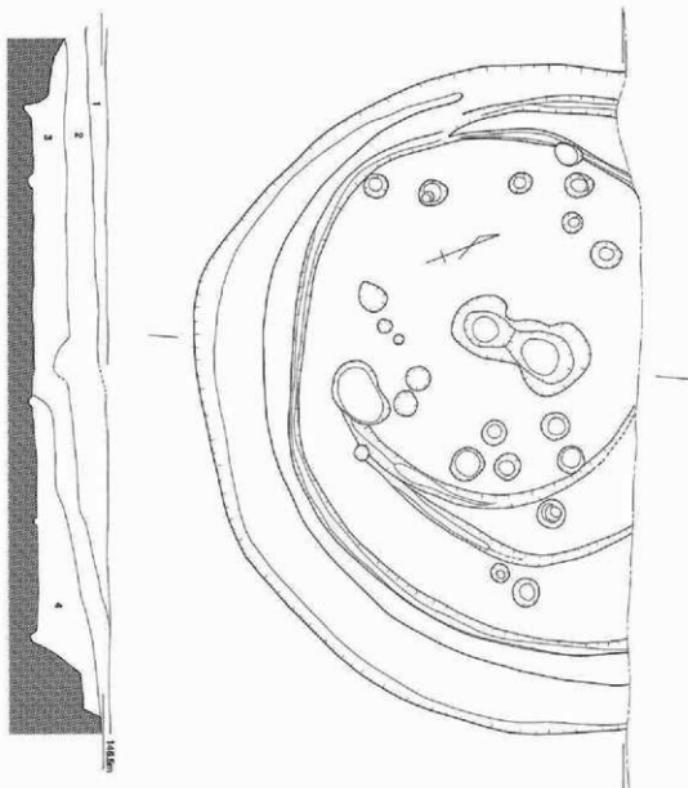
床面の直径が6.9mの堅穴住居は、三回目の建て替えにより最も規模が大きくなったもので、南西の基点から北東方向にさらに広がっている。壁体は2/3周残存しており、その高さは54.8~66.3cm



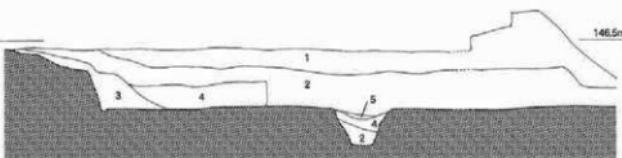
第104図 堅穴住居1平・断面図 (S=1/60)



第105図 堅穴住居1出土遺物実測図 (S=1/4)



1. 稲作土
2. 黒茶色砂礫土
3. 黒灰色土
4. 黑茶色砂
5. 黒茶色砂礫土に炭が混入



第106図 窪穴住居 2平・断面図 ( $S = 1/60$ )

を測り、残存状態は大変良い。また、壁体の上面は幅約60cmのテラス状の段になっている。このテラスは全体を囲むものではなく、地形の高い部分にのみ見られるようである。このことから屋根を建てる際に、地形の高低差を少なくする工夫をしていることがわかると共に、壁体が削平を受けずに当時の高さで残存していることが窺える。壁体溝は断面「U」字型をし、幅10~20cm、深さは2~7.9cmを測る。中央穴は2箇所しか検出できてなく、位置から判断して2回目の建て替え時のものを使用していると推測される。この窪穴住居に伴う柱穴は4~5本検出しているが、柱構造はおそらく8~

10本であったと思われる。

豎穴住居2から出土した土器は弥生時代後期後半代のものが中心であるが、後期前半代の土器から後期末までの土器が出土している。従って、弥生時代後期前半に最初の豎穴住居が建てられ、後半の時期まで立替を繰り返したと考える。

#### 豎穴住居2出土遺物（第107図、108図）

住居址2から出土したのは多数の土器と大型の砥石2点である。262～265は中央穴から出土した壺形土器と甕形土器である。どちらも複合口縁を有する器形で、胴部内面は箒削り、口縁から外面は横ナデが施されている。266～274、286、287は壺形土器である。266は口縁部の外面には3条の凹線が施され、部分的の赤色顔料の付着が見られる。他の壺形土器は複合口縁を有し、胴部内面は箒削り、外面は刷け目がほどこされている。275～283は甕形土器である。276以外は複合口縁を有する。壺形土器、甕形土器共に口縁の形態の違いは時期差によるもので、266、276は弥生時代後期前葉、複合口縁のものは弥生時代後期後葉と考える。284、285は壺形土器の底部である。289～291は鉢形土器で、複合口縁を有する。292～297は高坏である。坏部は脚部に比べて大きく、脚部は短く円形の透かしが穿たれているものが多い。208は台付きの壺と思われる。298～301は器台形土器である。298～300は頭部が口径と比べて細く、ここでは器台としたが、長径の壺形土器の可能性も多分にある。302は鼓形器台である。脚部内面には箒削りが見られ、外面には赤色顔料が残存する。303、304、306～308は鉢形土器である。308は台付きである。303は内外面ともに箒磨きを施しており、丁寧に作られている。305、309～311は土師器である。305は高坏または台付きの鉢形土器の脚部と思われる。309～311は覆土上面に混入していた坏と皿である。底部は箒きり痕が残るもので、古代後半の時期である。

土器以外には大型砥石が2個出土した。321-1、312-2は花崗岩製で、覆土下層の黒茶色砂礫土から出土した。出土位置も中央穴に近い場所で、一部赤く変色した個所があり、火を受けた痕跡と思われる。用途は砥石以外に用いられたことも考えられる。

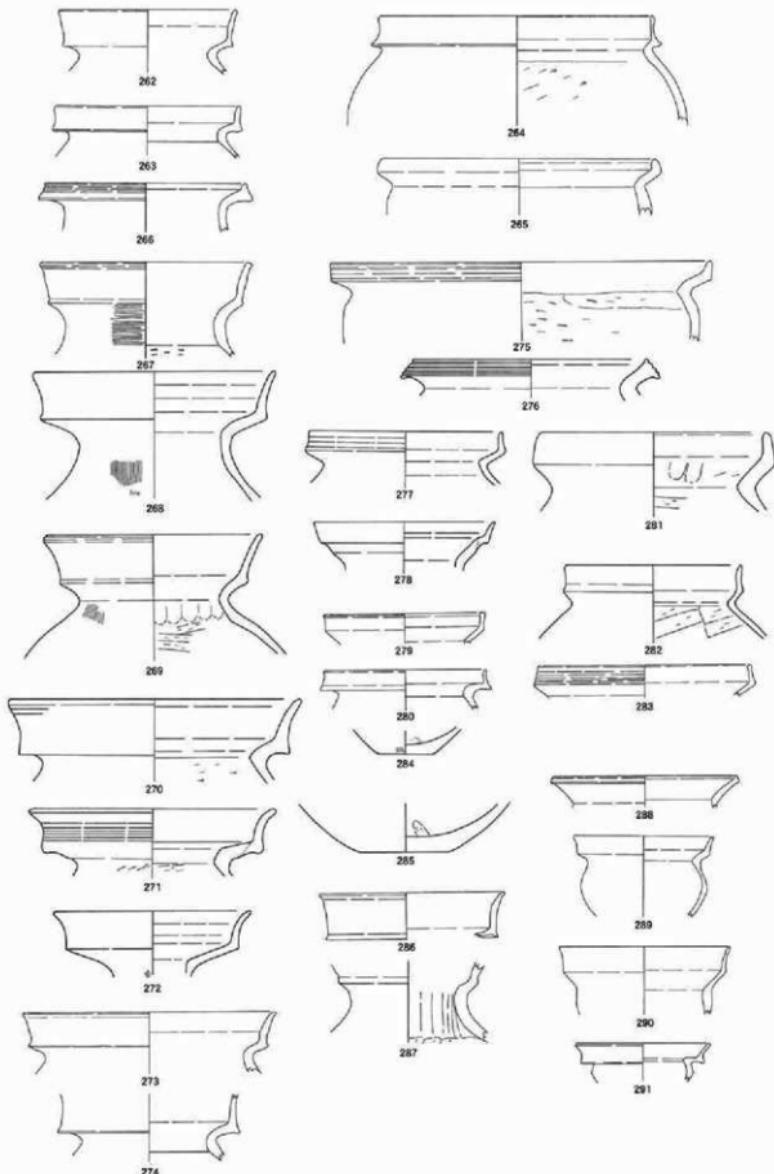
豎穴住居2からの出土土器の時期は弥生時代後期前葉から後期末までのものが混在していた。

#### 出土遺物（第109図、110図）

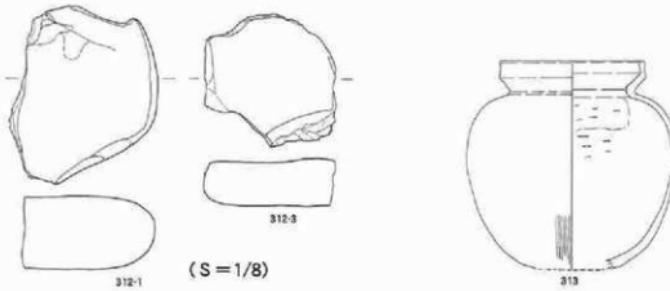
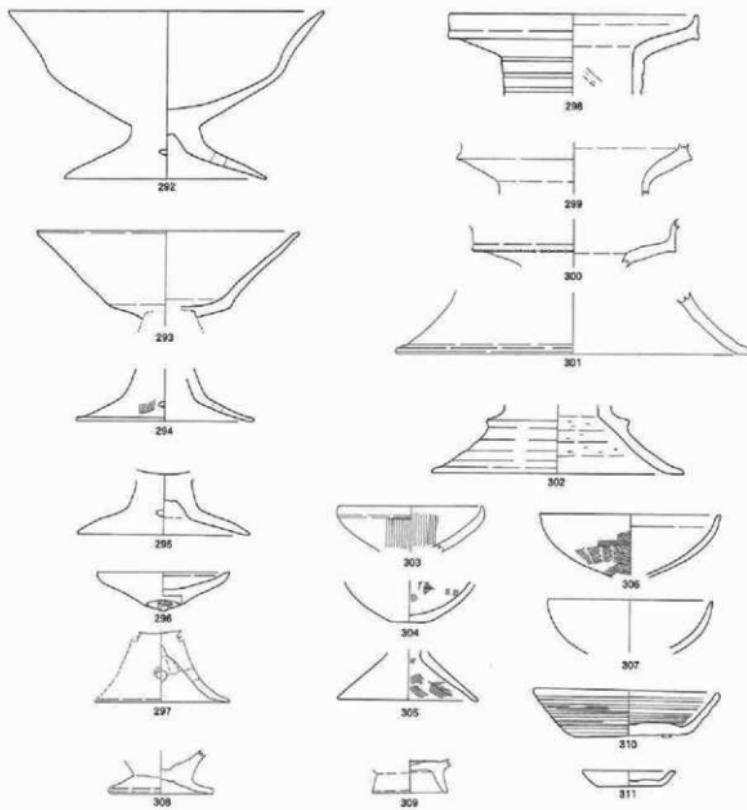
第109図313は豎穴住居2の南4mの地点から検出された土壤から出土した土師器甕である。胴部は丸みが増して梢円形状を呈し、底部はかなり丸くなっているが稜線は見られる。胴部内面は箒削り、外面は刷け目による調整が施されている。図示した以外に、高坏の脚部が見られる。その特徴から甕は初期の段階の土師器である。

第110図に示した土器は4区の最南端の区画から出土した土器である。この区画からは遺構は検出されなかったが、東側部分に黒茶褐色砂礫土が堆積する部分があり、そこから出土した土器である。314～317は壺形土器である。複合口縁を有するもので、314、315頭部に凹線または沈線が見られる。318～323は甕形土器である。口縁外部は沈線を施すもの（319）と横ナデだけのものがある。胴部内面には箒削りが、外面には刷け目が施されている。328は高坏である。327、329は器台である。どちらも脚部に円形の透かしが穿たれており、327は上下に2個並び、329は横に2個一対で並ぶ。内面には箒削りが施され、329の外面には赤色顔料の付着痕が見られた。324、325は鉢形土器で台の無いものと台付きのものである。325の外面には赤色顔料の付着痕が見られた。

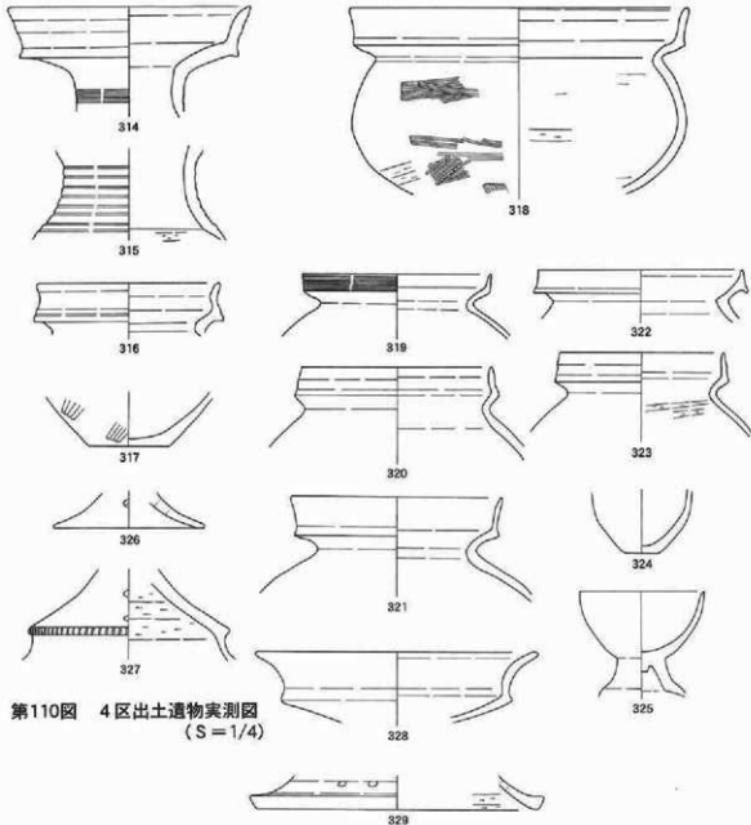
これらの土器はその特徴から弥生時代後期後半代の範囲に含まれると思われる。



第107図 積穴住居2出土遺物実測図(1) (S=1/4)



第108図 整穴住居2出土遺物実測図 ( $S = 1/4 \cdot 1/8$ ) 第109図 土壌出土遺物実測図 ( $S = 1/4$ )



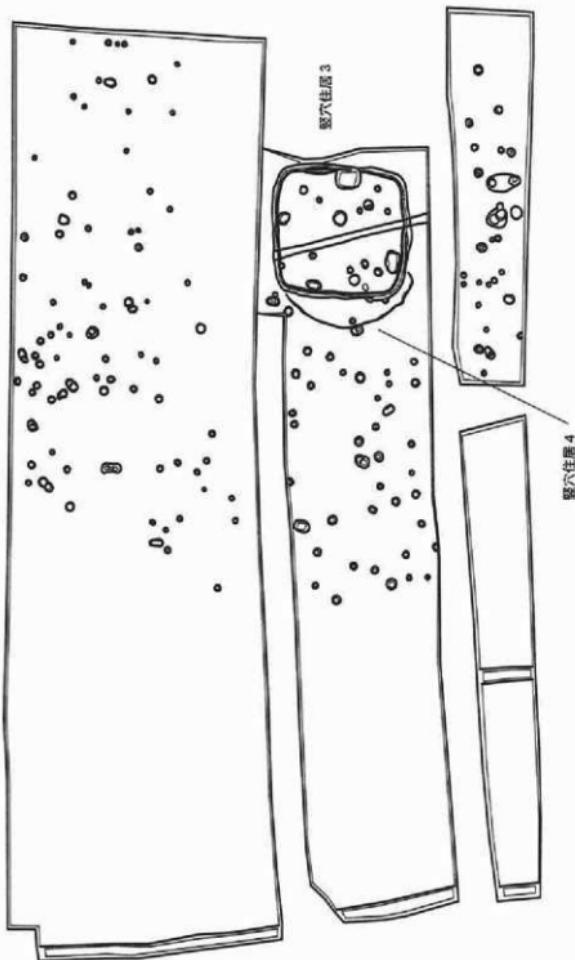
第110図 4区出土遺物実測図  
(S=1/4)

4区から出土した遺物はコンテナに15箱分有り、図示した以外にも多数の弥生時代後期の土器が出土している。少量ではあるが、須恵器、土師器、備前焼、青磁なども出土しているが、その時期は古代～中世にかけてのものである。

#### (4) 5区 (第111図)

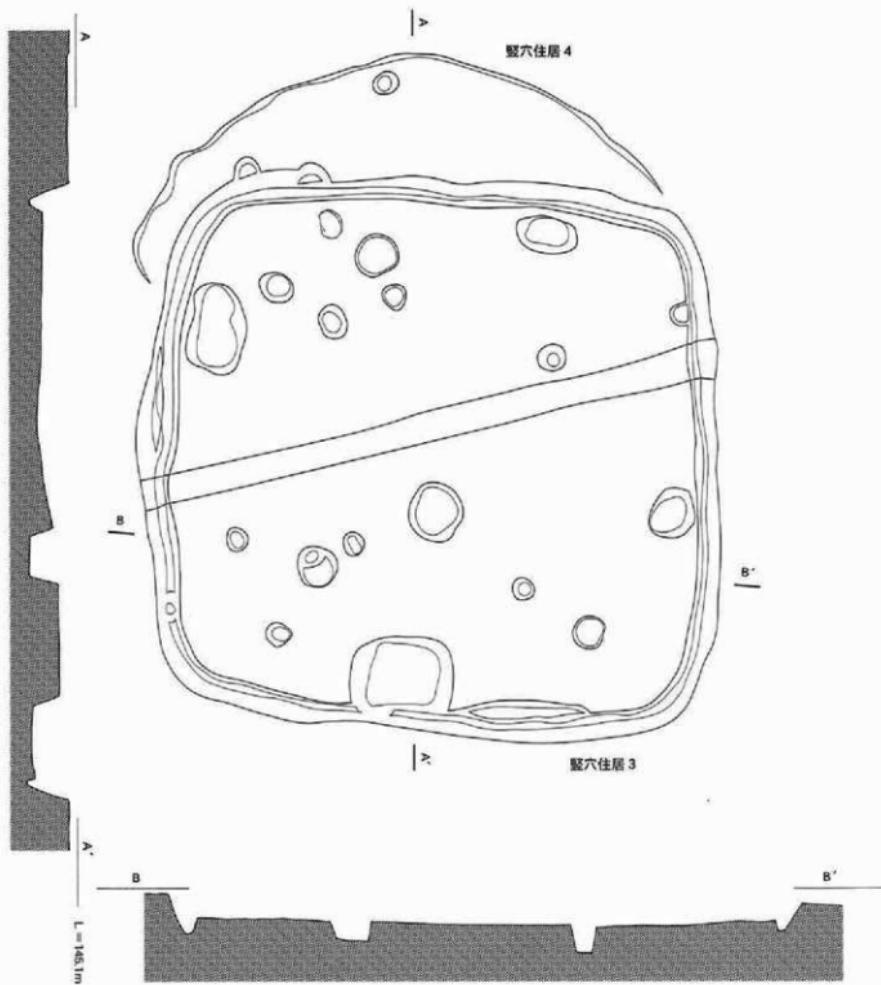
5区は1～4区の所在する丘陵から谷一つ隔てて西の台地上に位置する。調査区は4枚の耕作面に分かれており、東部分を中心にピットが多数検出された。ピット内には須恵器、土師器の小片がはいっていたが、何れも古代末～中世のものと思われる。建物が建つような配置のものは見られなかった。中段の東端からは竪穴住居が2軒切り合った状態で検出された。遺構が検出されたのは基盤層まで掘り下げた段階であるが北側の一番低い耕作面には基盤層の直上には砂礫層が堆積しており、氾濫時に鳥の奥川の土砂が流出した痕跡と思われる。竪穴住居の検出された耕作面はそれより高いため砂礫層の堆積は見られなかった。

第111図 古市場5区遺構配置図 (S=1/250)



縫穴住居3(第112図)

調査区の東端から検出されており、鳥の奥川の谷に向かう傾斜面の際にあたる位置である。表土層を取り除いた段階で暗茶褐色土の覆土が検出された。中央部を斜めの横断する形で現代の給水管が敷設されており、床面の一部が破壊されている。平面のプランは隅丸方形で、 $6.9m \times 7.25m$ を測る。柱構造は4本柱で、中心より東に約50cm余りずれて中央穴が検出された。壁体の高さは残存状態の良い西側で30cmを測る。壁体溝は断面「U」字型で、幅20~25cm、深さ10~21cmを測り深くしっかりとしたものである。床面の西端の壁体溝の直ぐ脇から緑泥片岩の砥石が出土した。

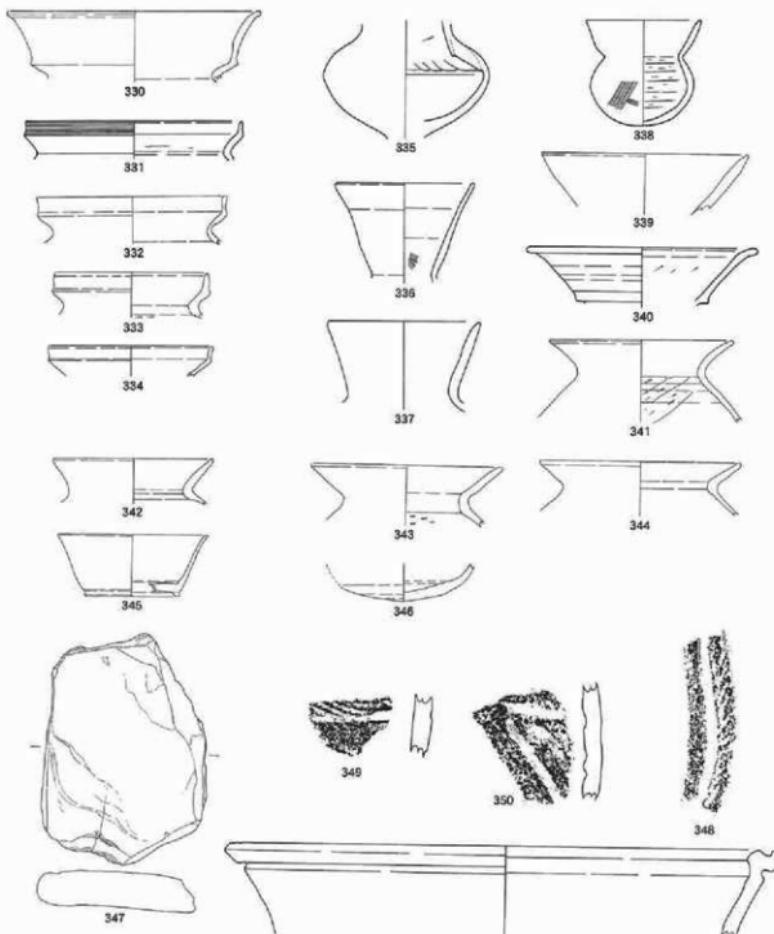


第112図 縫穴住居3・4平・断面図 (S=1/60)

縫穴住居3の時期は覆土の中から出土した土器から古墳時代初めと考えられる。

**縫穴住居4（第112図）**

平面プランは円形と思われるが、縫穴住居3によって切られており、一部しか残存しない。また、構成の耕作面造成による削平を受けており、検出できたのは周囲より僅かに3cm程度の深さに壁体溝



第113図 窓穴住居3・4出土遺物実測図 ( $S = 1/2 \cdot 1/4 \cdot 1/8$ )



第114図 5区出土縄文土器実測図 ( $S = 1/4$ )

が残っている状態であった。壁体溝は約1／3周が残存している状態で、床面の大きさは推定で、直径7.2mを測る。柱構造についても不明である。また、壁体溝は外側の淵が残るのみで幅、深さ共に不明である。従って、覆土もほとんど無いため、時期はわからない。しかし竪穴住居3よりは古く、平面プランも円形ということから判断すると、弥生時代後半から末の時期の範囲内にあると思われる。

#### 竪穴住居3出土遺物（第113図）

住居址3の覆土及び柱穴内から出土した土器はコンテナに2箱分有り、そのうち図示できるものと示した。330～334は複合口縁を有する壺形土器と変形土器である。この5点だけ見ると弥生土器と思われるが、341～344の口縁を有する壺または壺と供に出土しているので土師器と判断する。335は台付き壺と思われる。P-1から出土したもので、外面には赤色顔料が塗布されており検出時はきれいな暗赤色を呈していた。胎土も精選されたきめの細かい粘土を用いており、他の出土時とは趣を異にする。弥生時代後期後半の時期のものと考える。336～338は小型の壺である。338の胴部外面は刷目、内面は笠削りが施されている。340は鼓形器台である。口縁端部から外面にかけては横ナデ、内面は笠削りの後、横ナデを施している。354、356は須恵器壺である。345は高台の付くもので奈良時代と思われる。346は底部に笠削りが見られることから、7世紀台のものと見ることができる。2点とも覆土中に混入したものと思われ、竪穴住居3の時期とは異なる。

347は床面から出土した大型の砥石である。石材は緑泥片岩で周辺の山から採取される石である。

348～350は縄文土器である。3点とも覆土中に混入していた。348は鉢形を呈すると思われ、口縁端部は肥厚して上面には磨消繩文が施されている。349、350にも磨消繩文と太い沈船線による文様が見られる。3点ともその特徴から縄文後期の土器と考える。

#### 出土遺物（第114図）

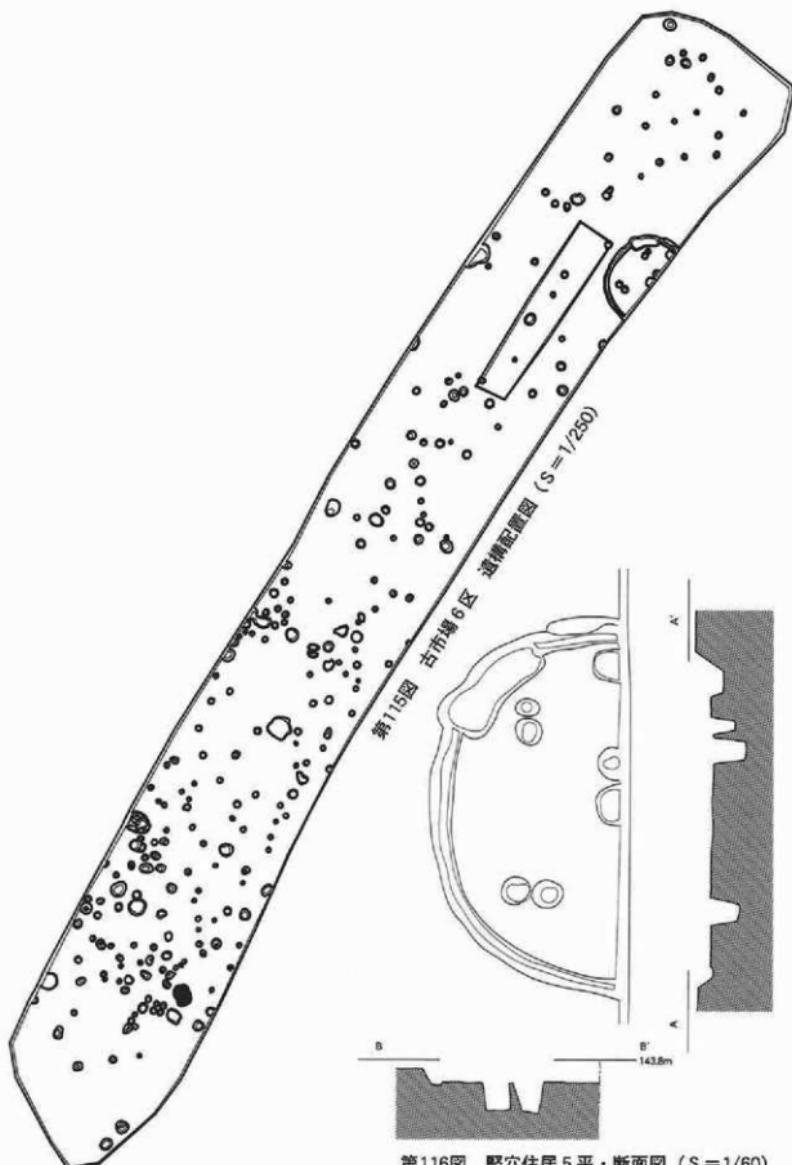
5区から出土した土器はコンテナに7箱分ある。最も量の多いのは土師器で、次に弥生土器と少量の須恵器が含まれている。竪穴住居以外にピットから須恵器、土師器が出土しているが小片のため図示できない。土器の時期は縄文土器、弥生時代後期初頭から平安時代までの物が出土しており、広範囲にわたっている。図示したのは表土層からの出土であるが、縄文土器4点である。351は無紋で、口縁外面に低い凸帯がつく。352は口縁端部に刻み目が見られるだけである。353は無紋である。354は胴部に1列だけ貝殻条痕が巡る。その特徴から354は縄文晩期、その他は縄文後期の時期と思われる。

#### （5）6区（第115図）

6区は調査区域の西に位置し、東西の細長い調査区である。この調査区は地形の高い位置にあるため、南側は耕作土の直下から基盤層が検出された。従って、全体に表土は薄く、出土した土器も少量である。検出した遺構は竪穴住居1軒と土壙及び多数のピットである。この調査区からもピットは多數検出されたが、建物が建つような配置は見られなかった。竪穴住居は出土遺物から弥生時代のものであるが、他のピット、土壙は時期不明なものが多いが、出土土器から判断して古墳時代の終わりから平安時代に至る時期と考える。

#### 竪穴住居5（第116図）

調査区の南東から検出されており、半分は調査区域外のため未検出である。平面のプランは円形で、直径は4.6mを測る。柱構造は4本柱と推定されるが検出したのは2本である。柱は1回建て替えられているようで、検出した柱の傍に同じような規模・深さの柱穴が見られた。中央穴は調査区域の端



第116図 穴住居 5平・断面図 (S=1/60)



第117図 壁穴住居5出土遺物実測図 ( $S = 1/4$ )



第118図 6区出土遺物実測図 ( $S = 1/2 \cdot 1/4$ )

から約半分が検出され、中には灰を多く含む黒色土がはいっていた。壁体の高さは残存の良いところで約30cmである。壁体溝は一部土壌によって切られているが、よく残っており、幅18~28cm、深さ5cmを測る。

壁穴住居5から出土した土器は第117図の355~357である。3点とも弥生土器と思われるもので、355は壺形土器、356は壺形土器で、どちらも複合口縁を有する。357は高壺の脚部である。沈線と斜めの範による文様が施されており、装飾性に富む。図示した以外に鼓形器台も出土した。これらの土器の時期は高壺がやや古い傾向を示すが、概ね弥生時代後期後葉と思われる。

#### 出土遺物 (第118図)

6区から出土した土器はコンテナに僅か3箱分である。弥生時代の壁穴住居が検出されたものの弥生土器は少量で、大半は土師器である。須恵器も多くなく、この調査区からも繩文土器が出土した。図示したのは造構内からの出土のものである。358、359は土壌2から出土し須恵器壺と土師器壺である。壺の形態から7世紀初頭と思われる。360はP-11から出土した土師器皿である。底部は範引き痕が見られ、平安時代の所産と思われる。361、362は供に繩文土器で、口縁部が内湾する鉢形土器である。外面の文様は、磨消繩文の上に太い沈線文が施されており、繩文後期の特徴を示す土器である。

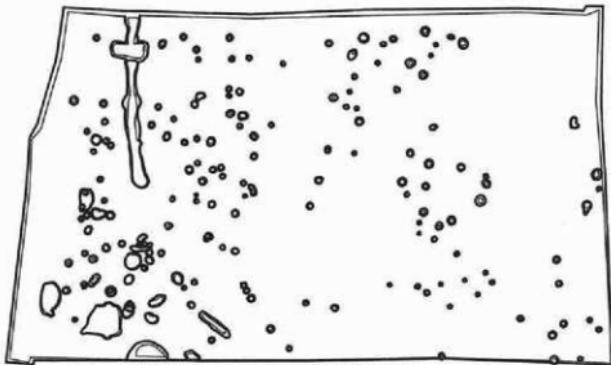
#### (6) 7区 (第119図)

7区は6区の北に位置する調査区で、基盤層は北に向かって低くなっている。造構は基盤層まで下げた段階で検出された。造構は調査区全体に広がって検出されており、溝、土壌と多数のピットであった。この調査区から検出されたピットも建物が建つような配置のものは無かった。

#### 土壌1 (第120図・121図)

調査区の南端近くから検出された。南北に細長い土壌で長さ1.92m、幅0.4mを測る。深さは26~35cmを測り、土壌内には暗茶灰色土が入っていた。土壌の中には須恵器と土師器が入っており、図示した須恵器4点 (第121図363~366) はどれもほぼ完形品で、土壌内に最初から置かれた状態で出土した。土師器は器形不明の小片で埋土に混じって混入したものと思われる。従って、この土壌は土壌墓と判断され、中から出土した須恵器は、副葬品と判断する。

363は短頸壺で、破損した箇所は無い。胴部は丸く、稜線は見られない。底部は範削り、胴部から

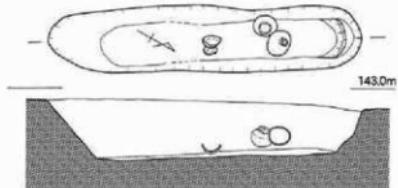


第119図 古市場7区遺構配置図 (S=1/250)

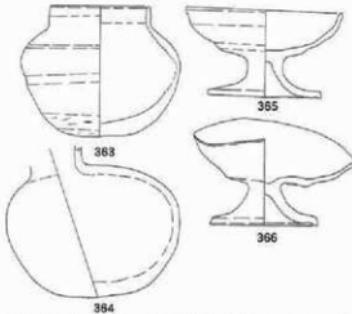
口縁は横ナデによる調整が施されている。364平瓶で、口縁部を欠いているが、他は残存する。胴部は丸く、短頸壺と同じく稜線は見られない。体部下半は笠削り、上半は搔き目による調整を行っている。365、366は短脚の高坏で、366は坏部に焼成時のひずみが見られる。この須恵器4点はその特徴から6世紀後半～末葉と考える。

#### 出土遺物（第122図）

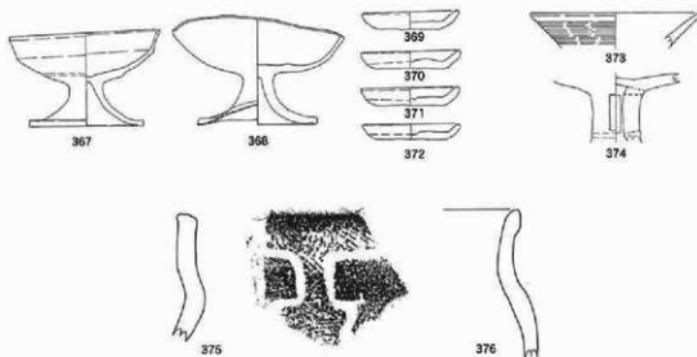
7区からの出土遺物は表土層が浅かったためコンテナに2箱分しか出土しなかった。図示した土器は遺構に伴って出土したものである。367、368はP-11から出土した、須恵器高坏である。どちらも短脚で、368は焼成時の焼ゆがみにより全体が大きく歪んでいる。土壙1の高坏と類似しており同じく7世紀初頭と考える。369～373は土壙4から出土した土師器の皿である。373以外は口径7.6～7.9cmの小皿で4点とも底部に糸引き痕が見られる。373は水引痕が残るもので、12世紀の所産と思われる。墓に副葬されたものと思われる。374は土壙5から出土した須恵器の高坏である。長脚で、2段になっており、残存する上段には長方形の透かしが穿たれている。短脚のものよりやや古いと思われる。



第120図 土壙1平・断面図 (S=1/30)



第121図 土壙1出土遺物実測図 (S=1/4)



第122図 7区出土遺物実測図 (S=1/2・1/4)

375, 376は表土層からの出土であるが、この調査区からも縄文土器が出土している。375は磨消繩文と太い沈線が施された鉢形土器で縄文時代後期の土器である。376は無紋であるが、口縁が僅かに肥厚する鉢形土器で、やはり後期のものである。

7区からは図示した以外に土器器鏡や須恵器甕なども出土しているが、図示した土器と同じく7世纪代と12世纪代の時期に含まれるものである。

#### (7) 8区 (第123図)

8区は9区、10区と並んで調査区域の西端に位置する。調査前は4枚の水田に分かれており北と西は地形が低く緩やかに傾斜していた。検出した遺構は竪穴住居4軒と土壤及び多数のビットである。この調査区からのビットも全体に広がって検出されたが、建物が連つような配置のものは見当たらなかつた。

#### 竪穴住居11 (第124図・125図)

調査区の南東の端から検出されたため南側半分は調査区域外となるため未検出である。平面のプランは円形を呈し、直径は9.34mを測る。今回の調査で検出した竪穴住居の中では床面積は最も広い。柱構造はこの規模から推定すると8本～10本柱と考えられるが、検出したのは深さ30cm程度の中穴4基である。中央穴は中心より少し東によった位置に検出された。埋土中には灰を含む黒色土が入っていた。壁体溝は断面「U」字型を呈し、幅25～40cm、深さ5cmを測る。壁体の高さは30cmである。

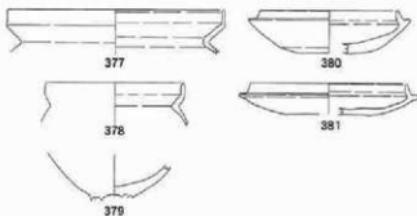
覆土は比較的厚かったにもかかわらず、出土遺物は少なかった。コンテナに約半分出土したが小片が多く、図示できたのは第125図に示した5点のみである。377～379は弥生土器である。377、378は複合口縁を持つ壺形土器である。377は口縁部外面には細い沈線が施され、胴部内面は鏽削りが施されている。379は台付き壺で内外面に赤色顔料が塗布されている。以上3点は弥生時代後期末葉の時期と思われる。380、381は6世纪後半の須恵器甕で、この竪穴住居に伴う土器とは考えがたい。何らかの理由により覆土に混入したものと考える。従って、竪穴住居11は弥生時代後期末葉の時期と考える。

#### 竪穴住居8 (第126図・127図)

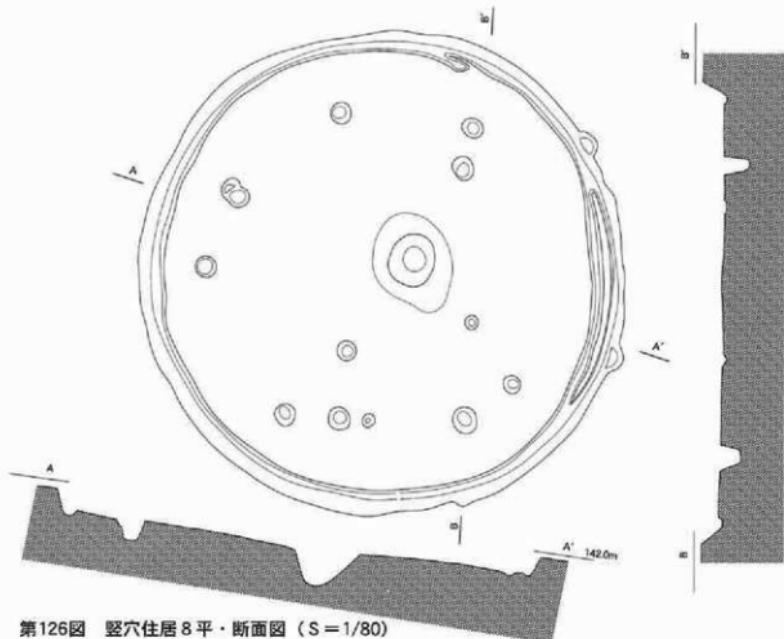
調査区の北から検出された。平面のプランは円形で床面の直径は7.8mを測る。壁体溝は全周が残

存するが東側の一部は2重に検出されており、軽微な建て替えが行われたことも考えられる。検出した柱穴は中央穴をのぞいて12基あるが、柱構造は5本ないし6本柱と思われる。東の壁体溝が二重の部分については柱の間隔が広くなっている、何らかの理由によると思われるがここでは解明できていない。中央穴はほぼ中心に位置しており、中には灰を含む黒色土が入っていた。壁体溝は断面「U」字型で、幅22~40cm、深さ10cmを測る。

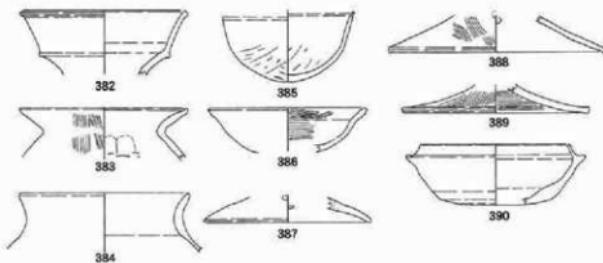
覆土内からの出土遺物は第127図に図示した。図示した以外にもコンテナ1箱分の土器が出土している。須恵器も多少出土しているが、弥生土器と土師器が大部分を占める。382~389は土師器である。382は複合口縁を有する壺で、383、384は甕である。385、386は鉢形土器でどちらも内外面とともに赤色顔料を塗布している。2点とも底部外面は簾削りであるが、内面は簾削りと刷け目がある。387~389は高壺の脚部で、389を除いて1cm大の円孔が穿たれており、また外面のみ赤色顔料が塗布されている。これらの土師器は古墳時代初頭の時期と考えられるもので、竪穴住居8は平面プランが円形であるが、この時期と考える。390は須恵器の壺である。384の甕と共に6世紀末から7世



第125図 竪穴住居11出土遺物実測図 (S=1/4)



第126図 竪穴住居8 平・断面図 (S=1/80)

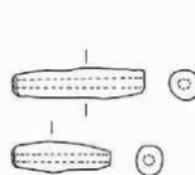


第127図 竪穴住居8出土遺物実測図 ( $S=1/4$ )

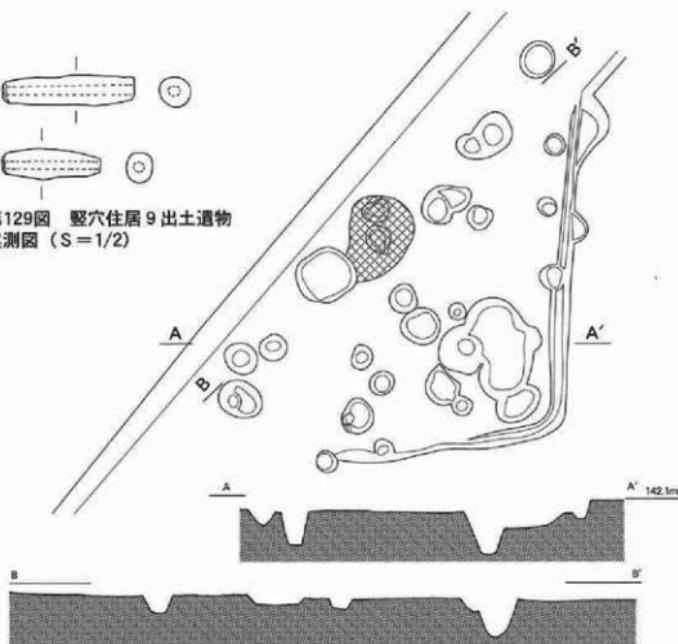
紀初頭と思われる物で、竪穴住居8に伴うものではないと考える。

#### 竪穴住居9 (第128図・129図)

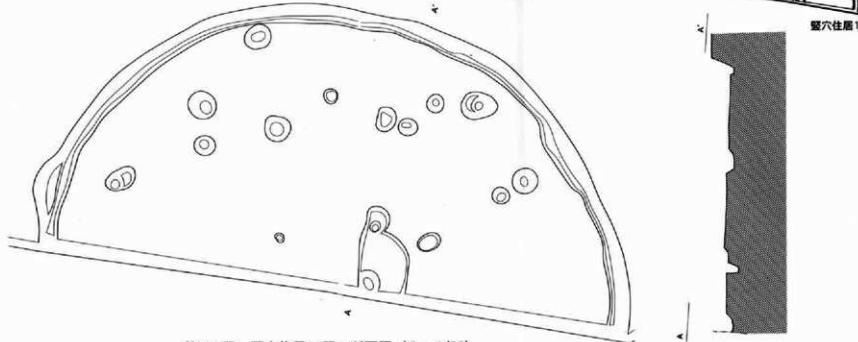
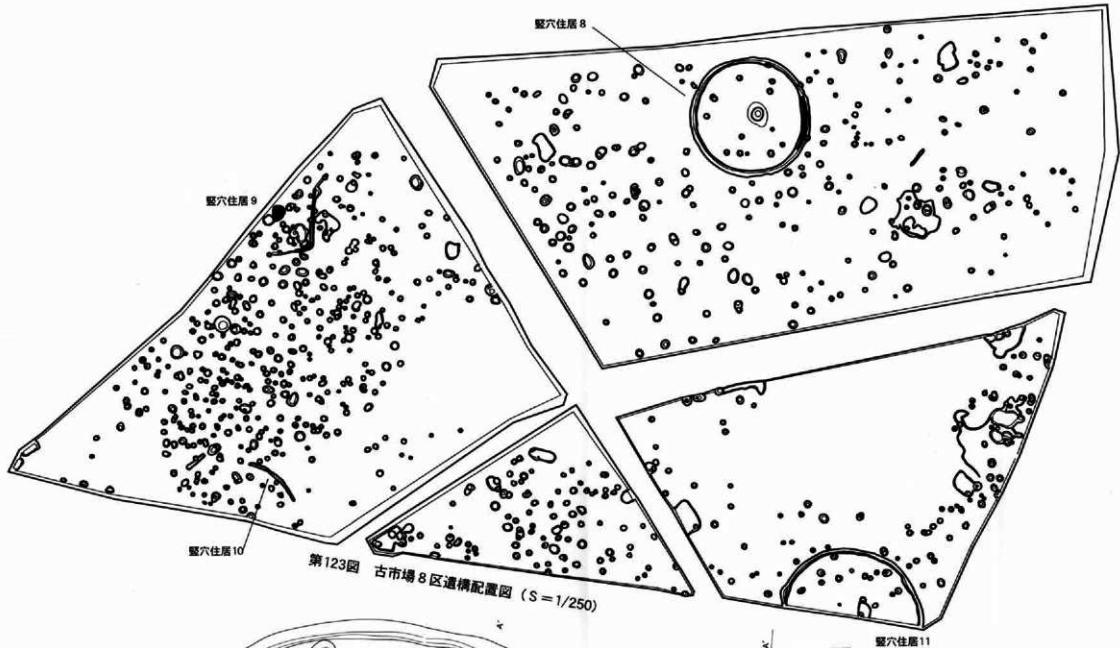
調査区の西端から検出したが、約2/3は調査区域外にあるため、検出できたのは残りの1/3である。平面プランは方形であるが、基礎層まで及ぶ削平が既に及んでおり検出時には壁体溝の一部をやっと検出できたのみである。残存していた壁体溝の長さは東西2.8m、南北4.0mを測る。柱穴と中央穴から判断して、床面の規模は1辺が約4.9mと推定される。柱構造は4本柱と推定されるが検出したのは3本である。中央穴は調査区域ギリギリの位置から出土し、北東方向に80cm×100cmの範囲

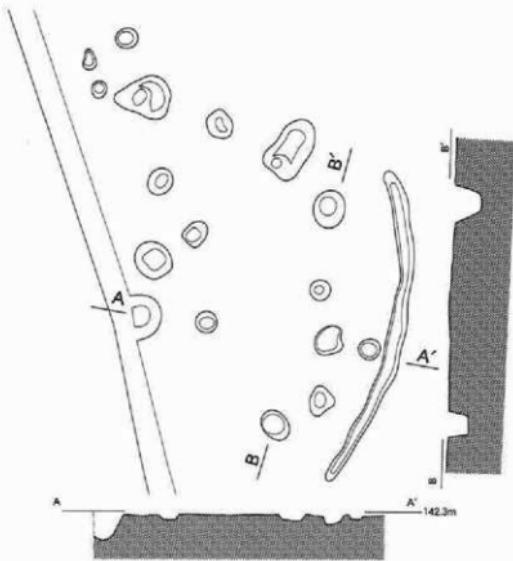


第129図 竪穴住居9出土遺物  
実測図 ( $S=1/2$ )



第128図 竪穴住宅9平・断面図 ( $S=1/60$ )





第130図 竪穴住居10平・断面図

に床面が焼けた状態で検出された。壁体溝の幅は25cm、深さは20cmを測る。

覆土はほとんどなかったため、供伴する遺物は図示した土師器の土錐2点のみである。従って時期については不明である。

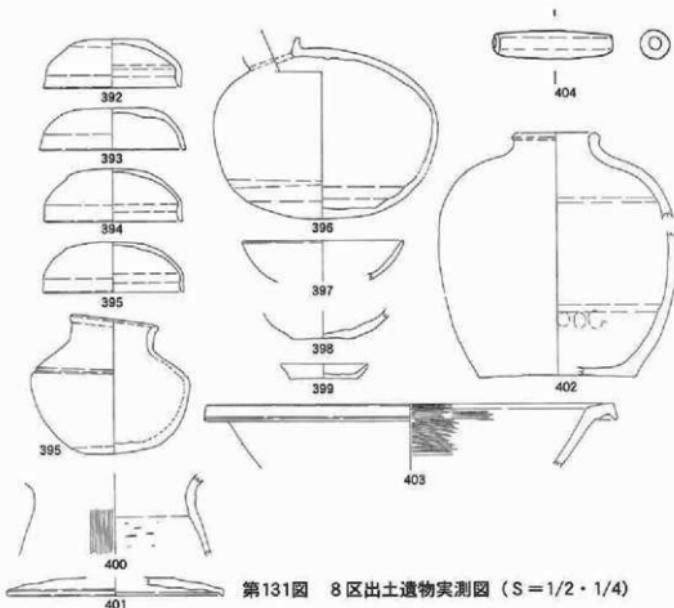
#### 竪穴住居10（第130図）

調査区の南西端から検出したが、後世の基盤層まで及ぶ削平により検出できたのは僅かに4mあまりの長さ残る壁体溝であった。平面のプランは円形で約1／8周残存し、推定で直径は8.3mを測る。柱構造はこの規模から想定して8本柱と思われるが、検出できたのは2本である。中央穴については未検出である。壁体溝の幅は20cm、深さは5cmである。

覆土はなかったため、供伴する土器はない。従って、竪穴住居10の時期は明確にはできないが、円形プランであることから判断すると弥生時代後半から古墳時代初頭の時期と考えるのが妥当と思われる。

#### 出土遺物（第131図）

8区から出土した遺物はコンテナ5箱分である。弥生土器も出土しているが、大半を占めるのは土師器、須恵器である。他には少量であるが瓦質土器、白磁などが見られる。図示したものは遺構内からの出土品である。391～396は土壙1から出土した須恵器である。391～394は壺蓋である。外面は荒きり痕が見られる。395は短頸壺である。396は平瓶で、体部は丸く、縦線は見られない。下部は寛削り、上半部にはカキ目が施されている。口縁部は欠けている。土壙1の出土土器は7世紀前半の時期と思われる。397はP-30から出土した土師器碗である。398も土師器碗でP-31から出土した。399はP-15から出土した土師器皿である。土師器3点は何れも磨耗が著しく調整は不明。400



第131図 8区出土遺物実測図 ( $S = 1/2 \cdot 1/4$ )

はP-8から出土した土師器甕である。401はP-13から出土した須恵器の壺蓋である。397~401の土器は大まかに見て平安時代の範疇にあると思われる。402はP-27から出土した須恵質の甕である。還元炎焼成による暗灰色を呈するが、器形は備前焼Ⅲ期の口縁短部を僅かに外方に折り曲げるものに似ており、鎌倉時代後半の時期と考える。403はP-33から出土した瓦質土器の鏽である。404は土師器の土錘である。

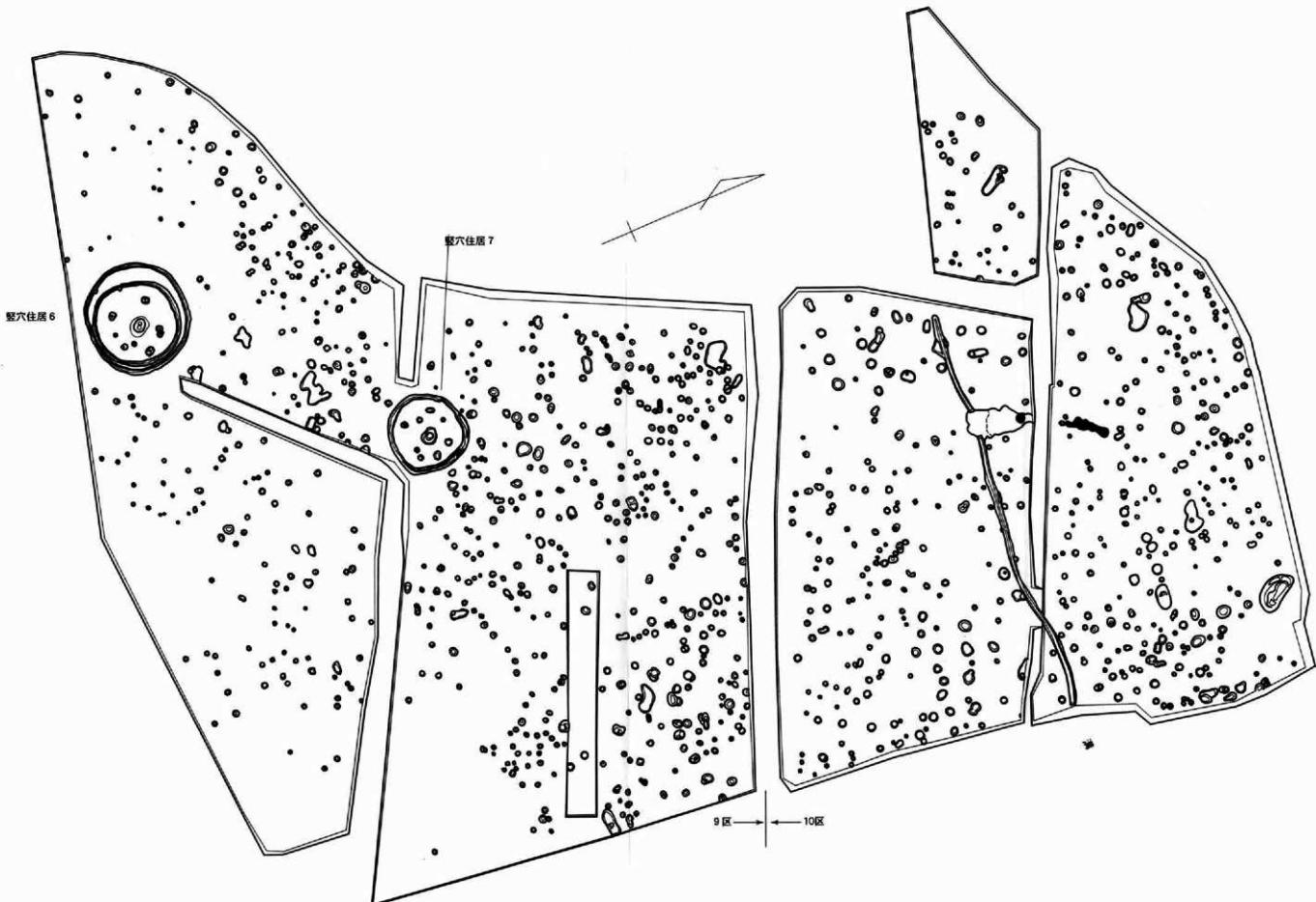
#### (8) 9区 (第132図)

9区は調査区域の西端に位置し、8区の北に隣接している。従って、基盤層は北と西に向かって緩やかに傾斜する。検出した遺構は竪穴住居2軒と土壙、多数のピットである。

#### 竪穴住居6 (第133図・134図)

調査区の南端から検出された。一回立替を行っており、平面のプランは円形で、内側の直径は5.95m、外側の直径は6.85mを測る。内側の竪穴住居の床面の高さは140.9mで、外側の床面は141.15mであり、その差は25cmある。検出時の覆土からは堅牢な床面状を示す個所は見られなかった。従って、建て替えの新旧は外側のものは古く、内側のものが新しいと判断され、床面の規模は小さくなっている。検出された中央穴及び柱穴は内側の建て替え後の竪穴住居に伴うもので、柱構造は4本柱である。壁体溝の幅は18~32cm、深さは5~10cmを測る。壁体の高さは内側のもので25cm、外側のものは15cmである。中央穴には灰混じりの黒色土が入っていた。

覆土から出土した土器はコンテナに1箱分あり、そのうちの17点を図示した。405~408は複合口縁を有する壺形土器と変形土器である。胴部内面には施削りが見られる。弥生土器か土師器かの区別はつけがたく、弥生時代末~古墳時代初頭の範囲と考える。409、410は土師器甕である。胴部内面

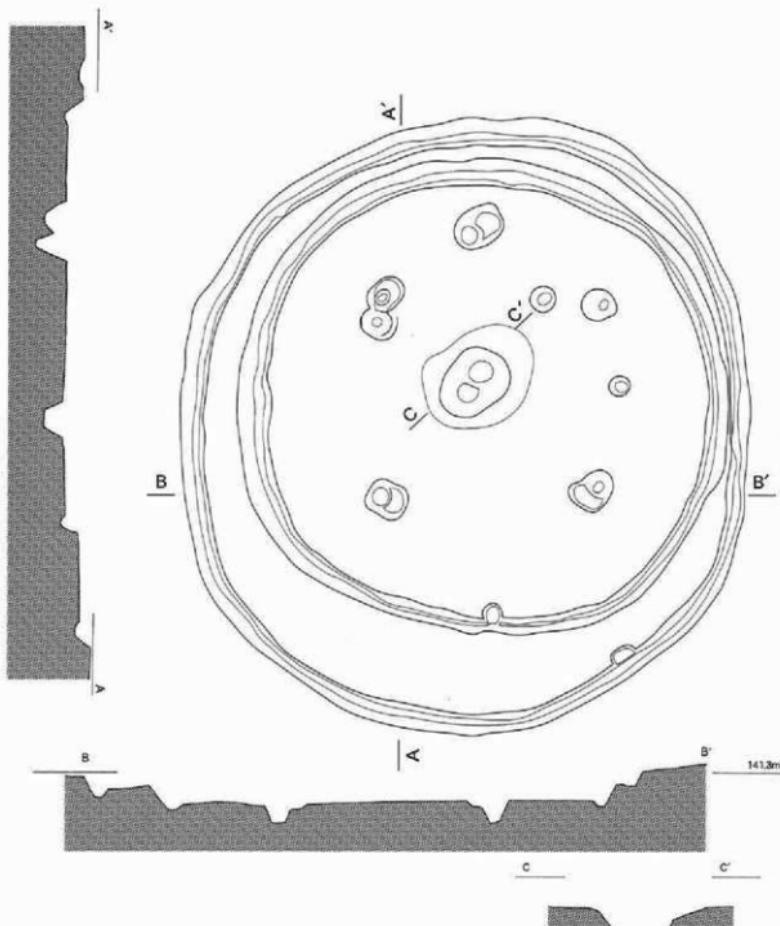


第132図 古市場 9区・10区造構配置図 (S=1/250)

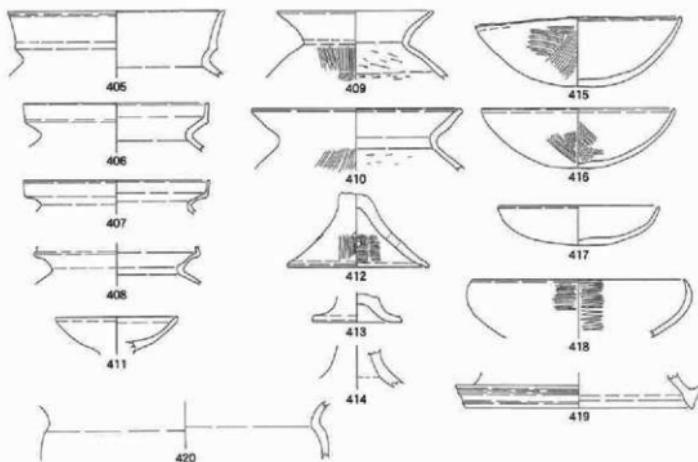
は笠削り、外面は刷け目が見られる。411、412、414は高坏である。) 3点とも赤色顔料の塗布痕が残る。413は台付きの壺または鉢の台である。415~418は鉢である。418は内外面に笠磨きを施しているのみであるが、他の3点は刷け目調整を加えた後、赤色顔料を塗布している。419は高坏または器台の基底部である。弥生時代後期後葉と思われる。

竪穴住居6からの出土遺物は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭までの時期のものである。従ってこの竪穴住居は弥生時代後期後葉に造られ、建て替えを行って古墳時代初頭まで使われたと考える。

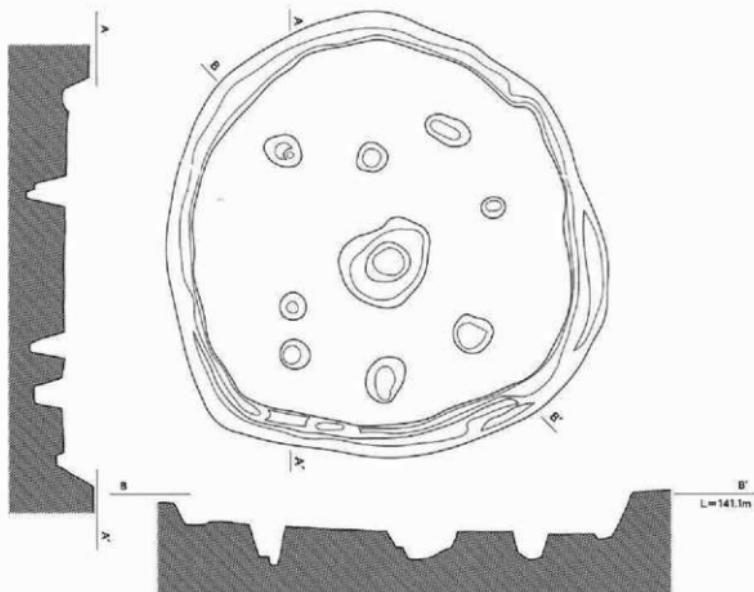
竪穴住居7 (第135図・136図)



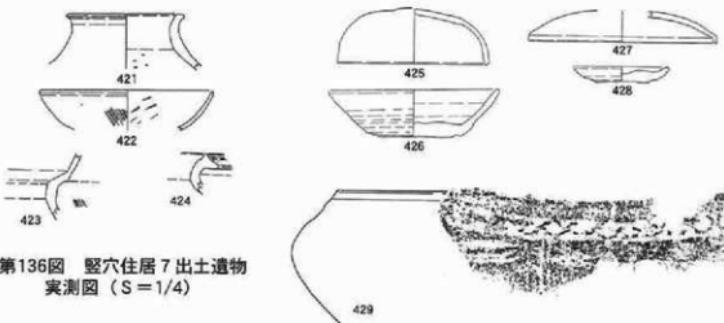
第133図 竪穴住居6 平・断面図 (S=1/60)



第134図 積穴住居6出土遺物実測図 ( $S = 1/4$ )



第135図 積穴住居7平・断面図 ( $S = 1/60$ )



第136図 穫穴住居7出土遺物  
実測図 (S=1/4)

第137図 9区出土遺物実測図 (S=1/2・1/4)

調査区の中央付近から検出された。平面プランは円形を呈しており、直径は5.55mを測る。壁体溝は部分的に二重になっている個所があり、建て替えが行われたことが考えられる。しかし床面の規模にはほとんど変化はない。柱構造は4本柱で、検出されたのは8本であるが、建て替え前と建て替え後のものと思われ、2組の柱穴は約45度の角度を持って掘り変えている。中心部より僅か東に寄った位置からは115cm×97cmの大きさの中央穴が検出された。中央穴は掘り変えた痕跡ではなく、中には灰泥じりの黒色土が入っていた。従って建て替えを行って使用した期間は余り長期に亘るものではないように思う。壁体溝は断面U字型を呈し、幅20~45cm、深さ3~10cmを測る。壁体の高さは残存の良いところで45cmを測る。

竪穴住居7の覆土から出土した土器は遺物袋に1杯程度と少なく、しかも小片が多く図示できたのは4点だけである。421は短頸壺と思われるが、弥生土器か土師器は不明である。422は鉢である。内面は笠削り、外面は刷目を施しており、両面には赤色顔料の塗布痕が残る。423、424は供に壺形土器の口縁及び頸部である。424は弥生時代後期前葉の特徴を持つ。他は弥生時代末前後の範疇と思われる。したがってこの竪穴住居の時期はやや古い土器が混じるもの弥生時代末葉の頃と考える。

#### 出土遺物（第137図）

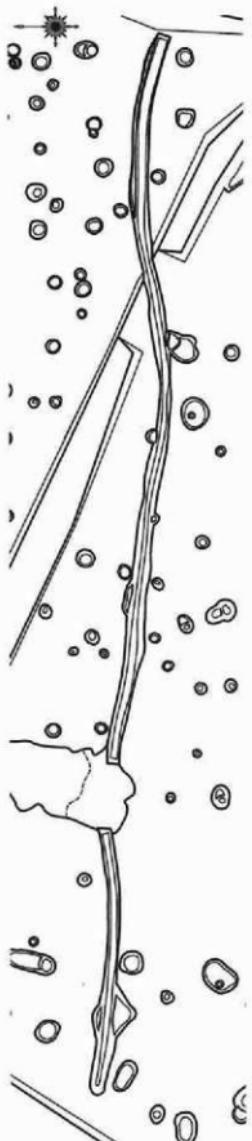
9区から出土した土器はコンテナに5箱分出土した。大部分は須恵器と土師器で、2件の竪穴住居に伴う時期のものは少ない。図示したのは遺構内から出土したものである。

425はP-1から出土した須恵器の杯蓋である。6世紀末葉と思われる。426はP-18から出土した土師器碗で、底部は糸引き痕が、体部には水引技法の痕跡が残る。427はP-33から出土した須恵器の杯蓋である。外面上部には笠削り痕が残る物で7世紀末葉と思われる。428はP-38から出土した土師器皿である。底部には糸引き紺が残り、426と同時期の12世紀ごろと思われる。

#### (9) 10区（第132図）

10区は調査区域の北西端に位置し、9区の北に隣接する調査区である。古市場遺跡の所在する台地上の先端部に当たるため、遺構の検出面である、基盤層は緩やかに北に向かって傾斜する。検出した遺構は弥生時代の溝、土壙、鍛冶炉と多数のビットである。遺構は調査区全体から満遍なく散らばった状態で検出された。

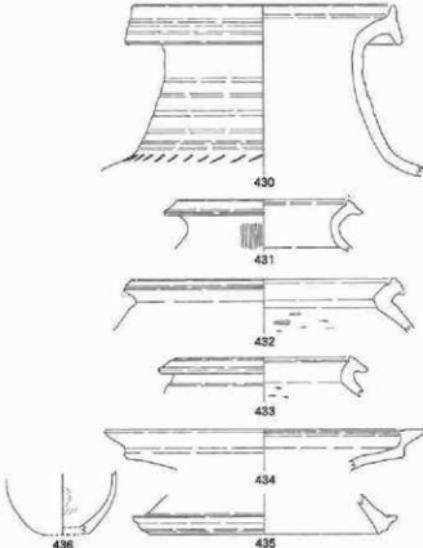
#### 溝（第138図・139図）



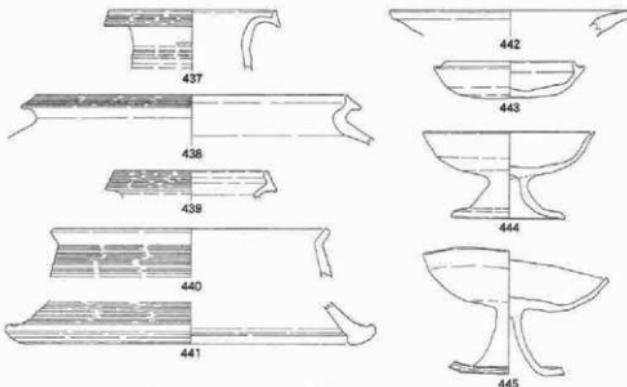
第138図 溝平面図 ( $S = 1/130$ )

調査区の中央部から東西方方向に傾斜に対して直行する方向に掘り込まれた状態で検出された。西端は溝の始まりで、東端は調査区域外となるためここで切れている。検出した溝は長さ28.5mを測り、僅かに蛇行している。途中に後世の鍛冶炉により切られている。底部の標高は西端の始まり部分で140.218m、中央部は139.936m、東端は139.93mで、西に向かって低くなっている。溝は断面「U」字形を呈し、幅は30~55cm、深さは26.5~40.5cmを測る。中に入っていた埋土は茶褐色土で、中から弥生土器が出土した。

溝の中から出土した土器は図示した7点である。430、431は壺形土器である。430の長頸壺の口縁端部は上下に肥厚し、頸部には弱い沈線が施され、胴部との境には笠による斜め沈線が巡る。431は外面に刷け目を施す。432、433は壺形土器である。口縁端部は上下に肥厚し、内面は肩まで笠削りが施される。434、435は高杯である。2点は胎土、色調共に類似しており大きさの点から考えても同一固体になる可能性は高い。434の端部は水平に肥厚し、上面には6条の沈線が施される。436は手づくね土器である。溝出土の土器はその特徴から弥生時代後期前半の時期と思われる。従って、溝の時期は弥生時代



第139図 溝出土遺物実測図 ( $S = 1/4$ )



第140図 10区出土遺物実測図 (S=1/4)

後期前半代に使用されていたと考える。同時期の土器は10区以外には余り出土していない。後述する、土壙2、土壙4、P-69からの出土土器がそれである。

#### 出土遺物（第140図）

10区から出土した土器はコンテナに4箱分あり、その内の1箱は鉄滓である。図示した土器は遺構から出土したものである。437、438は土壙2から出土した弥生土器の壺形土器と甕形土器である。口縁端部は上下に肥厚し外面には細い沈線が巡る。その特徴から弥生時代後期前半と考える。439、440は土壙4から出土した弥生土器の甕形土器である。440は「く」の字状の口縁を持ち、体部上方には細い沈溝が8条以上巡るもので、これ1点だけ弥生時代中期に属する。441はP-69から出土した器台である。442はP-22から出土した土師器である。443はP-56から出土した須恵器坏である。444、445は土壙5から出土した須恵器の高坏である。443～445の須恵器3点は6世紀末葉の時期と思われる。

#### （10）古市場遺跡出土石器について

古市場遺跡からは、合計4点の石器が出土している。石器の種類は、石鎌、スクレイバー、原石である。以下各石器について報告する。

1・2の石鎌は基部が凹基式で（註1）、1は基部の一部が欠損しているが、丁重な加工が施されている。2は先端部を両側刃からやや尖らし気味に調整加工している。

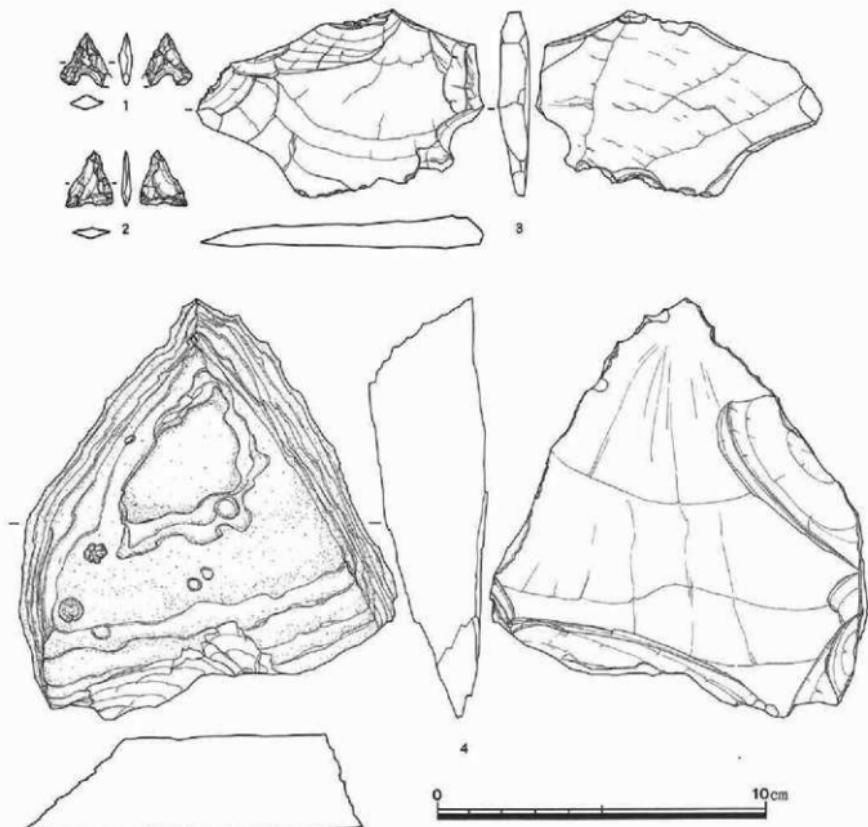
3は横長の剥片を素材とし、下端部にやや鋭な刀部が観察されることから一応スクレイバーとしておく。

4は片面に自然面を残した大型板状剥片である。もう一方の面は、節理面で剥がれ平坦面をなしている。

スクレイバー以外の所属時期は、他の出土土器などから縄文時代後期～晩期と考えられる。

#### 註)

（1）石鎌の分類は、松本武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性-とくに打製石鎌について-」『考古学研究』第35巻第4号1989年に従った。



第141図 古市場出土石器実測図

表3 古市場遺跡出土石器観察表

番号	地区	遺跡・層序	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
図141-1			石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.4	0.6	基端欠損
図141-2	6区	焼土	石鏃	サヌカイト	1.7	1.4	0.3	0.5	
図141-3	4区		スクレイパー	サヌカイト	8.8	5.3	1.0	48.5	
図141-4	7区		原石	サヌカイト	12.4	11.6	3.3	475.0	

### 第3節 まとめ

古市場遺跡の所在する台地上の南側丘陵の裾部には瑞祥寺古墳群の名で知られる、6世紀後半代の古墳が数基所在し、さらに丘陵上には栗原城または水船城の名で知られる、中世の山城が所在することからそれらに関連した時期の遺跡として周知されていた。今回の発掘調査では、主に3つの時期に分かれて遺構が検出された。古市場遺跡は島の奥川を挟んで東西2つの台地上に分かれているが、どちらの調査区からも遺構が検出された。

今回の発掘調査の大きな成果の一つは縄文時代後期から晩期にかけての土器及び石器が出土したことである。周辺の縄文時代の遺跡としては備中川を挟んで対岸に縄文時代晩期の宮の前遺跡が知られていたが、今回の発掘調査では備中川右岸にもこの時期の遺跡が存在することが判明した。しかし、出土したのは遺物だけで、しかも点数も15点余りで多くはない。また、それに伴う時期の遺構を検出することはできなかったものの、遺物の出土範囲は5区から9区までの広範囲に亘っていた。

次に弥生時代から古墳時代に至る時期の集落が発見されたことである。10区の溝や土壙は弥生時代後期前半であり、島の奥川を挟んで4区から5区、6区、8区、9区から検出された竪穴住居は弥生時代後期後半から古墳時代に至るものである。竪穴住居は全部で11軒を検出したが建て替えを含めると15軒以上になる。竪穴住居の時期は弥生時代後期から古墳時代後期にいたる長期に亘っているが、検出した内で最も多く竪穴住居が見つかったのは弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての時期である。この時期の竪穴住居は5区の竪穴住居3が隅丸方形プランを呈するが、他は円形プランを呈する。

11軒の竪穴住居は同時に存在したのではなく時間差を持って存在していた。このことについて、出土遺物・平面プラン・柱構造などから建築時期の変遷を考えてみたい。建築時期は大まかに分けて5時期に分かれており、5つの時期はそれぞれ竪穴住居2・10・11→竪穴住居5・6・7・8→竪穴住居3→竪穴住居9→竪穴住居1の順に建てられたと考える。古市場遺跡で最初に建てられたのは竪穴住居2・4・10・11の4軒で平面プランは円形を呈し、直径は4.7m~9.34mを測る。柱構造は6~10本柱で、中央に炉を持つ。出土土器は弥生時代後期後葉である。2期目の時期に建てられたのは竪穴住居5・6・7・8の4軒である。平面プランはまだ円形を呈しており、直径は4.6m~7.8mとやや小型化し、柱構造も4本柱になる。中央には炉を持つ。出土遺物の中には土師器も混入しており、弥生時代末~古墳時代初頭の時期である。3期目の時期に建てられたのは竪穴住居3の1軒のみである。平面プランは隅丸方形に変化するが、柱構造は4本柱のままで、中央に炉を持つ。出土遺物は弥生時代末~古墳時代初頭の土師器で2期と3期の間に余り時間差が認められない。円形プランのものと余り変化はない。従って、出土遺物から見た時間差は円形と隅丸方形の間にはほとんど見られない。4期目の時期に建てられたのは竪穴住居9の1軒である。平面プランは方形となり、柱構造は4本柱であるが、まだ中央に炉を持つ。供伴の土器は不明である。最後の5期目に建てられたのは竪穴住居1である。平面プランは同じく方形で柱構造は4本柱であるが、炉ではなく壁際に竈が設置されている。出土土器の時期は6世紀後半である。

のことから古市場遺跡では竪穴住居の変遷は円形プラン・柱構造6本柱以上→円形プラン・柱構造4本柱→隅丸方形プラン→方形プラン・炉→方形プラン・竈というパターンで捉えることができる

であろう。ただし、円形プランから隅丸方形プランへの移行は余り時間差がなく行われているようであるが、方形プランへの移行については、ある程度の時間的隔たりがあるよう見える。

古墳時代の遺構は竪穴住居以外には土壙墓が出土している。土壙墓は7区、8区、10区から出土しており、出土土器の時期から6世紀後半～末葉と考えられ、竪穴住居1と同じ時期である。この時期は先述した瑞祥寺古墳群が古市場遺跡の南側丘陵に所在しており、古墳の被葬者の生活基盤に関わる集落であると考えられる。しかし、今回検出した竪穴住居は1軒のみである。調査区域外にも所在する可能性が高い。

次の時期は古代から中世にかけてである。この時期の遺構は3区から井戸が検出されているが、井戸からの供伴土器は8世紀～13世紀まで幅がある。ほとんどの調査区で検出されたビットはこの時期のものであり、出土遺物の量はこの時期のものが大半を占める。この時期は古市場遺跡南側の丘陵上に所在する中世の山城の時期と重なっている。山城は栗原城または水船城とも呼ばれており、標高170m付近の尾根上に居館が所在し、標高280mの山頂には主郭が所在しそこから下方に郭が連なっている。城主は栗原惣兵衛と伝えられており、美作古城史によれば美作菅家七党と共に元弘の乱(1331)で後醍醐帝の御召に応じて船上山に駆けつけた南三郷の士中に栗原氏の名がある。古市場遺跡出土の遺構は栗原城との関連を明確にするものは少ないが、表土層より青磁や白磁などの輸入磁器や宋銭などが出土しており、一般の集落から出土する遺物ではないものである。このことから何らかの関連を伺うことができる。

#### 第6章参考文献

- (1)「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12 岡山県教育委員会 昭和51年
- (2)岡本寛久「縄文時代」「吉備の考古学」 福武書店 1987年
- (3)江見正己「弥生土器」「吉備の考古学」 福武書店 1987年
- (4)「旦山遺跡、惣台遺跡、野辺張遺跡、先旦山遺跡、旦山古墳群、奥田古墳、水神ヶ峯遺跡」  
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136 岡山県教育委員会 1999年
- (5)伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館 昭和62年
- (6)寺反五夫『美作古城史』 昭和28年
- (7)『太平記』

表4 出土遺物観察表

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径			
1	建物6 P-8	須恵器	壺	14.1	4.4	9.7	不 良	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/3残存
2	Dブロック溝 セクション3	弥生土器	甕	19.8	(5.4)		良 好	良好 1mm以下の砂粒	口縁部約1/3周残存
3	Dブロック溝 セクション4	弥生土器	甕	15.7	(3.4)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	口縁のみ約1/7周残存
4	Dブロック溝 セクション4	弥生土器	高壺		(5.1)	16.1	良 好	良好 1mm以下の砂粒	脚部約1/6周残存
5	Cブロック溝	弥生土器	甕	(14.0)	(6.0)		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	口縁の一部残存
6	Cブロック溝	弥生土器	甕	(17.2)	(3.6)		良 好	やや不良 1~2mm大の砂粒多し	口縁の一部残存
7	Hブロック溝	須恵器	壺		(2.7)	6.2	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/2残存
8	Hブロック溝	瓦	軒平瓦				良 好		瓦当部分1/2残存
9	Cブロック 土坑17	弥生土器	甕						頭部約1/3残存
10	Cブロック 土坑21	弥生土器		(16~ 16.5)	(4.9)		良 好	良好 1mm大の砂粒	
11	Cブロック 土坑21	弥生土器	甕		(6.8)	12.0	良 好	普通 1~1.5mm大の砂粒多い	2/3残存
12	Cブロック 土坑22	弥生土器	甕	(14.2)	(5.0)		良 好	良好 0.5mm以下	口縁の一部残存
13	Bブロック 土坑33	弥生土器	甕		(8.5)	5.8	良 好	良好 0.5mm以下	底部中心に約1/3残存
14	Bブロック 土坑60	弥生土器			(15.2)	7.2	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	底部中心に約1/3周残存
15	Cブロック 埋込	弥生土器	甕	15.2	(22)	5.1	良 好	良好 0.5mm大の砂粒	約6割残存するが頭面上の復元
16	F-18 土被	弥生土器	甕	14.1	(18)		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	上半部約1/2周残存
17	Cブロック 埋込	弥生土器	甕	31.1	(18.8)		良 好	やや不良 1~2mm大の砂粒多い	約1/3残存
18	Cブロック 埋込	弥生土器	甕	15.0	(6.3)		良 好	良好 1mm大の砂	口縁部約1/3周残存
19	Cブロック (後凹面状造溝)	須恵器	甕		(1.5)		やや不良	良好 所々1mm大の砂粒	底部が約1/5周残存
20	Cブロック 埋込	弥生土器	甕		(7.0)	5.2	良 好	良好 0.5mm以下の砂	底部を中心約1/5残存
21	Aブロック溝1	須恵器	壺		(3.3)	7.1	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/5周残存
22	Aブロック溝1	須恵器	壺	7.5	1.3	4.5	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/4周残存
23	Aブロック P-1	須恵器	壺	7.9	1.1	4.7	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約60%残存
24	Aブロック P-2	須恵器	壺	15.3	5.2	6.7	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/4残存
25	6区上土	瓦	軒丸				不 良		瓦当のみ1/3残存
26	6区上土	瓦	軒丸				不 良		瓦当のみ1/4残存
27	西NO.3トレ	須恵器	甕	17.3	(2.5)		良 好	良好	約1/6周残存
28	都建物4號張	須恵器	甕	22	(4.6)		良 好	良好	約1/3周残存
29	都建物5號張	須恵器	甕		(8.7)	32.8	良 好	良好	外面約1/5周残存
30	都塙壁 トレント2	須恵器	甕	14.9	(3)		良 好	普通	約1/3周残存
31	都塙壁 トレント2	須恵器	甕	上台径 12.8			良 好	不良 1mmの小石を多く含む	約1/3周残存
32	鹿田 NO.1トレ	須恵器	甕		(2.7)		良 好	良好	約1/5周残存
33	IB P-11	須恵器	壺	14.2	(3)		良 好	良好 0.5mm以下砂粒	約1/5周残存

番号	造構	器種	器形	法量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径			
34	1B P.3	須恵器	环		(1.5)	11.1	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	底部約1/7周残存
35	2B P.27	須恵器	环	11.4	(3)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/7周残存
36	2B P.22	土師器	桶	11	(2.8)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/4周残存
37	1B P.3	土師器	甕	20.1	(4.7)		良 好	0.5~1mm以下の砂粒	口縁部約1/6周残存
38	2B P.27	土師器	甕	(28.6)	(6.6)		良 好	やや不良 1~2mm以下の砂粒多い	口縁部の一部約1/6周残存
39	1B P.5	須恵器	环	13.5	3.5	9.9	不 良	良好 0.5mm以下	約1/4周残存
40	1B P.5	須恵器	环		(1.5)	8.3	良 好	良好 0.5mm以下	底部約1/3残存
41	1B P.11	須恵器	环		(1.8)	9.3	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/7周残存
42	1B P.18	土師器	皿		(1)	6.6	良 好	良好 0.5mm以下	約1/4周残存
43	1B P.24	土師器	支脚		(5.4)	15.6	良 好	不良 2mm以上の砂粒多い	約1/4周残存
44	2B P.3	須恵器	桶		(2.6)	(10.1)			
45	2B P.17	須恵器	桶	14.0	3.7	6.4	不 良	良好 0.5mm以下	約2/3周残存
46	1B P.25	土師器	桶	14.2	(4.0)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	約1/6周残存
47	1B P.25	土師器	桶		(2.0)	5.4	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/3周残存
48	1B P.25	白磁器	皿			3.5			約1/2周残存
49	1B P.25	土師器	皿	8.0	1.5	4.6	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/2周残存
50	1B P.25	土師器	皿		(1.1)	5.9	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	底部のみ残存
51	1B P.27	土師器	皿	8.9	1.0	5.1	良 好	良好 砂粒少	約1/3周残存
52	1B P.32	土師器	皿	7.3	1.2	4.1	良 好	良好 0.1mm以下の砂粒	約1/4周残存
53	1B P.35	土師器	皿	7.8	1	6.2	良 好	良好 砂粒わずか	約1/6周残存
54	1B P.36	土師器	桶	14.3	(2.8)		良 好	良好 砂粒少	約1/3周残存
55	1B P.36	土師器	皿	8.1	1.0	5.1	良 好	良好 砂粒少	約1/3周残存
56	1B P.41	土師器	皿	8.5	1.5	5.9	良 好	良好 砂粒少	約1/4周残存
57	2B P.44	土師器	环		(1.0)	9.2	良 好	良好 0.5mm以下	
58	2B P.19	須恵器	短瓶蓋	20.2	(9.8)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/4周残存
59	2B P.8	土師器	桶	12.9	3.2	7.2	良 好	良好 0.5mm以下	約1/3周残存
60	1B 土瓶2	土師器	皿	7.8	1.9	4.1	良 好	良好 0.1mm以下の砂粒	約9周残
61	1B 土瓶2	土師器	皿	7.3	1.7	3.7	良 好	良好 1mm以下の砂粒	約2/3周残存
62	1B 土瓶2	青磁器			(1.9)	7.3	良 好	良好	底部の一部残
63	1B 土瓶2	須恵器	甕		(3.5)	12.5	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	底部の一部残
64	2B P.61	須恵器	环 盖	13.8	(3.9)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	約1/5周残存
65	2B P.52	土師器	皿	8.1	2.7	5.5	かなり良好	良好 0.5mm以下	約2/3周残存
66	1B P.5	須恵器	环	11.3	(2.3)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/5周残存
67	1B P.14	土師器	皿		(1.2)	4.2	良 好	良好 0.5mm以下	

番号	造構	器種	器形	法量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	最高	底径			
68	1B P-20	土師器	椭	17.3	(2.2)	4.2	良 好	良好 砂粒わずか	約1/9周残存
69	1B P-21	土師器	皿	7.6	1.5	4.2	かなり良好	良好 0.5mm以下の砂粒	約2/3残存
70	1B P-30	土師器	盤	29.2	(28.7)		良 好	不良 1~2mm大の砂粒多い	破片も含めて 約1/3残存
71	砸込1	弥生土器	甕	21.3	(5.5)		良 好	良好 1mm大の砂粒	約1/8周残存
72	砸込1	弥生土器	甕	19.8	(5.0)		良 好	良好 1mm大の砂粒含む	約1/10周残存
73	砸込1	弥生土器	壺	19.6	(4.0)		良 好	良好 0.5mm大の砂粒多い	口縁部約1/6周残存
74	砸込1	弥生土器	壺	11.0	(4.8)		良 好	良好 1mm以下の砂粒	約1/6周残存
75	砸込1	土師器	甕	12.2	(4.8)		良 好	良好 0.5mm大の砂粒や多い	
76	砸込1	弥生土器		13.9	(3.5)		良 好	良好 1mm大の砂粒を含む	約1/6周残存
77	砸込1	弥生土器	台付鉢		(2.7)	(8.6)	良 好	普通 1mm以下の砂粒多い	
78	砸込1	弥生土器	類形副合	17.4	(5.0)		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	約1/4周残存
79	P-11	磁器			(0.8)	6.0	良 好	良好	底部約1/3残
80	1B P-7	須恵器	皿		(7.8)		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒を含む	下半分は完存
81	砸込1	土師器	円柱皿	7.0	4.3		良 好	不良 1~2mm大の砂粒多い	一部欠けているのみ
82	砸込1	土師器	丁字皿	6.5	3.8~4.3		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	口縁の一部欠
83	P-29	須恵器	皿	10.3	2.5		やや不良 (少し軟)	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/4残存
84	鉄滓瀬	須恵器	高环		1.1	9.8	良 好	良好 砂粒少	脚部約1/4周残存
85	鉄滓瀬	須恵器	高环		1.0	7.2	良 好	良好 砂粒少	脚部約1/3残
86	P-24	土師器	甕	20.0	(8.0)		良 好	良好 1mm大の砂粒多い	約30%残
87	P-41	弥生土器	壺	13.8	(6.2)		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒を含む	約1/4周残存
88	P-43	土師器	甕	18.3	(3.3)		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒を含む	口縁約1/5周残存
89	P-46	磁器	おろし皿	19.5	3.9	12.5	良 好	良好	約1/4残
90	P-48	瓦質土器	指薪	23.0	10.5	11.9			約1/3残存
91	土器瀬	須恵器	蝶		(8.6)		良 好	良好 砂粒少	瓶部及び副部の約1/2残存
92	土器瀬	須恵器	小 増	7.8	(4.0)				約1/6残
93	砸込②	土師器	皿	7.5	1.4	5.3	良 好	良好 砂粒少い	約80%残存
94	砸込②	土師器	皿	7.5	1.4	5.0	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	約3/4残存
95	砸込②	土師器	皿	7.0	1.3	4.4	良 好	良好 砂粒少	約1/2残存
96	1B P-3	須恵器	椭	13.1	3.6	7.2	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/3残
97	1B P-4	土師器	椭	12.1	2.8	7.1	やや不良	良好 0.5~1mm大の砂粒	約2/3残存
98	1B P-4	土師器	皿		(1.0)	7.0	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	
99	1B P-9	土師器	碗	12.4	2.8	6.6	良 好	良好 1mm以下の砂粒を含む	約1/3残存
100	1B P-10	須恵器	环 瓦	17.1	(2.4)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/6残存
101	1B P-12	須恵器	环		(2.0)	7.8	やや不良	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/2残存

番号	遺構	器種	器形	法規(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径			
102	1B P-13	土師器	皿	8.7	1.3	5.8			約1/5残存
103	1B P-13	土師器	皿	7.6	1.4	5.6			約1/4残存
104	2B P-3	土師器	皿	8.4	1.8	5.3	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	約2/3残存
105	2B P-3	土師器	皿	8.3	1.7	5.5	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	一部欠
106	2B P-3	土師器	碗	13.8	3.5	6.5	良 好	良好0.5mm以下の砂粒 所々に2mmの大い小石有	約1/2残
107	2B P-3	白磁器	壺			7.3	良 好	良好	頭部及び胴部の一部残
108	4B P-4	須恵器	环	(2.0)	10.5		良 (少し軟)	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/7残存
109	4B P-4	土師器	壺	(28.9)	(6.8)		良 好	やや不良 0.5mm以下の砂粒多い	口縁の一部残
110	4B P-4	土師器	甕	(18.3)	(4.0)		良 好	やや不良 1~2mmの大い砂粒多く含む	口縁の一部残
111	4B P-7	須恵器	壺	12.2	(5.0)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/7残存
112	4B P-10	須恵器	壺	13.0	(4.0)		良 好	良好 砂粒少	約1/7残存
113	4B P-15	須恵器	壺		(8.0)				頭部約1/5層残存
114	4B P-17	白磁器	壺	10.2	(1.5)				口縁のみ約2/3層残
115	4B P-24	須恵器	环	14.3	3.7	10.6	やや不良 (軟質)	良好 0.5mm以下の砂粒少	約1/3残
116	4B P-24	須恵器	环		(4.3)	13.7	良 好	0.5mm以下の砂粒	
117	4B P-24	須恵器	壺		(2.7)				頭部の一部残
118	4B P-25	須恵器	环		(1.4)	10.0	良 好	やや不良 0.5mm以下の砂粒	都底約1/5層残存
119	4B P-26	須恵器	环	12.6	3.5	8.9	良 (少し軟)	良好 所々に1~2mmの大い砂粒含む	約1/3残存
120	4B P-26	須恵器	环	11.8	3.6	8.9	良 (少し軟)	良好 1~2mmの大い砂粒所々に見られる	約1/2残
121	4B P-26	須恵器	盤	14.4	1.9	9.0	やや不良 (軟)	良好 砂粒少	約90%残存
122	4B P-26	須恵器	环	14.6	(3.7)		やや不良 (軟)	良好 砂粒少	約1/7残存
123	4B P-30	須恵器	蓋				良 好	良好 砂粒少	つまみ付近の一部残
124	4B 堆塚(2)	白磁器	碗	11.7	(3.7)	(6.7)			約1/5残存
125	5B P-6	土師器	鍋	26.3	(4.8)		良 好	良好 0.5mm以下	約1/10層残存
126	5B P-10	土師器	甕	18.8	(6.4)		良 好	良好 1~2mmの大い砂粒や多い	口縁の一部残
127	6B P-23	土師器	碗		(2.5)	8.3	やや不良 (軟)	良好 砂少	1/6層残
128	6B P-36	須恵器	环	11.5	3.4	9.3	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒少	約1/5残存
129	6B P-48	須恵器	环 蓋	21.0	(3.2)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	約1/6残存
130	6B P-48	須恵器	环	12.4	4.2	8.7	良 好	良好 0.5mm以下	
131	6B 土器1	須恵器	皿		(1.0)	3.8	良 好	良好 0.5mm以下の砂粒	
132	5B P-1	陶生土器	壺		(3.2)	8.8	良 好	良好 0.5mmの大い砂粒	底部極一部残
133	1B 燒土周辺	須恵器	小 盤		(5.6)		良 好	良好 1mm以下の砂粒を含む	頭部のみ残
134	1B 燒土周辺	須恵器	壺		(2.7)	7.0	良 好 (堅牢)	良好 0.5~1mmの砂粒	底部のみ残
135	1B 燒土周辺	須恵器	高 壺	15.4	(4.9)		やや不良 (軟質)	良好 0.5~1mmの大い砂粒を含む	頭部のみ約5%残

番号	造構	器種	器形	法量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径			
136	1B 燒土周辺	須恵器	高环	11.9	(6.5)		不 良 (軟質)	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	環部約1/3残存
137	1B 燒土周辺	須恵器	高环		(6.3)	9.0	良 好	良好 砂粒少	環部のみ80%残
138	1B 燒土周辺	須恵器	高环		(6.0)	8.6	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒を含む	環部を中心に約40%残
139	1B 燒土周辺	須恵器	高环		(3.9)	8.2	良 好	砂粒少	環部のみ約1/4残
140	1B 燒土	土師器	甕	25.2	25.0		良 好	普通 0.5~2mm大の砂粒を含む	約80%残存
141	1B 燒土周辺	土師器	甕	20.6	(9.5)		良 好	普通 1~2mm大の砂粒を含む	かなりの破片があるが一部しか復元できず
142	1B 燒土周辺	土師器	甕	22.3	(7.6)		良 好	やや不良 1~2mm大の砂粒を多く含む	
143	1B 燒土周辺	土師器	甕	17.8	11.0				底部のみ一部残存
144	1B 燒土周辺	土師器		21.5	14.5	7.5	良 好	良好 1mm以下の砂粒を含む	約9割残
145	1B P-1	土師器	皿	7.8	1.6	4.8	良 好	良好 1mm以下の砂粒含む	約2/3残
146	1B P-1	須恵器	高环				良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	底部のみ2/3残
147	1B P-12	須恵器	环	10.2	(3.2)		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	約1/5残存
148	1B P-14	須恵器	环	15.0	(2.5)		良 好	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	約1/10残存
149	1B P-22	青磁器	甕	13.0	(4.5)				
150	1B P-24	須恵器	环		(1.2)	8.3	良 好	良好 砂粒少	
151	1B P-38	土師器	碗	12.0	3.2	5.6	良 好	良好 所々に1~2mm大の砂粒含む	ほぼ完存
152	1B P-8	土師器	甕	31.0	(3.5)		良 好	良好 1mm以下の砂粒を含む	口縁部1/9回残存
153	1B P-15	土師器	甕	21.8	(3.0)		良 好	やや不良 1~2mm大の砂粒が多い	口縁の一部残
154	1B P-15	須恵器	环		(0.8)	11.5			底部のみ約1/3残存
155	1B 土被2	須恵器	甕	29.9	(7.0)		良 好	良好 砂粒少	約1/7回残存
156	1B 土被2	石	石繩	25.8	(3.4)				
157	1B 土被3	須恵器	环	12.5	3.5	8.5	良 好	良好 砂粒少	約1/6残存
158	1B 土被4	須恵器	环	14.3	(4.0)		良 好	良好 砂粒少	約1/10回残存
159	1B 土被2	土師器	皿	7.8	1.3	5.4			
160	1B 土被2	土師器	皿	7.8	1.5	5.0	良 好	良好 砂粒少	約2/3残
161	1B 土被2	土師器	皿	8.3	1.2	5.5			
162	1B 土被2	土師器	皿	5.9	1.5	4.8	良 好	良好 砂粒少	
163	1B 土被2	土師器	皿		(0.9)	4.6	良 好	良好 砂粒少	底部のみ3/4残
164	1B 土被2	青磁器	甕	10.7	(5.3)				口縁約1/4回残存
165	1B 溝	土師器	皿		(1.5)	6.0			
166	1B 石繩	土師器	鍋	31.7	(7.5)				約1/6回残存
167	1B P-38	土師器	土繩	5.3	1.5				ほぼ完存
168	2B P-1	土師器	皿		(1.5)	5.8	良 好	良好 砂粒少	約1/2残
169	2B P-1	土師器	皿	7.7	1.4	6.4	良 好	良好 砂粒少	

番号	造構	器種	器形	法量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径			
170	2B P-2	土師器	皿		(1.7)	6.1	良 好	良好 砂粒少	約2/3残
171	2B P-9	土師器	皿	7.9	17~22	5.3	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	ほぼ完存
172	2B P-9	土師器	碗	11.0	4.1	4.9	良 好	良好 砂粒少	90%残
173	2B P-12	土師器	皿	8.7	1.9	6.2		良好 砂粒少	約1/5残
174	2B P-10	土師器	皿	8.0	1.7	5.2	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	完存
175	2B P-10南側	土師器	碗	12.1	(3.3)	6.2	良 好	良好 砂粒少	約1/4残
176	2B P-10南側	土師器	碗	11.1	4.8	6.9	良 好	良好 砂粒少	約1/5残
177	2B P-10南側	土師器	碗	10.9	3.5	5.8	良 好	良好 砂粒少	
178	2B P-10南側	土師器	碗	13.4	4.1	6.5	良 好	良好 砂粒少	約1/4残
179	2B P-13	土師器	碗	12.6	2.7	6.1	良 好	良好 砂粒少	約1/6残存
180	2B P-4	青磁器	碗	14.3	(4.0)				約1/10残
181	2B 溝	須恵器	碗		(1.3)	5.5	良 好	良好	底部のみ残
182	2B 溝	土師器	皿	8.0	1.8	5.1	良 好	良好 1mm大の砂粒含む	約1/3残
183	2B 溝	土師器	皿	7.6	1.7	6.1	良 好	良好 砂粒少	約1/3残
184	2B 溝	土師器	皿		(1.4)	6.1	良 好	良好 砂粒少	底部のみ残
185	2B 溝	土師器	碗	11.9	4.2	4.2	良 好	良好 砂粒少	約1/2残
186	2B 溝	土師器	碗	11.5	3.5	5.8	良 好	良好 1mm大の砂粒含む	約40%残存
187	2B 溝	土師器	碗		(1.9)	6.5	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	約1/4残
188	2B 溝	須恵器	盤鉢	28.4	(8.5)		良 好	良好	約1/5周残
189	2B 溝	須恵器	盤鉢	28.9	(6.1)		不 良 (軟質)	良好 砂粒少い	
190	5B 壇込①	土師器	皿	7.4	1.4	5.4	良 好	良好 砂粒少	ほぼ完存
191	5B 壇込①	土師器	皿	7.4~7.9	1.1~1.5	5.8	良 好	良好 所々に1.5mm大の砂を含む	約90%残
192	5B 壇込①	土師器	皿	7.6	1.7	5.1	良 好	良好 砂粒少	約60%残存
193	5B 壇込①	土師器	皿	7.2	1.5	5.0	良 好	良好 0.5mm大の砂粒を含む	約70%残
194	5B 壇込①	土師器	皿	8.3	1.5	5.3	良 好	良好 砂粒少	約80%残
195	5B 壇込①	土師器	皿	7.3	1.4	5.3	良 好	良好 砂粒少	約60%残
196	5B 壇込①	土師器	皿	7.0	1.4	5.0	良 好 (硬質)	良好 砂粒少	約80%残
197	5B 壇込①	土師器	皿		(1.5)	6.0	良 好	良好 1mm大の砂粒含む	約60%残
198	5B 壇込①	土師器	皿	7.5	1.5	4.8	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	約40%残
199	5B 壇込①	土師器	皿	7.0	1.2~1.5	5.0	良 好	良好 砂粒少	約50%残
200	5B 壇込①	土師器	碗		(2.2)	5.9	良 好	良好 砂粒少	底部を中心40%残
201	5B 壇込①	土師器	碗	10.9	3.0	4.7			約1/3残
202	5B 壇込①	土師器	碗	13.3	2.9	6.1	良 好	良好 砂粒少	約1/4残
203	5B 壇込①	土師器	碗	11.9	(3.5)		良 好	良好 砂粒少	約1/3周残

番号	造構	器種	器形	法量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	高さ	底径			
204	SB 埴込①	土師器	桶		(3.7)	5.2	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	約1/3残
205	SB 埴込①	雅前燒	桶 脚	25.0	(3.9)		良 好	良好 砂粒少	一部残
206	SB 埴込②	土師器	皿	7.4	13~19	5.0	良 好	良好 0.5~1mmの砂粒を含む	約1/2残
207	SB 埴込③	土師器	皿	8.3	1.9	5.9	良 好	良好 砂粒少	約1/2残
208	SB 埴込④	土師器	皿	7.6	1.6~1.9	5.3	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	約60%残
209	SB 埴込⑤	土師器	皿	8.0	1.6	5.1	良 好	良好 砂粒少	約40%残
210	SB 埴込⑥	土師器	皿	7.6	1.8	5.1	良 好	良好 砂粒少	約1/3残
211	SB 埴込⑦	土師器	皿		(1.5)	4.8	良 好	良好 砂粒少	約1/3残
212	SB P-16	土師器	桶		(2.8)	8.1	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	約1/4周残
213	SB P-22	土師器	桶		(2.0)	6.4	良 好	良好 0.5mm大の砂粒含む	約1/3残
214	SB P-22	土師器	桶		(1.9)	6.9	良 好	良好 砂粒少	
215	SB P-22	土師器	桶		(2.9)	7.9	良 好	良好 砂粒少	
216	SB P-23	軽釉陶器	碗	13.0	(3.7)		良 好	良好 砂粒少	約1/7周残存
217	SB P-26	須恵器	桶		(1.5)	6.0			
218	SB P-31	土師器	皿	7.1	1.5	5.0	良 好	良好 砂粒少	約1/3残
219	SB P-31	土師器	皿	7.3	1.5	4.6	良 好	良好 砂粒少	約1/3残
220	SB P-31	土師器	皿		(1.2)	5.7	良 好	良好 砂粒少	約1/4残
221	SB P-32	土師器	皿	9.0	2.0	7.0	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	約1/3残
222	SB P-36	土師器	皿	8.0	1.4	6.0	良 好 (硬質)	良好 砂粒少	約1/3残
223	SB P-39	土師器	皿	7.7	1.5	5.2	良 好	良好 砂粒少	約1/3残
224	SB P-39	土師器	皿		(1.4)	5.2	良 好	良好 砂粒少	底部約2/3残
225	SB P-29	須恵器	擂鉢	33.5	5.7		良 好 (やや軟)	良好 砂粒少	一部残
226	SB P-30	須恵器	片口	26.6	(9.4)				3片に別れていて約1/4残
227	SB P-39	瓦質土器	六鉢	(上端) 32.8	(7.4)		良 好	良好 砂粒少	一部残
228	SB P-1	須恵器	环	15.0	(3.2)		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒を含む	約1/3残
229	SB P-2	瓦質土器	甕	26.8	(5.6)		良 好	良好 砂粒少	一部残
230	SB P-11	土師器	甕	27.1	(6.2)				一部残
231	井戸	須恵器	环	12.8	(3.9)		良 好	良好 所々に1~2mm大の砂粒を含む	約1/6周残
232	井戸	須恵器	环		(1.5)	8.5			底部のみ1/4残
233	井戸	土師器	桶		(1.8)	8.8	良 好	良好 砂粒少	一部残
234	井戸	須恵器	甕	40.8	(11.0)		良 好	良好 砂粒少	一部残
235	溝外側埴込	須恵器	环 盖	16.6	2.1		良 好	良好 所々に1mm大の砂粒を含む	約1/5残
236	溝外側埴込	須恵器	环 盖	14.7	(3.0)		良 好	良好 所々に1~2mm大の砂粒含む	
237	北浦埴込	須恵器	环 盖	16.2	(2.2)		良 好	良好 砂粒少	

番号	道 横	器 種	器 形	法量(cm)			焼 成	胎 土	備 考
				口径	器高	底径			
238	溝外側端込	須 惠 器	环 酒	14.3	(2.8)		やや不良 (少々軟)	良好 砂粒少	約40%残
239	溝外側端込	須 惠 器	环 盖	15.0	(0.6)		良 好	良好 砂粒少	約1/3残
240	溝外側端込	須 惠 器	环	16.6	7.0	12.1	やや不良 (軟)	良好 砂粒少	約1/4残
241	溝外側端込	須 惠 器	环		(4.2)	12.8	良 好	良好 砂粒少	底部中心に約1/3残
242	溝外側端込	須 惠 器	环		(4.3)	10.8	良 好	良好 砂粒少	底部中心に約1/4残
243	溝外側端込	須 惠 器	环		(1.7)	10.0	良 好	良好 砂粒少	底部のみ1/4残
244	溝内側端込	須 惠 器	环		(1.6)	10.2	良 好	良好 砂粒少	底部一部残
245	溝外側端込	須 惠 器	蓋		(2.1)	10.2	良	良好 砂粒少	底部のみ残
246	北端端込	須 惠 器	椭	20.3	(7.0)		良	良 0.5~2mm大の砂粒を含む	約1/10周残
247	溝外側端込	須 惠 器	蓋	22.5	(8.7)		やや不良 (軟質)	良好 所々0.5~1mm大の砂粒含む	約1/7周残存
248	P-8	土 師 器	皿	8.8	1.8	5.5	良	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	ほぼ完存(一部欠)
249	P-8	土 師 器	皿	(8.3)	1.5	5.4	良	良好 砂粒少	約60%残
250	P-8	土 師 器	皿	8.7	1.8	5.1	良	良好 砂粒少	約60%残
251	P-8	土 師 器	皿	8.7	2.0	5.3	良	良好 砂粒少	80%残
252	P-8	土 師 器	椭	(15.0)	(3.2)		良 好	良好 砂粒少	40%残
253	土瓶1	須 惠 器	蓋		(3.3)	11.3	良 好	良 0.5~1mm大の砂粒や多い	底部約1/3周残
254	土瓶1	須 惠 器	蓋		(3.7)	10.7	良 好	良 0.5~1mm大の砂粒や多く含む	一部残
255	P-3	須 惠 器	蓋		(2.2)	13.8	良 (やや軟)	良好 砂粒少	
256	P-2	土 師 器	皿	7.7	1.4	4.8	良 好	良好 砂粒少	ほぼ完存
257	P-2	土 師 器	皿	8.6	1.2	6.1	良 好	良好 砂粒少	
258	P-2	土 師 器	皿		(1.8)	7.5	良 好	良 1~2mm大の砂粒を含む	約60%残
259	P-2	土 師 器	皿	12.7	(3.6)		良 好	良好 砂粒少	約1/4残
260	P-2	青 瓷 器	楕	15.9	(4.1)		良 好	良好	約1/7周残
261	豎穴住居1	須 惠 器	环	12.8	2.8		やや不良 (少々軟)	良好 0.5~1mm大の砂粒を含む	底部から口縁にかけて一部残
262	豎穴住居2 印穴	弥 生 土 器	蓋	14.2	(5.3)				口縁部約1/6周残
263	豎穴住居2 P-7	弥 生 土 器	蓋	14.7	(4.2)		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒を含む	
264	豎穴住居2 印穴	弥 生 土 器	蓋	22.1	(9.0)		良 好	普通 1~2mm大の砂粒含む	
265	豎穴住居2 印穴	弥 生 土 器	蓋	22.0	(4.7)		良 好	良 1~2mm大の砂粒を含む	
266	豎穴住居2	弥 生 土 器	蓋	16.1	(4.0)		良 好	0.5mm以下の砂粒	
267	豎穴住居2	弥 生 土 器	蓋	16.6	(7.5)		良 好	良 0.5~1mm大の砂粒や多い	
268	豎穴住居2	弥 生 土 器	蓋	19.6	(10.5)		良 好	5mm以下の大石・石英を含む	口縁は1/7程度残存
269	豎穴住居2	弥 生 土 器	蓋	17.8	(9.9)		良 好	普通 4mm以下の長石・石英含む	口縁は1/2程度残存
270	豎穴住居2	弥 生 土 器	蓋	23.8	(6.7)		良 好	3mm以下の長石・石英や含む	漸部は1/9程度残存
271	豎穴住居2	弥 生 土 器	蓋	20.2	(5.5)		良 好	1mm以下の長石・石英や含む	口縁下部は1/4程度残存

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径			
272	竪穴住居2	弔生土器	壺	16.2	(5.4)		良好	良好 2mm以下の長石・石英含む	口縁は1/6程度残存
273	竪穴住居2	弔生土器	壺	20.5	(5.1)		良好	普通 0.5~1mm大の砂粒やや多い	口縁部1/8程度残存
274	竪穴住居2	弔生土器	壺		(5.4)		良好	0.5mm大の砂粒を含む	一部残
275	竪穴住居2	弔生土器	甕	30.7	(6.6)		良好	良好 砂粒少	口縁部1/10程度残存
276	竪穴住居2	弔生土器	甕	19.2	(3.0)		良好	良好 3mm以下の長石・石英含む	口縁は1/7程度残存
277	竪穴住居2	弔生土器	甕	15.8	(4.3)		良好	良好 1mm以下の長石・石英含む	口縁は2/5程度残存
278	竪穴住居2	弔生土器	甕	7.4	(3.9)		良好	良好 0.5mm以下1mm以下の長石・石英含む	口縁は1/5程度残存
279	竪穴住居2	弔生土器	甕	13.0	(2.5)		良好	良好 0.5mm大の砂粒を含む	一部残
280	竪穴住居2	弔生土器	甕	13.0	(3.2)		良好	良好 砂粒少	一部残
281	竪穴住居2	弔生土器	甕	18.4	(6.5)		良好	普通 10mm以下の長石・石英や含む	口縁は1/5程度は残存
282	竪穴住居2	弔生土器	甕	14.4	(6.0)		良好	良好 0.5mm以下1mm以下の長石・石英含む	口縁は1/5程度残存
283	竪穴住居2	弔生土器	甕	16.9	(2.6)		良好		
284	竪穴住居2	弔生土器	甕		(2.0)	4.6	良好	良好 2mm以下の長石・石英含む	底部はほぼ完残
285	竪穴住居2	弔生土器	甕		(4.0)	7.0	良好	良好 3mm以下の長石・石英含む	底部は2/3程度残存
286	竪穴住居2	弔生土器	甕	16.0	(3.8)		良好	良好 砂粒少	口縁部1/6程度残
287	竪穴住居2	弔生土器	甕		(6.7)		良好	良好 砂粒少	一部残
288	竪穴住居2	弔生土器	甕	14.7	(2.6)		良好	0.5mm大の砂粒やや多い	一部残
289	竪穴住居2	弔生土器	小壺	11.3	(6.6)		良好	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	約1/5残
290	竪穴住居2	弔生土器	小壺	13.8	(5.6)		良好	良好 0.5~1mm大の砂粒を含む	
291	竪穴住居2	弔生土器	小壺	10.8	(3.0)		良好	良好 0.5mm大の砂粒を含む	一部残
292	竪穴住居2	弔生土器	高环		(13.7)	16.4	良好	普通 7mm以下の長石・雲母含む	底部以下は完残 环部は1/3程度残存
293	竪穴住居2	弔生土器	高环部分	21.4	(10.1)		良好	良好 3mm以下1mm以下の長石・石英・雲母や含む	环部はほぼ完残
294	竪穴住居2	弔生土器	高环部分		(4.3)	14.4	良好	良好 3mm以下の長石・石英含む	1/2程度残存
295	竪穴住居2	弔生土器	高环部分		(5.0)	14.0	良好	良好 長石・石英やや含む	1/6程度残存
296	竪穴住居2	弔生土器	高环部分	10.6	(3.1)		良好	良好 2mm以下の長石・石英やや含む	1/2程度残存
297	竪穴住居2	弔生土器	高环		(5.8)	(11.0)	良好	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	脚部約1/4残
298	竪穴住居2	弔生土器	副土器	20.6	(6.5)		良好	良好 2mm以下の長石・石英含む	口縁は1/10程度残存
299	竪穴住居2	弔生土器	甕		(4.3)		良好	良好 0.5mm大の砂粒を含む	一部残
300	竪穴住居2	弔生土器	甕		(4.0)		良好	良好 砂粒少	一部残
301	竪穴住居2	弔生土器	直筒甕?		(5.1)	28.9	良好	良好 砂粒少	一部残
302	竪穴住居2	弔生土器	錐形甕		(5.6)	(20.6)	良好	良好 2mm以下の長石・石英わずかに含む	底部は1/10程度残存
303	竪穴住居2	弔生土器	高环	11.7	(3.8)		良好	良好 砂粒少	
304	竪穴住居2	土師器	环		(3.3)	3.0	良好	良好 直め深かい。 環状物ほとんど含まない	底部は1/3程度残存
305	竪穴住居2	土師器	高环		(4.0)	11.6	良好	良好	底部は完残

番号	造 構	器種	器 形	測量(cm)			焼 成	胎 土	備 考
				口径	器高	底径			
306	堅穴住居2	土 師 器	环		(5.1)	24.8	良 好	良好 3mm以下の長石・石英含む	底部は1/4程度残存
307	堅穴住居2	土 師 器	环	13.6	(4.4)		良 好	良好 きめ細かい。 3mm以下の長石・石英含む	口径は1/3程度残存
308	堅穴住居2	弦 生 土 器	台付壺		(3.6)	8.2	良 好	良好 1~2mmの大砂粒含む	底部のみ約7割残
309	堅穴住居2	弦 生 土 器	台付壺		(2.7)	6.0	良 好	良好 砂粒少	脚のみ残
310	堅穴住居2	土 師 器	环	15.0	(3.7~ 3.9)	10.0	良 好	良好 きめ細かい。 2mm以下の長石・石英含む	底部は1/2程度残存
311	堅穴住居2	土 師 器	壺	7.6	(1.4~ 1.2)	5.6	良 好	良好 きめ細かい 混和物はほとんど含まない	ほぼ完存
312	堅穴住居2	花 線 岩	砾 石	(横) 129.2 221.8	(横) 24.0 21.5	(厚さ) 12.0 7.8			
313	土被1	弦 生 土 器	壺	11.7	(17.2)				
314	サブトレ2	弦 生 土 器	壺	20.0	(8.5)		良 好	やや不良 6mm以下の礫・石英含む	口径の1/4程度残存
315	サブトレ2	弦 生 土 器	堅鉢部		(7.5)		良 好	良好 2mm以下の長石・石英をやや含む	断部は1/4程度残存
316	サブトレ2	弦 生 土 器	壺		(4.2)		良 好	良好 石英・雲母をやや含む	口径部
317	サブトレ2	弦 生 土 器			(4.0)	6.6 (一ノ段 成形部)	良 好	良好 2mm以下の礫・雲母含む	底部はほぼ残存
318	サブトレ2	弦 生 土 器	鉢	27.6	(15.2)		良 好	良好 長石・石英・雲母やや含む	口径の1/3程度残存
319	サブトレ2	弦 生 土 器	壺	15.6	(5.1)		良 好	良好 黒雲母含む	口径部が1/3程度残存
320	サブトレ2	弦 生 土 器	壺	15.7	(6.5)		良 好	良好 長石・石英や含む	頭部は1/6程度残存
321	サブトレ2	弦 生 土 器	壺	17.4	(8.0)		良 好	良好 石英・雲母含む	頭部の1/3程度残存
322	サブトレ2	弦 生 土 器	壺	16.8	(4.0)		良 好	良好 2mm以下の小砂粒含む	口径部は1/4程度残存
323	サブトレ2	弦 生 土 器	壺	14.0	(6.5)		良 好	良好 2mm以下の小礫・雲母含む	口径は1/8程度残存
324	サブトレ2	土 師 器	壺		(5.1)	2.8	良 好	良好 きめ細かい。 1mm以下の礫はほとんど含まれない	底部は残存
325	サブトレ2	土 師 器	台付鉢	10.2	(6.6)		良 好	良好	口径は1/6程度残存
326	サブトレ2	弦 生 土 器	高 杯		2.8	12.4	良 好	良好 粘土はきめ細かく 1mm以上の礫はほとんど含まれない	底部が1/3程度残存
327	サブトレ2	弦 生 土 器	高环鋤部		(7.3)		良 好	良好 長石・石英や含む	1/3程度残存
328	サブトレ2	弦 生 土 器	高 杯	(23.2)	(5.8)		良 好	普通 石英・雲母含む	口辺部の1/7程度残存
329	サブトレ2	弦 生 土 器	高环鋤部		(2.8)	23.2	良 好	良好 長石・石英や含む	底部は1/5程度残存
330	堅穴住居3 埋土	弦 生 土 器	壺	20.3	(5.8)		良 好	良好 砂粒少	一部残
331	堅穴住居3	弦 生 土 器	壺	9.8	(3.1)		良 好	良好 きめ細かい 1mm以下の長石・石英含む	口径は1/7程度残存
332	堅穴住居3	土 師 器	壺	15.3	(4.9)		良 好	良好 砂粒少	一部残
333	堅穴住居3 埋土	弦 生 土 器	壺	12.2	(3.7)		良 好	良好 砂粒少(きめ細かい)	口径の一部残
334	堅穴住居3	弦 生 土 器	壺	13.2	(2.5)		良 好	良好 砂粒少	一部残
335	堅穴住居3 P-1	弦 生 土 器	台付壺		(9.4)		良 好	良好 (きめ細かい2mm以下の 長石・石英含む。雲母も多い)	頭部の1/3程度残存
336	堅穴住居2	土 師 器	口付直口 壺	11.6	(7.9)		良 好	良好 5mm以下の長石・石英含む	口径は1/10程度残存
337	堅穴住居3	土 師 器	広口壺	12.4	(6.6)		良 好	良好 2mm以下の長石・石英や多く含む	口径は1/2程度残存
338	堅穴住居3	土 師 器	小型丸 底壺	9.4	(8.8)		良 好	良好 1mm以下の長石・石英含む	口径は1/2崩壊はほぼ完存
339	堅穴住居3 埋土	土 師 器	高 壱?	16.7	(5.0)		良 好	良好 0.5~2mmの大砂粒や多い	耳部1/3残

番号	造構	器種	器形	法量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径			
340	竪穴住居3	弥生土器	鉢形器	19.0	(4.7)		良好	良好 砂粒か1mm以下の長石・石英含む	口縁は1/10程度残存
341	竪穴住居3	土師器	甕	14.9	(6.7)		良好	良好 砂粒少	一部残
342	竪穴住居3	土師器	甕	12.9	(3.7)		良好	良好 砂粒少	口縁のみ残
343	竪穴住居3	土師器	甕	15.5	(4.9)		良好	良好 0.5~1mm大の砂粒や多い	口縁の一部残
344	竪穴住居3	土師器	甕	16.2	(4.3)		良好	良好 砂粒少	一部残
345	竪穴住居3 埋土	須恵器	壺	12.1	(5.0)		良好	良好 砂粒少	約20%残
346	竪穴住居3 埋土	須恵器	壺		(3.1)		良好 (堅牢)	良好 砂粒少	底部中心に約1/4残
347	竪穴住居3 床面	緑泥片岩	瓦石						
348	竪穴住居3 下層	縄文土器					良好	0.5~1mm大の砂粒含む	
349	竪穴住居3 下層	縄文土器							
350	竪穴住居3 下層	縄文土器							
351	上土	縄文土器		27.5	(4.7)		良好	0.5mm大の砂粒多い	一部残
352	上土	縄文土器		31.8	(5.7)		良好	0.5mm大の砂粒多い	一部残
353	上土	縄文土器		18.4	(4.9)		良好	0.5mm大の砂粒含む	一部残
354	上土	縄文土器					良好	0.5~1mm大の砂粒多い	
355	竪穴住居5 埋土	弥生土器	壺	20.6	(5.0)		良好	良好 砂粒少	一部残
356	竪穴住居5 埋土	弥生土器	壺		(4.8)		良好	良好 砂粒少	一部残
357	竪穴住居5 埋土	弥生土器	高壺		(2.7)	11.0	良好	良好 砂粒少(研磨)	一部残
358	土坑2	須恵器	壺	12.9	(2.4)		良好	良好 砂粒少	一部残
359	土坑2	土師器	甕	17.0	(4.3)		良好	良好 1~2mm大の砂粒や多い	一部残
360	P-11	土師器	皿	8.0	1.0	6.3	良好	良好 砂粒少	
361	P-21	縄文土器					良好	0.5~1mm大の砂粒含む	
362	上土	縄文土器					良好	0.5~1mm大の砂粒	
363	土坑1	須恵器	短頸壺				良好	良好 0.5~1mm大の砂粒多い	完存
364	土坑1	須恵器	平瓶		12.5		やや不良 (少し軟)	良好 砂粒少	口縁部のみ欠損
365	土坑1	須恵器	高壺	12.7	7.0~7.4	9.2	やや不良 (軟質)	良好 砂粒少	90%残
366	土坑1	須恵器	高壺	10~13.9	5.1~8.8	8.7	良好	良好 0.5mm大の砂粒や多い	ほぼ完存
367	P-11	須恵器	高壺	12.1	7.4~7.9	9.3	やや不良 (少し軟)	良好 0.5~2mm大の砂粒を含む	約70%残
368	P-11	須恵器	壺	12.1~13.9	7.5~8.8	9.7	良好	良好 所々に1~2mm大の砂粒含む	約80%残
369	土坑4	土師器	皿	7.6	1.3~1.5	5.5	良好	良好 砂粒少	完存
370	土坑4	土師器	皿	7.9	1.5	6.0	良好	良好 砂粒少	完存
371	土坑4	土師器	皿	7.9	1.5	5.4	良好	良好 砂粒少	ほぼ完存
372	土坑4	土師器	皿	7.8	1.3	5.7	良好	良好 砂粒少	70%残
373	土坑4	土師器	楕	14.0	(2.9)		良好	良好 砂粒少	約30%残

番号	遺構	器種	器形	造量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径			
374	竪穴住居5	須恵器	高環		(5.7)		良 好	良好 多少1mm大の砂粒含む	
375	上土	縄文土器					良 好	0.5~1mm大の砂粒を含む	
376	上土	縄文土器					良 好	0.5~2mm大の砂粒を含む	
377	竪穴住居11	弥生土器	甕	17.6	(3.6)		良 好	良好 砂粒少	一部残
378	竪穴住居11	土師器	甕	11.2	(3.6)		良 好		一部残
379	竪穴住居11	土師器	高環?				良 好	良好 1~2mm大の砂粒や多い	
380	竪穴住居11	須恵器	环	11.1	3.5		良 好	良好 0.5~2mm大の砂粒を含む	約40%残
381	竪穴住居11	須恵器	环	12.8	2.5		良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒含む	約20%残
382	竪穴住居8	弥生土器	甕	13.2	(5.3)		良 好	やや不良 1~2mm大の砂粒多い	口縁の一部残
383	竪穴住居8	土師器	甕	13.7	(4.3)		良 好	良好 1mm大の砂粒や多い	一部残
384	竪穴住居8	土師器	甕	13.8	4.9		良 好	やや不良 1~2mm大の砂粒多い	一部残
385	竪穴住居8	土師器	甕		(5.8)		良 好	良好 (緻密)	約60%残
386	竪穴住居8	弥生土器	広口甕				良 好	良好 (緻密)	約30%残
387	竪穴住居8	弥生土器	高环脚		(2.0)	13.5	良 好	良好 砂粒少	一部残
388	竪穴住居8	弥生土器	高 环		(3.0)	17.4	良 好	良好 0.5~1mm大の砂粒	一部残
389	竪穴住居8	土師器	高 环		(2.3)	15.1			一部残
390	竪穴住居8	須恵器	环	12.0	5.0		良 好	良好 砂粒少	約20%残
391	土塙1	須恵器	环 盖	11.1	4.0		やや不良 (軟質)	やや不良 1~2mm大砂粒や多い	完存
392	土塙1	須恵器	环 盖	11.7	3.4		良 好	良好 所々に2mm大の砂粒含む	完存
393	土塙1	須恵器	环 盖	11.1	4.3		やや不良 (軟 )	良好 砂粒少	90%残
394	土塙1	須恵器	环 盖	11.3	4.1		やや不良 (軟 )	良好	90%残
395	土塙1	須恵器	短頸甕	6.8	10.5~11.5		良 好	良好 0.5~2mm大の砂粒含む	完存
396	土塙1	須恵器	平 甕		(14.8)		良 好	良好 所々に1~2mm大の砂粒含む	約80%残
397	P-13	土師器	甕	13.0	(3.3)		良 好	良好 砂粒少	約1/4破壊
398	P-14	土師器	甕		(2.3)	5.2	良 好	良好	底部周辺約40%
399	P-15	土師器	甕	5.1	1.2		良 好	良好	約70%残
400	P-8	土師器	甕		(6.7)		良 好	やや不良 1mm大の砂粒多い	
401	P-13	須恵器	甕	17.4	(1.5)				
402	P-10	須恵器	甕	6.1	(20.0)		良 好	良好 砂粒少	下半部1/3と口縁部の一部
403	P-16	瓦質土器	鍋	(32.9)	(5.3)		良 好	良好	一部残
404	P-26	土師器	土 鍋	4.9	1.2				
405	竪穴住居6	弥生土器	甕	17.6	(5.4)			やや不良 0.5~1mm大の砂粒多い	一部残
406	竪穴住居6	弥生土器	甕	14.8	(3.9)		良 好	良好 砂粒少	一部残
407	竪穴住居6	弥生土器	甕	15.0	(2.8)		良 好	良好	一部残

番号	造構	器種	器形	法量(cm)			焼成	胎土	備考
				口様	器高	底径			
408	竪穴住居6	弥生土器	甕		(3.2)				一部残
409	竪穴住居6	土師器	甕	12.6	(5.6)		良好 0.5~1mm大の砂粒やや多い	30%残	
410	竪穴住居6	土師器	甕	16.3	(5.0)		良好 0.5mm大の砂粒多い	一部残	
411	竪穴住居6	弥生土器	高耳?	10.0	(3.0)		良好 (緻密)	环部1/3残	
412	竪穴住居6	弥生土器	高环脚		(6.0)	11.3	良好 (緻密)	脚のみ残	
413	竪穴住居6	弥生土器	甕		(2.0)	7.2	良好 0.5mm大の砂粒やや多い	一部残	
414	竪穴住居6	弥生土器	高环脚				良好 0.5mm大の砂粒やや多い	一部残	
415	竪穴住居6	弥生土器	鉢	16.5	4.9~5.8		良好 0.5~1mm大の砂粒やや多い	8割残	
416	竪穴住居6	弥生土器	鉢	15.6	4.9		良好 0.5~1mm大の砂粒やや多い	40%残	
417	竪穴住居6	弥生土器	鉢	13.0	3.2		良好 (緻密)	40%残	
418	竪穴住居6	弥生土器	鉢?	17.2	(4.7)		良好		
419	竪穴住居6	弥生土器	高环		(2.9)	18.4	良好 砂粒多い		
420	竪穴住居6	弥生土器	甕		(4.7)		良好 やや不良 1~2mm大の砂粒多い		
421	竪穴住居7	弥生土器	甕	8.4	(4.5)		良好 1mm大砂粒やや多い	一部残	
422	竪穴住居7	弥生土器	鉢	14.2	(3.2)		良好 1mm大の砂粒やや多い	一部残	
423	竪穴住居7	弥生土器	甕				やや不良 1~2mm大の砂粒多い	一部残	
424	竪穴住居7	弥生土器	甕				良好 所々に1~2mm大	一部残	
425	P-5	須恵器	环酒	12.1	4.6		やや不良 砂粒少 (緻密)	90%残	
426	P-13	土師器	甕	13.7	4.0	6.2	良好 砂粒少	完存	
427	P-28	須恵器	环盖	15.3	(2.6)		良好 所々に1~2mm大の砂粒を含む	約30%残	
428	P-7	土師器	甕	7.8	1.3	4.3	良好 (緻密)	70%残	
429	上土	繩文土器	鉢	32.0	5.5			一部残	
430	溝	弥生土器	甕	21.2	(14.1)		良好 砂粒少	口様~頸部の一部残	
431	溝	弥生土器	甕	13.8	(4.3)		良好 砂粒少	一部残	
432	溝	弥生土器	甕	21.5	(4.5)		良好 1mm大の砂粒を含む		
433	溝	弥生土器	甕	14.0	(3.3)		良好 1mm大の砂粒を含む	一部残	
434	溝	弥生土器	高环	25.0	(3.3)		良好 砂粒少(緻密)	环部約1/4残	
435	溝	弥生土器	高环脚		(3.3)	18.7	良好 砂粒少	一部残	
436	溝		円柱		(5.2)	4.4			
437	土塙2	弥生土器	甕	13.5	(5.0)		良好 (緻密)	口様1/3残	
438	土塙2	弥生土器	甕	25.2	(4.1)		良好 0.5~1mm大の砂粒含む	一部残	
439	土塙4	弥生土器	甕	12.4	(2.5)		良好 (緻密)	一部残、同一の体部と思われる破片も5×5cm程度残	
440	土塙4	弥生土器	甕	22.0	(4.0)		良好 所々に2~3mm大の砂粒含む		
441	P-69	弥生土器	器台		(3.5)	25.9	良好 所々に1~3mm大の砂粒含む	一部残	

番号	遺構	器種	器形	測量(cm)			焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径			
442	P22	土師器	甕	19.7	(2.1)		良 好	良好 砂粒少	口縁の一部残
443	P56	須恵器	环	16.3	3.0		良 好	良好 砂粒少	約90%残
444	土塙5	土師器	高环	13.9	7.2	9.1	不 良	やや不良 1~2mm大の砂粒多い	90%残
445	土塙5	須恵器	环	13.5~15.0	8.0~10.5		良 好	良好 砂粒少	ほぼ完存

## 報告書抄録

ふりがな	二かねせき・すのうちいせき・ふいちじゆせき						
書名	郷道跡・須の内遺跡・古市場道路						
副書名	県営ば場整備事業（組手育成型）鹿田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査						
シリーズ名	落合町埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	4						
編著者名	切明友子・白石純						
編集・発行機関	岡山県真庭郡落合町教育委員会						
所在地	〒719-3144 岡山県真庭郡落合町垂水618 TEL0867-52-3315						
発行年月日	2004年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 追跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
郷道跡	岡山県 真庭郡 落合町 鹿田	33582	34° 59° 50°	133° 43° 55°	1997.10～12 1998.11～1999.1 1999.5～2000.3	9,600 m <sup>2</sup>	県営ば場整 備事業
須の内遺跡	岡山県 真庭郡 落合町 鹿田	33582	34° 59° 38°	133° 43° 40°	2001.6～2002.3	14,000 m <sup>2</sup>	県営ば場整 備事業
古市場道路	岡山県 真庭郡 落合町 栗原	33582	34° 58° 50°	133° 43° 00°	2000.10～2001.2 2002.6～2003.3	12,000 m <sup>2</sup>	県営ば場整 備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項		
郷道跡	官衙跡	弥生時代後期 奈良～平安時代	掘立柱建物・土壙・溝・柱穴	弥生土器・須恵器・土師器・瓦・陶器・磁器・石器・鉄滓	真庭郡衙推定地		
須の内遺跡	集落跡	古墳時代 平安時代・ 室町時代	掘立柱建物・土壙・溝・柱穴・井戸・鍛冶炉	弥生土器・須恵器・土師器・瓦・陶器・磁器・石器・鉄滓			
古市場道路	集落跡	弥生時代後期 古墳時代 中世	竪穴住居・溝・土壙・柱穴・鍛冶炉・井戸	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・瓦・陶器・磁器・石器・鉄滓			

落合町埋蔵文化財発掘調査報告書 4

郡 遺 跡

須の内遺跡

古市場遺跡

2004年3月10日 印刷

2004年3月31日 発行

編集発行 落合町教育委員会  
岡山県真庭郡落合町垂水618

印刷 有限会社 落合印刷  
岡山県真庭郡落合町垂水1061-2